

人一本者
に作る (712)

にげかへれ
に作る

眞實の下
字無しの

申さんずる。かざらぬ心根は。たとへば盗人有て。人の財を思かけてぬすまんと思ふ心は底に深けれども。面はさりげなき様にもてなして。構てあやしげなる色を。人に見えじと思はんがごとし。其盗心は人全くしらねば。すこしもかざらぬ心也。決定往生せんずる心も又如此。人多くあつまり居たる中にも。念佛申色を人に見せずして。心に忘るまじきなり。其時の念佛は佛ならでは。誰か是を知べき。佛しらせたまはく。往生なんぞ疑はんと仰られければ。教阿彌陀佛申さく。決定往生の法門こそ心得候ぬれ。既に悟りきはめ侍り。今聊の不審も侍らず。此仰を承ざらましかば。此度の往生はあやうく候なまし。但此仰のごとくにては。人の前にて念珠をくり。口をはたらかす事は。有まじくや候らんと。上人曰。其又僻胤なり。念佛者の本意は常念を詮とす。されば念々相續せよとこそ勸られたれ。たとへば世間の人を見るに。同人な

れども豪臆あひわかれて。憶病の人に成ぬれば。身のためくるしかるまじき聊のいかりをも。おぢをそれて。にげかくる。豪の者に成ぬれば。命を失ふべきこはきてきの。しかも逃かくれなば。助るべきなれども。すこしも恐れず。一しざりもせざるがごとし。是が様に眞偽の二類あり。地體いつはり性にしてかざる心あるもの。身の爲に要なき聊の事をも。必ずいつはりかざる也。もとより眞の心ありて虚言せぬものは。聊の矯偽して。身の爲に大きに其益あるべき事なれども。身の利益をばかへりみず。底に眞ありて少もかざる心なし。これ皆本性にうけて生れたる所也。その實の心のものの往生せんとおもひて。念佛に歸したらんには。いかなる所。いかなる人のまへにて申とも。すこしもかざる心あるまじければ。是眞實心の念佛にして。決定往生すべき也。何ぞ是をいましめん。又地體は偽性にして。世間さまに付ては。聊不實の事も有しか

眞實の下
字無しの

侍つる故
に作る

體一本
心に作る (713)

ども。知識にあひて發心して。往生せんと思ふ心深く成ぬれば。念々相續せんと思て。いかなる所。いかなる人のまへにても。無想にひた申に申さんもの。是又眞實心の念佛なれば。決定往生すべき也。全く制の限にあらず。今云所は三心の中に一心も闕ぬれば。往生せずと釋し給へるに。三心の中の眞實心。人毎に發し難ければ。其眞實心を發べき様を云ばかり也。さればとて只の時念佛申そとは。いかゞ勸むべきと。また教阿彌陀佛申て云。さきに仰の侍つる故に。夜念佛申さんには必ず起居侍べきか。又念珠袈裟をとり侍べきかと。上人曰。念佛の行は行住坐臥をさらはぬ事なれば。ふして申さんとも。居て申さんとも。心にまかせ時によるべし。念珠をとり。けさをかくる事も。又折により體に隨べし。只所詮威儀はいかにもあれ。此度構て往生せんと思ひて。實しく念佛申さんのみぞ大切なると仰られければ。教阿彌陀佛。

歡喜踊躍して。合掌禮拜して罷出にけり。翌日に法蓮房信空のもとへ行て。教阿彌陀佛こそ坂東の方へ修行し侍れ。昨日上人授させ給へる決定往生の義とて申出して。今度の往生はすこしも疑なきよし悦申て。その翌日東國へ下向しぬ。其後。上人御前にて。信空上人此事を申出して。さる事の侍けるやらんと申されければ。其事也。さるふるき盗人と聞置たりし間。對機說法して侍りき。一定心得たりけるにこそ見へしかとぞ仰られける。教阿彌陀佛は。坂東にくだりて。幾ほどもなくて所勞つきて。最後の時。同行に語云。わが往生は決定也。是則上人の仰のすえを信じて。往生の故實を存知したる故也。往生の様必上人へ申せと遺言して。正念に住し。念佛數十遍唱ておはりにけり。遺言に任せて。やがて。同行京へ上て。往生の様をくわしく上人に申ければ。よく心得たりと見へしが。相違せざりけりとして仰られけるは。今生には大惡黨の張

暗一本具
に作る

一本申べ
きなりの
下にとぞ
の二字あ

不照一本
不思に作

本として。人を殺し財を奪を業として。人に過たる罪人なれば。先業の修因。又悪のきはまりなる事暗にしたられたりける罪人なれども。本願の念佛に歸しぬれば往生に障なし。況其餘の人をや。またく罪の輕重をいふべからず。只念佛を申べきなり。

五 女人往生願事

或時宮仕人かとおぼしくて。尋常なる尼の房達あまた友なひて。上人へ参りて。罪ふかき我がごときの五障の女人も。念佛を申せば。極樂に往生すべきよし仰の候なるは。誠に侍るやらん。明にうけ給りたきよし申ければ。仰られけるは。彌陀の大願をたのむより外は。女人更に往生の望を遂べからず。大願の忝事をよくくさかるべし。女人は障重く罪深が故に。一切の所にはみな嫌れたり。是則内に五障あり。外に三従あるがゆへ也。五障と云へるは。一には梵天王とならず。二には帝釋とならず。三には魔王とな

らず。四には轉輪王とならず。五には佛身とならずといへり。既に大梵高臺の閣にもさらはれて。梵衆。梵輔の雲をのぞむ事なく。帝釋柔軟の床にもくだされて。三十三天の花をもてあそぶ事なし。六天魔王の位。四種輪王の跡。望をたえて。影をさらざれば。天上天下のいやしき果報。無常生滅の拙き身にだにもならず。況諸佛の淨土をもひよるべからず。日本國にだにも。貴くやんごとなき靈地靈驗の砌には。皆悉くさらはれたり。所謂比叡山は傳教大師の建立。桓武天皇の御願なり。大師自結界して。谷をさかひ峯を限て。女人の形をえられざれば。一乗の峯たかく顯て。五障の雲たなびく事なく。藥師醫王の靈像は。耳にさして目には見えず。大師結界の靈地は。遠く見てちかくのぞまず。高野山は弘法大師結界の峯。眞言上乘繁昌の地也。三密の月輪遍く照といへども。女人非器のやみをば不照。五瓶の智水ひとしく流と云へども。女人垢穢

のあかをば灌がず。聖武天王の御願。十六丈金銅の舍那のまへには。遙にこれを拜見すといへども。なを扉の内には入られず。天智天皇の建立。五丈石像の彌勒のまへには。仰て是を禮拜すれども。なを壇の上には障りあり。金峯山の雲の上。醍醐のかすみのそこまでも。女人更にかげをささず。悲哉。兩足ありといへども。登ざる峯あり。ふまざる佛の庭あり。恥かな。兩眼明かなりといへども。見ざる靈地あり。拜せざる靈像あり。此の穢土の瓦礫荆蕪の山澤。泥木素像の佛にだにも。なを其障あるほどのつみ重き身なれば。諸經諸論の中にも嫌はれ。在々所々にも擲出せられて。三途八難にあらざるよりは。おもひくべき方もなく。六趣四生にあらざるよりは。うくべき形もなく。されば道宣は經を引て。十方世界に女人ある所には必地獄ありと釋し給へり。如此三世諸佛に捨はてられ。十方淨土にも門をさされたる罪惡の女人をば。只彌

陀のみぞ助救はんといふ願を發給へる。誠にたのもしかるべき者也。所謂四十八願の中の第十八の念佛往生の願に。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。とかひ給へば。一切善惡の男女皆是にもれたるはなけれども。第三十五の願に別して女人往生の願を立給へり。是則女人は一切の事をいいてうたがひをなす間。十方衆生とちかひ給へども。つみふかき女人はよも入じとうたがひて。念佛往生のやくにもれぬべきがゆへに。別して女人往生の願をば建給へる也。つたなき穢土の境にだにも猶嫌はれて。障重き女人なれども。本願をたのみて名號を唱へば。出過三界。万徳究竟の報土にむかへとらんと願じたまへる廣大慈悲のかたじけなきは。申に詞をもつて述がたきもの也。善導和尚。今の女人往生の願を釋し給へるには。彌陀の大願力に乗ずるがゆへに。女人佛の名號を稱すれば。命終の時。女身を轉じて男子

女人一本
女身に作

座一本
座に作

と成事を得て。彌陀手を授け。菩薩身を扶て寶花のうへに坐せしめ。佛にしたがひ奉て往生して無生を悟とも釋し。又一切の女人。若彌陀の本願力によらずば。千劫萬劫恆沙劫を経て。速に女人を轉ずることを得べからずとも釋し給へり。此度彌陀の本願にすがりて極樂にまいらずしては。無量劫にも女人をば轉ずべからず。無始より以來女人の身をうけたりき。今より後なを六道四生に輪迴せん間も。形をかへすがたをあらたむといふこと有とも。なを女身をうけ。一切心にまかせざらんは悲かるべき事也。況女身を改ざるのみに非ず。三途八難の底に沈て重苦をうけん事。後悔すとも誰かこれをすくはん。今幸に彌陀の本願にあひ奉て。名號を唱る計の行によりて。最後臨終に男子の身となされ參らせて。彌陀如來の御迎にあづかり。觀音。大勢至の金蓮に乗じ。無數化佛。無量の聖衆に圍繞せられ奉て。須臾の間に無漏の報土に往生

する時。三惑頓につき。二死永く除き。長夜こゝにあけ。覺月正に圓なり。四智圓明の春の花には。三十二相の色あざやかにひらけ。三身即一の秋の空には。八十種好の月清くすみり。位は妙覺高貴の位。四海灌頂の法王也。形は佛果圓滿の形。三點法性の聖容にして。無邊の快樂にほこらん事は。豈悦にあらずや。努々念佛に物うかるべからず。惡道に墮て万の苦をうけんよりは。やすき念佛を申て樂を得べきものなりとて。本願の貴くたのもしき次第をかきくどきのたまひければ。其座に侍ける女房ども皆泪をながして。念佛の門に入りにけり。是を傳きかん女人。寧念佛にいさみなからんや。

六 作佛房往生事

遠江國に作佛房といへる山臥侍りき。役行者の跡をおひ。山林斗藪の行を立て。大峯を經歷すること數ヶ座。惣じて熊野參詣のあゆみをはこぶ事四十八度也。偏に後生の事を祈て。曾て現世

數返一本
數返に作
都一本
都一本城
天照大神
本願大神
神作本朝

の望なし。證誠殿に通夜して年來いのる所は。只是後世菩提也。早出離の道を示し給へと祈請しけるに。當時京都に法然房と云ふ聖あり。行て出離の道を。たづぬべしと示現を蒙て。即上洛して上人に參りて。淨土の法門を學し。念佛往生の道を承定て後。本國に還て稱名の外他事なし。本より孤獨の身なれば同行もなし。知識もなし。病をうけざればくらしみなし。療治の煩なし。往生の期至ければ。道場に入て西にむかひて。自鐘をならし。高聲念佛數尅。端坐合掌して往生を遂き。紫雲に驚き異香に付て。諸人集來縁をむすぶ。希代の不思議。國中の口遊にてぞありける。抑熊野山證誠權現の本地阿彌陀如來也。神明と顯て無福の衆生に福をあたへんとちかひ給へるも。せめてのじひの餘に。貪欲至盛にして。偏に今生の榮耀にほだされながら。後生の苦患を忘れたる衆生の。人身をうけたるしるしもなく。此たび本願にもれて尙惡道にかへる

べき輩を救はんが爲の濟度の方便なれば。當山に參て後世菩提を祈る人は。流にさほさすがごとし。本願の正意に相叶が故に。一人としても順次に生死を出ざるはなし。されば當山に九品の鳥居を立られたるは。九品引接の御本意を顯さるゝ所也。然ば當山參詣の人は。内には本地の悲願をたのみ。外には垂跡の擁護をあふぎて。只偏に順次の往生の志を先とすべき也。凡は當山にも不限。神明の利生。和光の方便は。何も皆本地寂光の都より入重玄門の里に出て。罪惡の凡夫に近づき。無漏の淨刹に導給はんがため也。其中に天照大神の本願諸神の父母也。生ずるをば生氣といひて。五十日をいみ。死をば死氣といひて。又五十日をいむ。死は生より來る。生は死の初なるゆへに。死生ともに同日數を忌るゝは。流轉生死の有漏の里を厭すて。不生不滅の無漏の都に尋入と也。本迹雖殊不思議一なれば。生死解脱の本意かはる事なし。これは

漢家には佛法をひろめんが爲に。儒童。迦葉。定光三人の菩薩。孔子。老子。顔回と生て。先外典を以て人の心をやはらげ。後に佛法を流布せしかば。人皆是を信じし。我朝には和光明神。先跡を垂て。人のあらしき心をやはらげて。佛法を信ずる方便とし給へり。青き事は藍より出て。藍よりも青し。貴きことは佛より出て佛よりも貴は。只是和光明神の利益也。我朝の古徳みな寺をたて給ひし時。必ず先鎮守を祟め。守護神を勧請する事は。和光の方便を離ては佛法立難きゆへ也。吾國に生を受けん人は本地の深き利益を仰ぎ。和光の深き方便を信ずべきもの也。遠事は且くをく。承久逆亂の時。諸國庄園をだしき所なかりしかば。あやししのしづの男。賤女までも。みな家を捨て。佛寺の帳内にこもり。里を離て神社のつゝ垣のうちにあつまりき。尾張國あつ田の社に。國中の上下羣集せし中に。或は昨日親にをくれたるものもあり。或

は今日子を生るものもあり。神官宮人しきりに制止すれどもかなはざりしかば。大明神をおろし奉りて御詫宣をあふぐべしとて。御神樂をまいらせ。諸人同心に祈請せしに。一の禰宜に詫して。我天より下て此國に跡をたるゝ事は。万人をはぐくまんが爲也。然に今天魔國を亂り。人民心を失へり。和光の擁護豈此時にあらずや。折にこそよれ。忌ましきぞと仰られしかば。諸人一同にこゑをあげて。渴仰の涙をながし。隨喜の袖をしぼりき。これ全く後世の資糧にあらざといへども。時に當て擁護如此。何況後世菩提をいのらんにあきてあや。されば今生をいのるよりも。後生を申を殊に明神納受し給ふ證據。少々是を出さば。昔園城寺。山門の爲に焼拂はれて堂塔僧坊佛像經卷のこる所なかりしかば。寺僧も山野にまよひ。靈地も礎の跡のみ残りし。或寺僧一人。新羅大明神へ参りて通夜したりし夜のゆめに。神殿御戸をひらきて。御心

一本一人に作る
一本一人に作る
一本一人に作る
一本一人に作る

東塔一本
本坊一本
運一本
運一本

地よげに見へさせ給ひければ。此寺の佛法を守らむと御誓あり。寺門の滅亡いかばかりか御歎も深からんと存ずるに。何事にか御氣色快然なるやと申ければ。誠に其歎き深しといへども。此事によりて眞實道心を發せる寺僧一人ある事よろこばしき也。堂舎佛閣は財寶あらば作ぬべし。菩提心を起せる人は千万人の中にも稀なるべしと仰らるゝと見て。夢覺ぬ。後彼僧も應て發心して實の道に入にき。山門の桓舜僧都と云ひし者。貧道無力を歎て。山王に祈請せしに。其しるしなかりしかば。山王を恨奉て。離山して稻荷の社に祈請せし時。千石と云ふ札を額にをさせたもふと。夢に見て悦思ふ處に。後日の夢に日吉山王の御制止あれば。先の札を召返す也と示し給ふ間。夢の中に申けるは。我御計こそましまさざらめ。よ所の御惠をさへも障礙こそ心得がたく侍れと申時。我は小神にて思ひもわかず。日吉は大神にて知らせ給ふゆへに。桓

舜は此度生死を離るべきもの也。若今生の榮果あらば。障と成て出離かたかるべきゆへに。申とも聞入ぬ也と仰の侍れば。取返すなりと仰られける時。夢の心地にも實に深き御慈悲の程の辱なく覺へければ。夢さめて後やがて本山にかへりて。一筋に後生菩提をいのりて。遂に往生を遂ぎ。行基菩薩の御遺誠に一世榮果利養は。多生輪廻の基也と書れたるも。思合られ侍り。後世を祈り。實の道に入を感應有事は何の神も皆同御心也。それにとりて出離の道區々なりといへども。末世相應の念佛をすゝめて往生をいのるを。誠に神明の御本意とし給へり。其證據少々是をいださば。日吉山王の社頭に不斷念佛をはじめをかるべきのよし。保延三年八月廿三日の夜。東塔の慈門坊賢運が夢に示し給て聖眞子のやしろに不斷念佛をはじめをきて後。第三日の夜。横川の般若谷の玉泉坊。此念佛結縁の爲に。通夜して念佛を勤しに。行道の間立なが

らちと睡眠せる夢に。神殿のみすをかゝげて。貴僧の體に覺へて。

ちはやふる玉のすたれをまさあけて

念佛のこゑをさくそうれしき

と示されける。御こゑを通夜したる人兩三人。或はねぶりて夢の内には是をさく人もあり。或はふしながら現にこれをさく人もあり。互に是をかたりて神明の感應を喜び。渴仰の頭を傾ける。傳聞諸人。我をとらじと念佛をつとめけるに。楞嚴院解脫谷の南光坊阿闍梨靜朝と云ひしもの。此念佛を勤修せざる間。或時のゆめに。社頭へまいりてみやめぐりしけるに。先大宮人まいりてそれより聖眞子の社へまいりぬ。寶前の庭を見れば。鏡のごとく内外明了にして。瑠璃大地のごとし。是を見るに誠に心もいさぎよく身も涼しき心地也。法施奉て後。氣比聖女の方へ過ゆかんとするに。神殿より高さ三尺計の金色の貴僧出まし〜て。此前を行過る事叶へか

らず。罷歸れと仰らるゝ間。諸人皆通過候めり。靜朝にかぎりて歸り候はん事は。歎入候よしを申に。彼行過諸人は皆聖眞子の不斷念佛をつとめたるもの也。汝はいまだかの念佛に結縁せず。早く罷かへれと示さるゝと見て夢さめぬ。聽て懺悔を致し。殊に信心を深くして。在生の間懈怠なく念佛を勤き。勢多の尼と云ひしもの。賀茂の社へまいりたりけるに。神供を備へけるを見て。此神はことに何をかは好み侍らん。尋て參らせばやと。氏人に申ければ。とりわき何ものを御好と云ふ事なし。只志によるべしと返答す。此尼其夜のゆめに。賀茂の大明神。わがこのむものは念佛也。好物をたむくべくば。念佛を申べしと示し給ひければ。能聲の念佛者をあつめて。社頭にして七日の間。勇猛精進の念佛を勤修して法樂せり。中比往生をいのるもの二人侍りき。八幡へ參て祈請しける様。二人は意巧ことなり。一人は念佛申て往生すべくば。念

上なきに本變なきに作る

佛の法門にとりていかなる甚深の義を學して往生すべく候ぞ示し給へと祈。一人は念佛の外になを入たちて。甚深の法門を學して往生すべく候はん。然ばいかなる法門にて候。これを示し給へと祈りけるに。七日滿ずる夜二人同ふしたる夢の中に。

あらはやな又もあらはやをしゆへき

南無と唱ふることの外には

と。二人ともに此告を蒙て。夢覺て後是を語らんとしけるが。我うけ給はりつるやうを。互に書付て出さんといひて。別々に書て出せば。たゞ同歌にてぞ有ける。念佛の法門にとりて。名號のほかに甚深の義をさかんと云。其儀不可然。又餘の法門の甚深ならんをさかんと申も不可然候。往生の業には。只南無阿彌陀佛と唱ふる外には。又子細もあるまじさぞと示されけるうへには。名號を唱て往生を願を。神明の感應ありといふ事明かなり。されば彼の御詫宣に

は。

我昔出家名法藏。得成報身住淨土。

今來娑婆世界中。即爲護念念佛人。

とて。念佛のものをのみ守るぞと仰られたれ。佛の慈悲をたのむにも。神の和光をあふぐも。たゞ念佛を唱て往生を願ふべき也。

法然上人傳記卷第四下

七 熊谷入道往生事

八 禪勝上人事

九 津戸三郎被召將軍御所事

十 尼妙眞往生事

七 熊谷入道往生事

武藏國の御家人熊谷次郎直實は。平家追討の度々の合戦に忠をいたしき。中にも一谷の合戦に高名を極めしかば。武勇の名を一天に揚。弓箭の徳を四海に流して。上なき武人也しと。人みなこ

れをしれり。しかるに發心時いたりけるにや。右大將家を嫉み申事有て。俄に出家して法名を戀西とぞ申ける。はじめは伊豆國走湯山に參上しけるが。上人の念佛弘通の次第を。京都より下れる尼公の語り申けるをきいて。やがて上洛して。先澄憲法印のもとへ向ひて。見參に入べきよしを申入て。對面を相待ほどの手すさみに。刀をときけるを。何事の料ぞと人申ければ。これへ參るは後生の事を尋申さん爲也。若腹もさきり命を捨て。後世は助からんずるぞと承らば。やがて腹をも切らん料也とぞ申ける。法師此事を聞きたまひて。さる高名のものなれば。定めて存知あるらんとて。後生助かる道は法然房に可被尋申とて。使をそへて上人に引導せられければ。上人へ參り。後世の事を尋申けるに。念佛だにも申せば往生はする也。別の事なしと仰られけるをうけ給て。さめくと泣ければ。けしからず思召て物をもおぼせられず。暫く有て

後。何事に泣給ふと仰られければ。命をも捨て手足をも切てぞ。後生は助からんずるとぞ承らんずらんとぞんずる所に。只念佛だにも申せば往生はするぞとやすくと仰をかふむり侍れば。餘にうれしくて泣き侍るよしをぞ申ける。一文不通のあら武者なりといへども。誠に後世をおそれたるものと見えければ。無智の罪人の念佛申て往生すること。本願の正意なりとて。口稱念佛凡夫直往の要路なるよし。常に示し給ひければ。二心なき專修の行者にてぞありける。もし命をもすて、後生助かれとならば。腹をさらん爲の用意にもちたりける刀をば。念佛申て往生すべきよしを承り定めぬるうへはとて。上人に參らせければ。上人より津戸三郎に給て秘藏しける。或時上人月輪殿へ參られけるに。熊谷入道推參して御ともにもまいりけるを。とめばやと思召けれども。さるくせ者なれば。中々あしかりぬと思食て。被仰旨なかりければ。

月輪殿まで参りて。くつぬぎにありて。縁に手うちかけて。よりかゝりて侍けるが。御談義のこゑの幽に聞えければ。此入道申けるは。あはれ穢土ほどの口惜所はあらじ。極樂にはかゝる差別あるまじきものを。談義の御こゑもきこえばこそと。しかり聲に。高聲に申けるを。禪定殿下さし召して。なにもものぞと仰られければ。熊谷入道とて。武藏國より罷のぼりたるくせもの候が。推參に共をして候とおぼえ候と上人申されければ。やましきもの何かくるしかるべき。只めせとて御使を出されてめされけるに。一言の式代に及ばず。やがてめしに隨て同坐をたまはり。近々祇候して聽聞仕りけり。往生極樂は當來の果報なを遠し。忽ちに堂上をゆるさず。今生の果報を感じぬる事。本願念佛を行ぜずば。争か此式に及べきと。耳目驚てぞ見えける。白地にも西をうしろにせざりければ。京より關東へ下ける時も。さかさまに馬には乗ける

とかや。念々相續して畢命爲期の外。他事なかりけるが。建永元年八月に。蓮西は。明年二月八日往生すべきなり。申所もし不審を殘さん人は。來臨して見知すべきよし。武藏國村岡の市庭に札をたてける間。傳へさく輩遠近を分ず。武藏。相摸。甲斐。信濃。越後。上野等の國々より。熊谷が宿所へ羣集する事いく千萬といふ事を知らず。すてに其日になりければ。蓮西未時に沐浴して。禮盤に上りて高聲念佛。體をせむる事たとえん物なし。暫く有て蓮西目を開て今日の往生は延引すべし。來九月四日必ず本意を遂へし。其日各來臨あるべきよしを示しければ。羣集の諸人そしりをなして歸りぬ。戀西が妻子眷屬等は。人のあざけりをかなしみ。蓮西が實なき事を歎ければ。彌陀如來の御告によりて來九月を契る所也。全く蓮西が私の計にあらず。九月の往生もしなを延引せば。彌陀如來の御をらごとなるべし。更に蓮西が不實には不可成と。こと

くしげにぞ申ける。さてひまゆく駒の足はや
 ければ。九月四日にもなりぬ。後夜に沐浴して
 漸臨終の用意あり。諸人また羣集する事盛なる
 市をなす。蓮西洛陽より武州へ下ける時。來迎
 の彌陀の三尊。無數の化佛菩薩を。上人の意巧
 にてかゝせられて祕藏せられけるを。京つとに
 給たりけるを。臨終佛にかけ奉りて。禮盤にの
 ぼり。端坐合掌して。高聲念佛熾盛にして。已尅
 に念佛とともに息とゞまる時。口より小光を放
 つ。長さ五六寸也。紫雲目をすまし。音樂耳
 を驚かす。異香室にみち大地震動せり。奇瑞一
 にあらず。諸人言語を絶す。翌日子刻に入棺。
 此時又異香音樂の瑞相先のごとし。同き卯の時
 にいたりて。紫雲西よりきたりて家のうゑにと
 ゞまる事一時餘りありて後。西の天をさしての
 ぼりぬ。是等の瑞相等遺言に任て。聖覺法印の
 許へ注し送れり。本願稱名の不思議。諸佛證誠
 の誠言まことに言語の及所に非ず。貴といふも

かへりてをろかなるものか。

八 禪勝房事

遠江國蓮花寺の禪勝房は。熊谷入道の勸により
 て。吉水の御坊へ參て。無智の罪人の極樂淨土
 に往生する事の侍るなるをうけたまはらんと申
 ければ。上人仰られけるは。其極樂のあるじに
 ておはします阿彌陀佛こそ。何事をもしらぬ罪
 人どもの。諸佛菩薩にも捨はてられ。十方の淨
 土にも門をさゝれたる輩を。やす／＼と助救は
 んといふ願を發して。十方世界の衆生を來迎し
 給ふ佛よ。かしこくぞ思ひより給ける。心を靜
 めてよく／＼さかるべし。唐土より日本へ渡し
 まいらせたる一切經は五千餘卷あり。その中に
 往生極樂の爲にとて。双卷無量壽經。觀無量壽
 經。小阿彌陀經。これを淨土の三部經と名く。
 無量壽經には昔法藏比丘と申入道。四十八願を
 發して。極樂淨土を建立して。眞實に往生せん
 とおもふ衆生をむかへをさて。遂には佛になさ

せ給ふ也。佛に成らんと思はん人は。先極樂を欣
 ふべき也。法藏比丘。一切衆生を平等に往生せ
 させんれうに。我佛になりたらん時の名號を稱
 念せせんといふ願を發したまへる四十八願の
 中の第十八の願是也とて。本願の由來。念佛し
 て往生すべき趣きくはしくおほせきかせられて
 後。一百餘日祇候して。條々の不審を上人にた
 づね申ける中に。一の疑に。三心の事を尋申け
 るに。上人のたまはく。三心を具する者は。必
 ず彼國に生と説給へり。此三心は本願の至心信
 樂欲生我國の文を成就する文也。然則念佛せん
 人は。此三心を具して念佛すべきなり。一に至
 誠心と云は阿彌陀佛をたのみ奉る心なり。二に
 信樂と云は常に名號を唱て往生をうたがはぬな
 り。三に回向發願心と云は往生して衆生を利益
 せんと思ふ心也。譬を以ていはく。人有て一の
 太刀をもちたらんに。此太刀は御身の造り給へ
 るかど人とは。我は手づつにて何事もせぬも

のにて候。人のたまひて候也と答へば。人もま
 いらせたれば。わどのゝ爲には財かと又とへば。
 さ候と答ふ。太刀をまうくるは至誠心也。此太
 刀は大事の物なり。あだにせじと思は深心也。
 さてわれにももち物をさらんは。回向發願心也。
 しかのごとく本願にあふは至誠心也。名號をも
 ちて常に唱て。餘行の人にひやぶられざるは
 深心也。往生せんと思ふは回向心也。又女人に
 三心を心得ん時は。御前の袋を一つまうけてま
 しまさんに。あけて見れば万の財を入たり。袋
 をまうくるは至誠心なり。此袋には大事の物を
 入たり。あだにせじとおもふは深心也。中にあ
 るものをとりいだして要事につかふは回向心
 也。しかのごとく。本願にあふは袋を儲たるがご
 とし。此名號の中には。阿彌陀佛の初發心より
 乃至佛にならせ給て。六度万行一切の功徳を造
 あつめて。名號に納めて。衆生に與へ給へる名
 號なれば。おろそかにせじとて。別解別行の人

念一
念佛
念作

にもいひやぶられずして。南無阿彌陀佛と唱るは。不思議の本願なるによりて。かゝる罪人ども浄土へ迎へられ。生死を離れずらんと思ひかためて。もし手はふさがらば数はとらずとも。命終らんまで。口に常に唱るを深心と云也。又のやうはたとへば人の敵をもちたらんに。敵はつはものなるを。我はよはくしてうつに及ばざらん。我敵にまさりたる兵もの。われをたのまばうちとらせんといはん。悦てたのむて宮仕をせばやくそくをたがへず。敵を討也。討ものをたのむは至誠心也。宮仕へするは深心也。敵を討は回向發願心也。しかのごとく我等衆生は。無始より已來惡業煩惱の敵にせめられて。六道四生に輪回して生死を離べきやうなきに阿彌陀佛の。われに歸し我をたのまば。煩惱の敵をうちとさせんと御誓あれば。佛をたのみ奉は至誠心也。名號を唱ておこたりなく。佛に宮仕へ奉るは深心也。最後臨終に來迎にあづかりて

生死を離るは回向心也。三心具足する計やすき事はなしと。人には教へよとぞ仰られける。又一のうたがひに云。三心具すべき次第を。々様に習まいらせ侍ぬれば。是の身には三心は具し侍べし。在家の人の三心の義も知らず習はて。只念佛ばかり申侍らんは。此三心は具すまじく侍やらんと。上人曰。三心と云は。一向專修の念佛者に成るみちをおしへたる也。無智の罪人なりとも。一向專修の念佛者に成ぬれば。皆ことごとく三心を具して往生せん事は決定也。故にならひ知りて一向專修になる人もあり。三心と云名だにも知ざれども。一向專修の念佛者に成人もあり。一向に佛の願をたのみ奉るは至誠心也。ふかく信じて名號を唱て。念念相續して。畢命を期として退轉なきは深心也。往生を願ふは回向發願心也。たとへば手づつなる者の。手さゝのしたる物を得たるが如し。衆生は手づつにて。万の功徳を造らざれども阿彌陀佛。万の

一本
集
作

正定
之
下
字
あり

功徳を造りあつめし名號におさめて。衆生にあたへ給へる也。又人の子は幼れども。親の慈悲をもて。万のたからを儲て子に譲るがごとし。三心の教文おほけれども。如此心得るとぞ仰られける。又一の疑には。本願の一念は平生の機。臨終の機に通ずべくやらんと申ければ。上人曰。一念の願は命つゞまりて。二念に及ばざる機の爲也。上盡一形共釋し。念々不捨者は名正定業共判給へる。是則平生の機なり。本願にあふ遅速の不同あれば。上盡一形下至十聲と發し給へる也。必ず一念を佛の本願と云ふべからず。一念十念の本願なれば。強にはげますとも有なんと云人の有は大なるあやまり也。設我得佛。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺といへる本願の文の中には。平生の機あり。臨終の機あり。乃至は平生の機。十念は臨終の機なり。平生の機は乃至十年申て生れ。乃至一年申て生れ。乃至一月申て生れ。乃

至一日申て生れ。乃至一時申てひまる。是皆壽命の長短。發心の遅速に由る也。これらはみな一たび發心して後。淨土まで申べき尋常の機なり。臨終の機といへるは。病せまり命一念十念につゞまりて後。知識の教によりて。初て本願にあへる機也。臨終のために發し給へる一念十念を平生に引上て。一念十念にも生るれば。念佛はゆるなれども。往生不定には思へべからずと申人は。ゆるしきあやまり也。念々不捨者。是名正定之業。順彼佛願故の釋は。本願の中の乃至の機の。上盡一形に數返を勵みて。本願に相應すべき道理を釋しあらはし給へる也。一念に往生たりぬと信じて。念佛懈怠ならん人は。信をもて行をさまたげたる也。又數返の功徳つみてこそ生るなれ。一念十念に生るべからずといへる人は。行をもて信を妨たる也。然則信をば一念に生ると信じて。行をば一形に勵むべしとぞ仰られける。又一の疑に云。持戒の

一か候
い候
心候
作候
に候
と候
一本論
あらん
るに

(728)

一たて
たて
本絶
るに
るに
作へ

もの、念佛の數返の少候と。破戒のもの、念佛の數返多く候と。往生の後、位の淺深いか候べきと申ければ、所居の疊を指て曰、疊の有に付て破れたると。不_レ破との論也。全く疊なくば如何ぞ破たると破ざるを論哉。その様に末法の中には持戒もなく、破戒もなし。只名字の比丘のみ有り。傳教大師の末法燈明記に、くはしく此旨をあかし給へる。其上に、持戒破戒のさたあるべからず。如是凡夫のために發す所の本願也。いそぎても、名號を稱べしとぞ仰られける。又一のうたがひに云、念佛の行者毎日の所作にこゑをたてたる人もあり。又心に念じて數をとる人もあり。何を本とすべく候やらんと申ければ、口に唱へ心に念ずる同名號なれば、いづれも、皆往生の業となるべし。但佛の本願は稱名とたてたまへるゆへに、こゑを出すべき也。經には令聲不絶具足十念と説。釋には稱我名號下至十聲と判じ給へり。我耳にきこゆる

ほどを高聲念佛とはする也。但譏嫌をせず。高聲すべきにはあらず。地體はこゑに出さんと思べき也。又一の疑云、餘佛餘經に付て結緣助成せん事は、雜行と成べく候やらんと申ければ、決定往生の信をとりて、佛の本願に乗じてのうへには、他の善根に結緣助成せん事。全く雜行と成べからず。往生の助業と成べき也。善導の釋の中に、已に他の善根を隨喜し、自他の善根をもて、淨土に向向すと判じ給へる。此釋をもて可_レ知_レ之とぞ被_レ仰ける。又一の疑云、自力他力と申事は、何様にか心得侍るべきと申ければ、源空はいふかひなき邊國の士民也。昇殿すべき器にあらずと云とも。君よりめされしかば二度まで殿上へまいりたりき。是全可_レ參器量にはあらず。上の御計也。此定に極重惡人。無他方便の凡夫は曾て報身報土の極樂世界へ可_レ參器にはあらねども、阿彌陀佛の御力なれば、稱名の本願にこたえて來迎にあづからん事。何の不審か可有。我

一十方
の
本
世
界
の
二
字
あ
り
ま
い
る
に
一
本
生
る
に
作
る

(729)

身の罪重無智のものなればいかゞ往生をとげんと不可_レ疑。左様にうたがはんものはいまだ佛の願を知ざるもの也。如是の罪人を渡さんがために發す所の本願也。此名號を唱へながらゆめ、うたがふ事あるべからず。十方衆生のくわんの中は、有智無智。有罪無罪。善人惡人。持戒破戒。男子女人。乃至三寶滅盡の後の百歳の間の衆生までも、もるゝ事なし。彼三寶滅盡の念佛の衆生と。當時の汝等と是をならぶるに。當世の人は佛のごとく也。彼時の人は命長きは十歳也。戒定惠の三學。其名をだにもさかずといへり。此等の衆生までも念佛すれば、來迎に預べしと知ながら、我身捨らるべしと云事をば、いかゞ心得いたすべきや。但極樂のねがはれず。念佛の申されざらん計は、往生のさはりと成べし。念佛に倦き人は、無量の寶を失べき人も。念佛にいさみある人は、無邊の悟を開くべき人も。相構て願往生の心にて念佛を相續す

べき也。我力にてはおもひよるまじき罪人の念佛するがゆへに、本願に乗じて極樂へまいるを他力の願とも超世の願とも云也。案内を知ざる人は機をうたがひて往生せざる也。道心者智者などの念佛こそ往生はしたまふらめ。朝暮罪をのみつくりて一文をだにも知らんものは、念佛申とも。往生不定とうたがふものは、本願には善惡の機を兼て發し給へりと知らぬ人も。念佛の機は、たゞ生れ付のまゝにて、申て生るゝ也。先世の業によりて生れたる身をば。今生の中にはあらためなをさぬ也。女人の男子とならんと思へども、今生の中には不_レ叶がごとし。只生れ付のまゝにて念佛をば申也。智者は智者にて申て生れ。愚者は愚者にて申て生れ。道心有人も申て生れ。道心なきも申て生れ。邪見に生れたる人も申て生る。富貴のものも。貧賤のものも。欲ふかきものも。腹あしきものも。慈悲あるものも。慈悲なきもの

本願の上
三立て一
字あり

も。本願の不思議にて念佛だにも申せば。みな往生する也。たとへば日の出ぬれば。地の高低を嫌はず。みな照し。月の明なれば。水の淺深をえらばず。影を浮が如し。念佛の一願に万機をおさめて發し給へる本願也。たゞこそかしく機を沙汰をばせずして念佛。にも申せば。皆悉く往生する也。さればこそ十方衆生と。手びろく願をば發し給へ。念佛の人は疾雨の如く極樂には生ると佛は説給へり。もし心をととのへ身を慎て。念佛して生るゝとならば。やは疾雨の如くは生るべき。又かゝる願なればとて。わざとふてかゝりて。わるかれとはあらず。本願の手びろく不思議にまします様を申計なり。念佛往生の義をかたくふかく申さん人をば。つや〱本願をしらざる人と心得べし。源空が身も。檢校別當どもが位にて往生はせんずる。本の法然房にては多も候はじ。年來習たる智慧は。往生の爲には用にもたゝず。され共習たるかひに。

必ず如此知たるは無量事也とぞ仰られける。又一の疑に云。臨終の一念は百年の業に勝ると申候事は。平生の中に臨終の一念ほどの念佛は申出すまじきにて候やらんと。上人答給はく。具三心者必生彼國と説れたれば。三心具足の念佛は。百年の業に勝たる臨終の一念と同事也。必文字の有故にとぞ仰られける。又一の疑に云。八宗九宗の外に淨土宗を立る事。自由にまかせたる事かなと。餘宗の人の申候をば。いかゞ申候べきやと。上人曰。宗の名を立ることは佛の説に非ず。自心さす所の經教に付て。存じたる義を悟極て。宗を判ずる事也。諸宗のならひ皆以如是。淨土の名を立る事は。淨土の正依に付て。往生極樂の義を悟極め給へる先達の宗の名を立給へる也。宗の起を知らざる愚者は。さやうの事を云也。抑淨土一宗の諸宗にこそ。念佛一行の諸行にすぐれたると云ことは。万機を攝する方を云也。理觀。菩提心。讀誦大乘。眞言。止

若少一本
老一作

本願の上
三立て一
字あり

觀等は。いづれも佛法のあろかにましますにはあらず。皆生死濟度の法なれども。末代になりぬれば力不及。行人の不法なるによりて機はあよばぬ也。時をいえば末法万年の後。人壽十歳に促り。罪をいへば十惡五逆の罪人也。老少男女の輩。一念十念のたぐひに至るまで。皆是攝取不捨の願にこまれる也。故に諸宗にこそ。諸行にすぐれたりとは申也とぞ仰られける。又問奉て云。後生をば彌陀如來の本願をたのみ奉て候へば。往生疑なく候。現世をばいかやうにもひ存べく候らんと。上人答給はく。現世を過べきやうは。念佛の申されん方によりてすぐべし。念佛の妨に成ぬべからん事をば。いとひ捨つべし。一所にて申されずば修行して申べし。修行して申されずば。一所に住して可申。ひじりて申されずば。在家になりて申べし。在家にて申されずば。遁世して可申。ひとり籠居て申されずば。同行とともに歩いて申べし。共に歩いて

申されずば。一人籠居て申べし。自力にて衣食不叶して申されずば。他力にて他人に助られて申べし。他人の助にて申されずば。自力にて可申。念佛の第一の助業米に過たるはなし。衣食住の三は念佛の助業也。よく〱たしなむべし。妻を儲くる事。自身助られて念佛申さん爲也。念佛の妨になりぬべからんには。ゆめ〱もつべからず。從類眷屬も如是。所知所領を儲けん事も。惣じて念佛の助業ならば大切也。妨に成べくばゆめ〱持べからず。すべて是をいは。自身安穩にて。念佛往生をとげんがためには何事もみな念佛の助業也。三途にかへるべき事をする身をだにも難捨ければ。かへりみはぐくむぞかし。まして往生すべき念佛申さんば。いかに〱羽含もてなすべき也。かりそめにもいるかせにはすべからず。よく〱いたはるべき也。念佛の助業ならずして。今生の爲に身を貪求するは。三惡道の業となる。往生

極樂の爲に自身を貪求するは往生の助業となる也とぞ仰られける。禪勝房。種々の不審ども承ひらきて後。暇申て。明日は下向すべきよし申たりければ。京つとせんとて。明句を仰られけるは。聖道門の修行は。智慧をさはめて生死を離れ。浄土門の修行は。愚痴にかへりて極樂に生ると心得べしとぞ。本國にかへりて偏に上人勸化のむねを信じ。二心なく念佛して。行年八十五歳。正嘉二年十月四日寅の刻。念佛相續して種々の靈異を施し。端坐合掌して往生を遂られき。

九 津戸三郎被召將軍御所事

征夷將軍鎌倉の右大臣實朝公の御時。元久二年秋の比。津戸三郎爲守。念佛所を建立し一向專修を興行して。餘行をなんどもせざるよし將軍家に讒し申族あるに付て。御尋あるべきよし内々其さこえありしかば。かゝる珍事にこそあひ候はんずれ。被召尋時。申上べき次第を難答の

言を調べて假名眞名にし給べきよし。飛脚を立て上人に申入けるに付て。十月十八日。上人御返事に云。念佛の事召問はれ候はんには。なじか委き事をば申させ給べき。げに人にもいまだくわしく習はせ給はぬ事にて候へば。專修雜修の間は。くわしき沙汰候はずとも。召問れ候はゞ。法門のくはしき事は知候はず。御上京の時。うけ給りわたりて。聖の許へまかり候て。後世のこといかゞしつべき。在家のものなどの後生助り候ぬべき事は。なに事か候はん問候しかば。聖の申候しやうは。生死を離るゝ道はやう／＼におほく候へども。其中に此比の人の生死をいづる道は。極樂に往生するより外には。こと道は叶ひがたき也。是佛の衆生をすゝめて生死を出させ給ふ一の道也。然に極樂に往生する行又やう／＼におほく候へども。其中に念佛して往生するより外には。異行は叶がたき事にてある也。其ゆへは念佛は是彌陀の一

切衆生のために。自ちかひ給ひたりし本願の行なれば。往生の業にとりては。念佛にしく事はなし。されば往生せんと思はゞ。念佛をこそはせめと申候き。何況や。又在家のものゝ法門をも知らず。智慧もなからんものは。念佛の外には何事をして往生すべしと云事なし。我若少より法門を習たる物にて有だにも。念佛より外に又何事をして往生すべしとも覺ねば。只念佛計をして彌陀の本願をたのみて。往生せんと思ひてある也。まして在家のものなどの何事かあらんと申候しかば。深其よしをたのみ候て。念佛を仕なりと申させ給ふべし。又是念佛を申事は。たゞ我心より彌陀の本願の行なりと悟りて申事にもあらず。唐の世に善導和尚と申候し人の。往生の行業におひては專修雜修と申二の行をわかつて。すゝめ給へる也。專修と云は念佛也。雜修と云は念佛の外の行也。專修のものは百人は百人ながら往生し。雜修の者は千人が

中にわづかに二人ある也といへるなり。唐土にまた信中と申もの此旨をしるして。專修淨業文と云文を造りて。唐土の諸人をすゝめたり。其文は淨勝房などの許に候らん。それもちてまいらせ給べし。又專修に付て五種の專修正行と云ふ事あり。此の五種の正行に付て。又正助二行をわかつて。正業といふは五種の中の第四の念佛也。助業といふは其外の四の行なり。今決定して淨土に往生せんとおもはゞ。專雜二修の中には專修のをしへによりて一向に念佛すべし。正助二業の中には正業の勸によりて。二心なく只第四の稱名念佛をたのみべしと申候しかば。くわしき旨ふかき心を知候はず。さては念佛の目出たき事にこそ。あんなれと信じて申候計にて候。件の善導和尚と申人は氏ある人にも候はず。阿彌陀の化身にてあはしまし候なれば。教へ勸給はん事よもひが事にて候はじと。ふかく信じまいらせて念佛仕候也。

早晩一本
いつもに
作る

其造らせ給て候なる文ども多候なれば。文字も知候ぬ者にて候へば。たゞ心ばかりをさし候て。後生やたすかり候。往生やし候とて申候ほどに。近き者ども見うらやみ候て。少々申ものども候なりと。是ほどに申させ給ふべし。中々くわしく申させ給はゞ。あやまちもありなんとして。あしき事もこそ候へと思ひしは。いか候べき。様々に難答を注してと候へども。時にのぞみてはいかなる詞どもか候はんずらん。書てまいらせて候はんもあしく候ぬべく候。只よく御はからひ候て。早晩よきやうに御はからはせ給はめ。又念佛申すべからずと被仰て候とも。往生に志あらん人はそれにより候まじ。念佛彌申せと仰られ候とも。道心なからんものはそれにより候まじ。とかくに付けていたく思召事候まじ。いかならんにつけても。此度往生しなると。人をば知らず御身にかぎりては思召べし。わざとはるゝと人上させ給

ひて候こそ下人も不便に候へ。猶々示し問れ候はん時に。是より百千申て候はん事は。時にもかなひ候まじければ。無益の事にて候はんずる。はからひて能やうに早晩に隨て申させ給はん。よもひが事は候はじ。まなかなにひろく書てまいらせ候はん事は。もての外に廣文を造り候はんずる事にて候へば。俄にすべき事にも候はず。それは又中々あしき事にて候ぬべし。たゞいと子細は知候はず。是ほどに聞て申候也と申させ給はんには。心候はん人はさりとも心得候なん。又道心なからん人は。いかに道理を百千万あかすとも。よも心得候はじ。殿は道理ふかくして。ひが事ははしまさぬ事にて候と申あひて候へば。是等ほどにきこしめさんに。念佛ひが事にてありけり。今はな申そと仰られむ事はよも候はじ。さらざらん人は。いかに申とも思とも。無益の事にて候はんずれ。何事も御文には盡し難候。穴賢く。然を翌年四月。信

午時一本
子時一本
作る

濃の前司行光于時山城民部大夫が奉行として下されける御教書云。

津戸卿内に建立念佛所。令居住一向專修輩之由。所聞食也。彼宗之子細爲有御尋爲。宗之輩二兩人。早可被召進之狀。依仰執達如件。四月廿五日。于時散位刺奉津戸三郎殿云云。同狀禮紙云。來廿八日の申の時。件の念佛者共をば參ぜさせ可給之由。御定候也云云。被仰下之旨にまかせて。同廿八日申の尅に淨勝房。唯願房此二人は上等の念佛者を相具して。法花堂の前の二棟の御所の南向の廣廂に參る。奉行人行光をもつて。子細を御たづねありけるに津戸三郎は。上人の御返事の趣をそらにうかべて。用意したる事なれば。とこほりなく申入けるに。淨勝房等の念佛者は。年來所學の道なれば。法藏比丘の因位の願より。彌陀如來の成佛の今にいたるまで。往生の道をくかららず述申ければ。面々に立申旨委く被聞食。拵けるに

よりて專修の行において子細あるべからず。如元勤可_レ行由被_レ仰出候ける後は。いよく念佛の行懈りなかりければ。右大臣家薨逝の時。彼御骨を二位家より此所に渡し奉られければ。二心なく偏に彼御菩提をぞ吊ひ申ける。

十 尼妙眞往生事

伊豆國走湯山に侍し尼妙眞は。專法華を讀誦し。兼ては祕密を修行せり。事の縁によりて上洛せし時。法然上人に參りて念佛往生の道を承て後。忽に餘行をすて、偏に念佛を行す。其功や、たけて化佛を拜する事常にあり。只甚深の同行一人にかたる。餘人さらにはをしらず。ある時明日申の尅に往生すべきよし同行に告ぐ。翌日時尅にたがはず。端坐合掌高聲念佛して往生せり。妓樂天に聞え異香室にみたり。不思議の奇特。其頃の口遊にてぞ有ける。

法然上人傳記卷第五上

田舎にてのゆめの告。互に不思議なりし事を談けり。本願の不思議といひながら。合戦の場に靈瑞を現じ。眼前の往生を遂ぬる事。眞に希代の奇特なりしかば。打手六人の輩。いかなれば甘糟は在俗の身たりながら。ふかく本願を信じて合戦の場に往生を遂るぞ。いかなる我等なれば頭を剃。衣をそめながら。在俗の身にも及ばざるらんと改悔をなし。心を發して。且は甘糟の後世をも吊。且は罪障懺悔のためとて本坊へ不歸。やがてそれより出て諸國を修行して。靈佛靈社に歩を運びけるが。武藏國をとをりける時。或所にて供養をのぞみけるに。法師は心うさものと思とれる事ありといひて。四壁のうちへも入ざりければ。そのゆへを問に。これは山門の堂衆の爲に命を失へる甘糟が遺跡也。法師に命を奪はれたるゆへに。法師は皆うとましき也と。答ければ。我等こそ其人をうしなひし敵なれ。我等一列の豪の武者十八人侍りしが。十

二人は甘糟にうたれき。甘糟をば殘六人の手にかけしに。忽に奇特をあらはし。眼前に往生を遂られしを見て發心せり。かゝる往生人を手にかけつるを。毒鼓の縁として後生を助かり。又かの甘糟が菩提をもとぶらひ奉らんが爲に。六人ともに發心して修行し侍し由を申ける時。うさも中々かた見なりけり。最後に甘糟に近きけるを。なつかしき事にしのびて。中陰の間留をきてもろとも孝養をぞ營ける。戰場にての往生のためし。上人に問答の次第。瑠璃王の先蹤。如來の教勅。思ひ合られ侍り。彌陀の本願は人を嫌はず所を選ばず。たゞ念佛すれば往生疑なき事明か也。我も人も深く本願を瀧み。稱名を專にすべし。

十二 隆寛律師給選擇事

元久元年甲子三月十四日。權律師隆寛。小松殿へ參向の時。上人後戸に出むかひ給て。懷中より一卷の書をとりにだして。律師に授給ふ。

要文要義
一、要文に作

律師一人
上人に作

停止たる
一本停止
せらるるに
作

其言に云。これ月輪殿の仰によりてゑらび進ずる所の選擇集也。所載要文要義は。善導和尚淨土宗をたて給ふ肝心也。早々之を書寫して披見すべし。若不審あらば尋とふべき也。源空存生の間は秘して他見に及べからず。死後の流行は何事のあらんとぞ仰られける。抑かの律師は。苗裔をたづぬれば。粟田の關白五代の後胤。少納言資隆の三男。稟承を訪へば。楞嚴の先徳七代正統皇圓阿闍梨の附法也。慈鎮和尚の御門弟として。天台の法燈をかゝげ。攝關數代の後胤を受けて。詩歌の家塵をつぐ。朝家の重寶。叡山の領袖にて。憍慢の心も高く名利の思もふかくこそおはすべかりしに。宿善の催しけるにや。永く穢土をいとひ偏に淨土を念じて。常に上人に謁し。淨土の法門を尋申されしに。始はいと打とけ給ざりしかども。往生の志深き由を懇懇に申述給しかば。上人大きに驚て。當時聖道の有識にて。大僧正の御房慈鎮和尚に貴重せられ給ふ

御身の。是ほどに思入れ給ひける事。返々も忝とて。淨土の法門殘所なく授られき。當世長樂寺義と號するは彼隆寛律師の流なり。

十三 山門蜂起事

元久元年十月の頃。山門衆徒の蜂起。大講堂の庭に三塔會合して專修念佛を停止たるべきよし。天台座主に訴へ申によりて。座主大僧正より上人に御尋あるに付て。上人起請文を進らる。その詞に云。近日風聞して云。源空偏に念佛の教門をすゝめて。自餘の教法を誘ふ事。諸宗是によりて陵夷し。諸行是によりて滅亡すと云云。此旨を傳へ承に心神驚怖す。遂に事山門に聞え。議衆徒に及て炳誠を可加之由貫首に申送らる。此條は一には衆勸を恐れ。一には衆恩を喜ぶ。恐るゝ所は。貧道が身をもて忽に山路のいさどほりに及ばん事を。悦ぶ所は。謗法の名を消して。永く花夷の謗を止めん事を。若衆徒の糺斷にあらずば。いかてか貧道が愁歎を慰めんや。凡彌

吐一本
に作る

陀の本願に云。唯除五逆誹謗正法と。念佛をす
ゝむる輩。いかてか正法を謗ぜん。又惠心の要
集には一實の道を聞て。普賢の願海に入と。淨
土を欣たぐひ。豈妙法を捨んや。就中源空壯年
の昔は。天台の教釋を披て三觀のとぼそにつら
なる。衰老の今は善導の章疏を伺ひて。九品の
境にのぞむといへども。舊執なを存す。本心何
忘れん。只冥鑒をたのみ。只衆察を仰ぐ。但老
門通世の輩。愚昧出家の類ひ。或は草房に入て
髮をそり。或は松門に臨て志をいふ。次に極樂を
もつて所期とすべし。念佛をもて所行とすべき
よし時々諷諫す。是則齡衰て自餘の練行に能は
ず。性鈍にして聖道の研精に堪へざる間。しば
らく難解難入の門を闇て。試に易行易往の道を
示すなり。佛智なを方便をまうけ給ふ。凡愚あ
に斟酌なからんや。敢て教の是非を存するにあ
らず。機の堪否を思也。此條もし法滅の縁たる
べくば。向後は宜く停止に從ふべし。此外に僻

説をもて弘通し。虚誕をもて宣聞せば。尤糺斷
あるべし。尤炳誠あるべし。願所也望む所也。
此等の子細は。先年沙汰の時。起請文を進じ畢
ぬ。其後いかに變ぜず。重て陳するに能ずといへ
ども。嚴誡すてに重疊の間。誓文亦再三に及ぶ。
上件の子細。一事一言。虚言をもて會釋をまう
けば。毎日七万返の念佛ひなしく其利益を失
て。三惡道に墮在し。現當二世の依身常に重苦
に沈て。永く楚毒をうけん。伏乞。當寺の諸尊。
満山の護法。證明知見し給へ。源空敬白。
元久元年十一月三日 沙門源空 敬白云云
その時の座主は後白川院孫王眞性宮の大僧
正也。

十四 七箇條教誡事

上人の門弟と號する輩の中に。いまだ上人存知
の深奥をしらず。いまだ淨土宗義の廢立を辨へ
ざる類ひ。師説と稱して。雅意の謗法をいたし。
無窮の臆説を吐によりて。已に山門の大訴に及
云。別解別行者。愆起敬心。若生輕慢。得罪
無窮云云。何背此制教哉。加之善導和尚大
呵之。未之知祖師之誠。愚闇之甚也。

一可レ停止於念佛門。號無戒行。專勸姪酒
食肉。遵守律儀者。嫌名雜行人。憑彌陀本
願者。說勿恐造惡事。

右戒是佛法大事也。衆行雖區。同專之。是
以善導和尚。舉目不見女人。此行狀之趣。過
本律制。淨業之類不順之者。愆失如來遺教。
別背祖師舊跡。無所據者歟。

一可レ停止未辨是非。離聖教。背師説。
恣述私義。妄全諍論。被啖智者。迷亂愚人
事。

右無智大天。此朝再誕。猥述邪義。更以似九
十五種異道。尤可悲歎也。

一可レ停止以癡鈍身。殊好唱導。不知正法。
說種々邪法。教化無智道俗事。

右無解作師。是梵網之制戒也。愚闇之類。欲

背原本
に作る

間。同月の七日門人等をあつめ。制禁七ヶ條に
および。門人五十七人の連署をとりて。龜鏡に
そなへ。後證にたつ。所謂七ヶ條の起請に云。
教誡念佛門輩。七箇條起請。普告號予門人。念
佛上人等。
一可レ停止未窺一句文。破眞言止觀。謗餘
佛菩薩事。
右至立破道者。學生所經也。非愚人之境界。
加之誹謗正法。除彌陀願。其報當墮那落。豈
非癡闇之至哉。
一可レ停止以無智身。對有智人。遇別行輩。好
致諍論事。
右論議者。是智者之有也。更非愚人之分。又諍
論之處。諸煩惱起。智者遠之自由句也。況於
一向念佛行人乎。
一可レ停止對別解別行人。以愚癡偏執心。稱
可棄置本業。強嫌噉之事。
右修道之習。各勤自行。不遮餘行。西方要決

をえんや。これをもてこれをいふに。三重の子細一としても過失なし。衆徒の鬱憤何によりてか強盛奉らんや。はやく満山の鼓躁を停止して。來迎の音楽を庶幾すべきか。抑諸宗成立の法。各自解を專にして餘行をなむともせず。弘行のつねのならひ。先徳の故實也。これを異域にとぶらへば。月氏には即護法。清辨の空有の論談。震旦には亦慈恩。妙樂の權實の立破也。是を我國に尋るに。弘仁の聖代には。戒律大小のあらそひあり。天曆の御宇には。諸宗淺深の談あり。八家さほひて定準をなし。三國つたへて軌範とす。然て末世の邪亂を鑒て。諸宗の對論をとゞめられしより以來。宗論ながく跡をけづり。弘法それが爲に安全たり。就中淨土の二宗を以ては。古來の行者偏に無染無著の淨心をこらし。專修念佛の一行につかへて。他宗に對して執論をこのまず。餘教に比して是非を判せず。獨り出離をねがひて。必ず往生の直道を遂んと

也。但弘教嘆法のならひ。敢て又その心なきにあらざるか。所謂源信僧都の往生要集の中に。三重の問答をいだして念佛の勝業を談ず。念佛の至要此釋に結成せり。禪林の永觀は。徳惠心に及ばずといへども。行淨業を續。撰所の十因。其意又一一致也。普賢。觀音の悲願をかながへ。勝如。教信が先蹤を引て。念佛の餘行に勝たる事を證せり。彼時の諸宗の徒。惠學林をなし。禪定水をたふふ。然といへども惠心をもとがめず。永觀をも罰せず。諸教も滅することなく。念佛も妨なし。是則世すなほに人うるはしき故也。而に今代淺季に及び。時鬪諍に屬して。能破所破ともに邪執よりおこり。正論非論みな喧嘩におよび。三毒内にもよほし。四魔外にあらはるゝが所致也。又或人云。念佛もし弘通せられて。諸宗忽に滅盡すべし。爰以遏妨すと云云。此事不可然。過分の逆類に在ては。實によりて禁斷せらるべし。全く淨土宗のいたむ所に

一本罪業
おもしと
いへども
往生をね
うからず
うかふに
字の二十
見一本は
なし三字
一すくは
いて淨土
の教をま
作るに

あらず。末學の邪執にいたりては。上人嚴禁をくわへ。門徒已に服膺す。かれをいひこれをいひ。何ぞ佛法の破滅に及ばんや。凡顯密の修學は名利によりて研精す。是人間の定まれる法也。淨土の教法に在ては。名にあらざり利にあらざ。後世を思ふ人の外に誰か習學せんや。念佛の弘行によりて餘教滅盡の條戲言歟。狂説歟。いまだ是非を不辨。若此沙汰熾盛ならば。念佛の行一時に失墜すべし。因果を辨へ患苦を悲まらん人に傷嗟せざらんや。あに悲涙せざらんや。爰に小僧幼年の昔より衰暮のいまに至るまで。自行をろそかなりといへども。本願を漏む心おこたらず罪業をもしといへども往生をねがふに物うからずして。四十餘回の星霜を送る。いよゝもとめ。いよゝすゝみて。數百万返の佛號を唱ふ。頃年よりこのかた。病せまり命もろくして黄泉近にあり。淨土の教迹此時にあたりて滅せんとす。是を見是をさして。争かたへ争か

しのばん。三尺の秋の霜。肝をささ。一寸の赤焰。曾をこがす。天に仰ぎて嗚咽し。地を叩て愁悶す。何況上人は。小僧において出家の戒師たり。念佛の先達たり。歸敬これふかし。尊崇尤切也。しかるを罪なくして濫刑をまねき。勤ありて重科に處せば。法の爲に身命を惜むべからず。小僧かはりて罪をうくべし。もて師範の咎をすくはんと思ふ。凡其佛道修行の人。自他共に罪業をかへりみるべし。然を強に俗諦隨事の假論を執して。いよゝ無明迷理の惑障に墮せんこと。いたましきかなや。悲しき哉や。乞。學侶の心あらん。理に伏して執を變じ。法に優して罪をなだめよ耳。死罪々々敬白。
十一月十三日 專修念佛沙門圓證
大僧正御房へと云云
上人誓文におよび。殿下會通を設けられければ。衆徒の鬱訴とゞまりにけり。

法然上人傳記卷第五下

- 十六 頭光出現事
- 十七 瘡病事
- 十八 明遍參小松殿事
- 十九 大胡消息事

十六 頭光出現事

同二年乙丑四月五日。上人月輪殿に參じて。念佛の法門御談義數尅の後。退出し給し時。地の上よりたかく蓮華をふみてあゆみ。金色の頭光赫奕として。形貌は大勢至菩薩也。禪定殿下庭上にくづれありさせ給て。御額を地に付ておがみたてまつらせ給へば。上人也。門外まで見送り給ふに。又大勢至也。涙千行万行。敢て譬に物なし。暫ありて肅然として。をどろきおきさせ給ひて。仰られて云。上人の頭上に金色の圓光顯現せり。希有の事おがみ奉るやと。時に御

前に侍は。戒心房右京權太夫本蓮房中納言阿二人也。ともに見奉らざるよし申。禪定殿下御歸依年ふりたりといへども。此後は彌陀の思ひをなし奉らせ給ひけり。

十七 瘡病事

同年八月。北白川二階房にして。上人瘡病をし出し給て。小松殿へ歸り給ひぬ。門弟等或は念佛を申ておとし奉らんといふ人もあり。或は上人へ參りかゝるほどの物には。我等が力は叶べからずと申人もあり。或は又結縁のためにまいる歟といふ人もあり。禪定殿下此事をきこしめしさばきて。種々に療治を加へらるといへども叶はざりければ。禪定殿下われ案を廻らせり。善導の御影を圖繪し奉りて。聖覺を唱導として上人のまへにて供養をとげ。淨土の法門を稱し。彌陀の本願を解説せしめん。隨喜の心を發して除病の効驗もありぬべしとて。詫摩法眼證賀に仰て。御影を圖繪せられ。後京極殿その銘を

きこしめ
てさばき
しきばき
て一本開
に食され
るに作

給一本の
作らばに
聖覺一本
行に作練
久修練一
本久修練

かゝしめ給ふ。聖覺法印于時の許へ。御導師に參勤すべきよし仰られければ。聖覺も瘡病を仕侍る。明日は發日にあたり侍れども。且は師匠の報恩也。争か子細を申べきや。但早旦に御佛事を初らるべしとて。翌日拂曉に小松殿へ參入して。聖覺も今日おこり日にて候。何時計におこらせ給ひ候やらんと申ければ。申の時計におこり侍る也と。上人曰。聖覺はまたとく發り候也。尤いそがるべしとて。巳時の初に説法をはじめて。申の終に結願せられけるに。御導師本願の奥義をのべ。大師釋尊も衆生に同ずる時は。常に病惱をうけ。療治を用給き。況や凡夫血肉の身いかてか其愁なからんや。雖然此道理を知らる淺智愚鈍の衆生。定めて疑心をなし不信をいたさんか。善導和尚諸宗の教相によらずして。淨土宗を興じて一向專修の行をたて。本願稱名の義をひろめ給事は。末代惡世の根機に相應して。順次に生死を離るべき要法なるが故に。上

人これを弘通し給ふに。化導既に佛意に叶て。まのあたり往生を遂るもの千万なり。然ば諸佛菩薩諸天龍神。いかてか衆生の不信を歎かざらん。四天王佛法を守護すべくば。必ず我大師上人の病惱を愈したまへと。懇に申のべ給ひければ。善導の御影の御前に異香しきりに薫じ。上人も聖覺も共に瘡病あちにければ。故法印は雨をくだして名をあぐ。聖覺が身には此事尤奇特也とぞ申されける。まことに末代の奇特。その比の口遊にぞ侍ける。

抑靈魔等の或は結縁のため。或は聞法のために。久修練智徳高貴の人に託する事これおほし。昔三井の大阿闍梨の所勞と聞給て。惠心僧都とぶらひにわたり給ひたりければ。阿闍梨臥ながらのたまわく。病患術なく候て行法すてに退轉し侍ぬ。かくて死侍らば一定地獄に落はんべりなんと。悲くこそ侍れと申されし時。されば地獄と云ふ所の侍ると惠心僧都のたまひしかば。さ

てさは侍るぞかしと阿闍梨又の給ひければ。惠心は地獄なき義をたて。阿闍梨は地ごくある義をのぶ。おはりに病床に起居て。高聲に難詰會釋の間。やうやく兩三時におよぶに。天井にこゑありて云。あなたうと。今は罷歸り侍なん。かゝる貴き事や承り侍ると。まいりて侍しほどに。さる事も候はて今まで侍りつるこそ恐れ存候へ云。即何闍梨の心地さはやかに成給ぬ。人これを怪ければ。惠心僧都の仰られけるは。推するむかし智行ありて貴とかりける人の。魔道に落たるが。法文を聞て妄執をとらせん爲に。學徳のもととて尋入て伺所に。今の義を聞て隨喜して去なるべしと云。かれをもて是をおもふに。今上人の病惱その義更に違べからず。きか人ゆめく疑事なかれ。但又古老の口傳には。上人門弟等の中に。本願に歸したる三心具足の念佛者は。瘡病如きの病を不可受と申けるを。一人の弟子ありて。たとひ三心具足の行者なり

とも。業報限あらんものは。いかてかこれを受ざらんやと論じ申事の侍るを。上人障子をへだて、聞給ひけるが障子をあけて。念佛者は瘡病すべからずといはゞ。さては源空が瘡病したらんは。いかゞあるべきと仰られけるが。翌日に瘡病をし出し給へりといへり。業報限あればいかなる病をうくとも。其によりて念佛の信をばさますべからずと。末代の衆生の不審を除かん爲に。わざと此病を受給へる事疑なし。

十八 明遍參小松殿事

高野の明遍僧都。善光寺參詣の次に。小松殿の坊に參じて。上人に申云。末代惡世の罪惡の我等。彌陀の名號を稱して淨土に往生すべしと承候に。念佛の時心の散亂するをばいかゞ侍るべきやと。上人曰。欲界の散地に生をうくる者。心あに散亂せざらんや。其條は源空も不及力。但心は散亂すれども口に名號を稱すれば。佛の願力に乗じて往生疑なし。詮ずるところ。只念佛

の功をつむべき也と。僧都悦て退出するうしろに。上人の曰。あなことたかの御房や。生付の目鼻を取捨申事や侍ると。

十九 大胡消息事

上野國の御家人。大胡太郎實秀在京の時。上人見參に入て。念佛往生の道をうけ給りて後。國より不審を尋申ける時の御返事。詮をとりてこれをのせば。三心具足して往生すと申事は。誠に其名目計を打聞時は。いかなる心を申やらんことくしく覺候ぬべけれ共。善導の御心にては心得やすく候也。習さたせざらん無智の人や。さとりなからん女人などの。糸具足せぬほどの心ばへにては候はぬ也。たゞまめやかに往生せんと思ひて念佛申さん人は。自然に具足しぬべきにて候也。一には至誠心。二には深心。三には回向發願心也。此三心を具するものは必ず彼國に生ると説れたり。初に至誠心と云は眞實の心なり。眞實と云は外には賢善精進の相を現じ。内

には虚假をいやく事をなされと。善導和尚の釋し給へる。此釋の心は内にはをろかにして。外にはかしこき人と思はれんとふるまひ。内には惡を造り外には善人のよしを示し。内には懈怠の心を懷きて外には精進の相を現ずるを。眞實ならぬ心とは申也。外も内もありのまゝにてかざる心なきを至誠心と名付也。二に深心と云は。ふかく信ずる心也。何事をふかく信ずると云に。先諸の煩惱を具足しおほくの罪を作て。餘の善根なからん凡夫。阿彌陀佛の大悲本願を仰て名號を唱る事。若は百年にてもあれ。若は四五十年にてもあれ。乃至一二年にてもあれ。すべて往生せんと思ひ初たらん時よりして。最後臨終の時に至るまで懈怠せず。若は七日一日十聲一聲に至るまで。おほくも少も稱名念佛の人。決定して往生すべしと信じて。一念も疑心なきを深心とは申也。然に往生をねがふ人。本願の名號を持たながら。猶内に妄念の起るを恐れ。外

作至せむ一
るにんに本

に餘善の少によりても。偏に我身をかるしめて往生を不定に思はゞ。既に本願を疑也。されば善導和尚は未來の行者の此疑をのこさん事をかゝみて。其疑心を除て決定の心を勸めんが爲に。煩惱を具足し罪業を造り。善根少く智恵なからん凡夫。十聲一聲までの念佛によりて。決定して往生すべき理をくわしく釋し給へり。たとひおほくの佛空中に充滿して。光を放て舌を舒。造罪の凡夫念佛して往生すと云事はひが事也。信ずべからずとの給ふとも。其によりて一念も驚き疑べからず。其故は阿彌陀佛いまだ佛に成給はざりしむかし。若我佛に成たらん時。十方の衆生。わが名號を唱る事。上百年より下十聲一聲までにせむに。若我國に生れずといはゞ。我佛にならじと誓ひ給たりしに。其願ひなしからずして。佛に成て既に久しく成給へり。知べし其名號を唱ん人は。必ず往生すべしと云事を。又釋迦佛この娑婆世界に出世して。一切衆生の

爲に。彼彌陀の本願を説て念佛往生をすゝめ給へり。又六方恆沙の諸佛。各廣長の舌を出して。釋迦の念佛して往生すと説給ふは決定也。ふかく信じてすこしも疑心あるべからずと。そこばくの佛達の一佛ものこらず。一味同心に證誠し給へり。既に彌陀其願をたて給ふ。釋尊は其願のひなしからざる事を説すゝめ給ふ。六方恆沙の諸佛は其説の眞實なることを證誠し給へり。此外いづれの佛の。又これらの諸佛にたがひて。凡夫念佛して往生せずとはの給ふべきぞと云ことはりをもて。おほくの佛現じてのたまふとも。其に驚て。さては念佛往生は叶まじき歟と。信心をやぶりに疑心すべからず。況や菩薩たちのたまはんをや。況や羅漢辟支佛等をやと釋し給て候也。何況。近來の凡夫のいひ妨げんをや。いかに目出度人申とも。善導和尚にまさりて往生の道を知べからず。善導は又彌陀の化身なり。彼佛我本願をひろめてあまねく一切衆生に知し

の字外
の誤か
心一本
に作る
候つべく
候つこと
に作る
中一本
に作る

めて。決定して往生させん料に。かりそめに凡夫の人と生れて。善導和尚と云れ給ふ也。いはゞ其教は佛説にてこそ候へ。垂迹の方にても現身に念佛三昧を得て。まのあたり淨土の莊嚴を見。たゞちに佛のをしへをうけ給ひて。の給へる言どもなり。本地を思ふにも。垂迹を尋るにも。旁以仰て信ずべし。されば誰しも煩惱のこさうすきをかへりみず。罪障のかるさおもきをも沙汰せず。只口に南無阿彌陀佛と唱ん聲に付て。決定往生の思ひをなすべし。其決定の心をやがて深心とは名付也。所詮。とにもかくにも念佛しく往生すと云事を。深く信じて疑はぬを深心とは名付候也。三に向發願心と云は。我所修の行業を。一向に極樂に向發して。往生を願ふ心也。如此三心を具してかならず往生すべし。この心一もかけぬれば往生せずと。善導は釋し給る也。たとひ眞實の心ありて聲をかざらずとも。佛の本願を疑は。すてに深心かけたる

念佛也。たとひ疑心なくとも。外をかざり内にまことの心なくば。至誠心かけたる心なるべし。たとひ此二心を具してかざる心もなく疑心もななく共。極樂に生れんと思ふ心なくば。回向發願心かけぬべし。三心を心得わかつ時は如此別々の様なれども。所詮は眞實の心を發て。ふかく本願を信じて。往生をねがふ心を三心具足の心とは申也。まことに是ほどの心だにも具足せずしては。いかゞ往生極樂ほどの大事をばとげ給ふべきや。此心は申せば又やすき事にて候也。かやうに心得知らねばとて。又もと具足せぬ心にては候はぬ也。其名をだにもしらぬものも。此心得をば備つべく候。又よくしりたらん人の中にも。其まゝに具せぬも候ぬべき心ばへにて候也。さればこそいふにかひなき人ならぬものどもの中よりも。唯ひらに念佛申計にて往生したりといふことは。昔より申傳て候也。それらはみな知らねども。三心を具したる人にて

候へばど
もに作る
心とは一
本心をば
心に作る
然るに本
然なるを
作るを
信ぜぬ和
信燈録に
語ぜんに
作るの上
當りの一
本たりの
二字あり
彌陀の一
給いて本
の字あり

ありけると心得らるゝ事にて候也。又年來念佛申たる人の臨終のわろき事の候は。先に申つる様に。うへ計をかざりて。たうとき念佛者など人はいはれんとのみ思て。下にはふかく本願をも信ぜず。まめやかに往生をもねがはぬ人にてこそは候はんと思得られ候也。されば此三心を具せざるゆへに。臨終もわろく往生もせぬ也としろしめすべき也。かく申候へばさては往生は大事のことにこそと思召事。ゆめ／＼候まじき也。一定往生すべしと思ひとらぬ心を。やがて深心かけて往生せぬ心とは申候へば。いよ／＼一定の往生とこそ思召すべき事にて候へ。まめやかに往生のころさしありて。彌陀の本願をうたがはずして。念佛申さん人は。臨終のわろき事は候まじき也。其故は佛の來迎し給ふ事は。もとより行者の臨終正念の爲にて候也。それを心得ぬ人は。みな我臨終正念にて念佛申たらん時。佛は迎給ふべしとのみ心得て候は。佛の願を

も信ぜず。經の文をこそろえぬ人にて候也。稱讚淨土經には。佛慈悲をもて加へたすけて。心をしてみだらしめ給はずと説れて候へば。たゞの時によく／＼申をきたる念佛によりて。臨終にかならず佛は來迎し給ふべし。佛の來現し給ふを見奉りて。行者正念に住すと申義にて候也。然に先の念佛をむなしく思なして。臨終正念をのみ祈る人などの候は。ゆゝしき僻胤にて候也。されば佛の本願を信ぜぬ人は。兼て臨終をうたがふ心有べからずとこそ覺へ候へ。當時申さん念佛を。彌も心をいたして申べきにて候。いつかは佛の本願にも臨終の時念佛申たらん人のみ迎へんとはたて給ひて候。臨終の念佛計にて往生すと申事。日來往生をもねがはず。念佛をも申さずして。偏に罪のみ作たる悪人の。すてに死なんとする時。初て善知識の勸にあひて念佛にて往生すところ。觀經にも説て候へ。もとよりの行者の沙汰をば。強にすべき様は候はぬ

思召の下
候一本
あり三字
一法華
經を華
に作る
本さ候
本さ候
に作る
等一本
に作る

也。佛の來迎一定ならば。臨終の正念も又一定と思召べき也。此大意をもて能々御心をとめて心得させ給べく候。又罪をつくりたる人だにも往生す。まして法華經うちよみて念佛申さん。何かくるしかるべきと人々申候らん事は。京邊にもさやうに申人々おほく候へば。實にさぞ候はん。されば諸宗の心にてこそ候らめ。よしあしを定め申べきに候はず。ひが事と申さば恐れある方おほく候。但淨土宗の心。善導の釋には往生の行に付て。大きに分て二とす。一には正行。二には雜行也。初に正行と云は。是にあまたの行あり。初に讀誦正行と云は。無量壽經。觀經。阿彌陀經等の三部經を讀誦する也。次に觀察正行と云は。彼國の依正二報のありさまを觀する也。次に禮拜正行と云は。阿彌陀佛を禮拜する也。次に稱名正行と云は。南無阿彌陀佛と唱る也。次に讚歎供養正行と云は。阿彌陀佛を讚嘆し奉る也。これは五種の正行と名付。

讚嘆と供養とを二種の行とする時は。六種の正行とも申也。此正行に付てふさねて二とす。一には一心に專阿彌陀佛の名號を唱へ奉りて。立居起臥晝夜にわするゝ事なく。念々にすてざるを正定の業と名づく。彼佛の本願に順ずるがゆへと申て。念佛をもて正しく定たる往生の業と立て。若禮誦等によるをば。助業とすと申て。念佛の外の禮拜や。讀誦などをば念佛を助る業と申て候也。此正定業と助業等を除て。其外の諸の業はみな雜行と名付。布施。持戒。忍辱。精進等の六度万行も。法華經をもよみ。眞言をも行ひ。かくのごとくの諸の行をば。皆悉雜行と名付。先の正行を修するをば專修の行者といふ。後の雜行を修するをば。雜行の行者と申て候也。此二行の得失を判するに。先の正行を修するには。心常に彼國に親近して憶念ひまなし。後の雜行を行するには。心常に間斷す。回向して生る事を得べしといへども。すべて疎雜の行と名

本らくは
加ん事へ
からん事
かたへ
作る事
に

付といひて。極樂にうとき行といへり。又專修の者は十人は十人ながら生れ。百人は百人ながら生る。何をもての故に。外の雜縁なくして。正念を得るがゆへに。彌陀の本願とあひ叶ゆへに。釋迦の教に順ずるがゆへに。雜行の者。百人が中に一二人生れ。千人が中に四五人生る。何をもての故に雜縁亂動して正念を失がゆへに。彌陀の本願と相應せざるがゆへに。釋迦の教に順がはざるがゆへに。係念相續せざるがゆへに。憶念間斷するがゆへに。自も往生の業をさへ他の往生をもさふるがゆへになんと釋せられて候めれば。善導和尚をふかく信じて。淨土宗に入らん人は。一向に正行を修すべしと申事にてこそ候へ。其上は善導の教をそむき餘行を加へんとおもはん人は。をのゝ習たるやうこそ候らめ。それをよしあしとはいかゞ申候べき。善導のすゝめ給へる行どもをきながら。つとめ給はぬ行を少にてもくはふべき様なしと申事にてこそ候

へ。勸め給へる正行ばかりだにもなをものうき身にて。いまだすゝめ給はぬ雜行をくはへん事は。まことしからぬ方も候ぞかし。又罪を造る人だにも念佛申て往生す。まして善なれば法華經などをよまぬは。何かくるしからんなど申候はんこそ。無下にはしたなく覺候へ。往生を助ばこそ。いみじくも候はめ。妨にならぬ計をいみじき事とて。加へ行はん事は。何か詮にて候べきなれば。惡をば佛の御心に造とやすゝめ給ふ。構てとめよとこそ誡め給へども。凡夫のならひ當時のまどひに引れて。惡を作は力およばぬ事にてこそ候へ。誠に惡をつくる人のやうにしるべくて。經をもよみたく。餘行のくはへたらん事は力及ばず。但し法華經などをよまん事を。一言なりとも惡造らん事にいひならべて。それもくるしからぬば。まして是はなど申説事こそ不便の事にて候へ。ふかき御法もあしく心得る人にあひぬれば。返て物ならずきこえ候事こそあ

過直の下
一本の候
し二の字
勤の上
本の上
へこのし
字あり
五

だましくおぼへ候へ。ヶ様に申候へば餘行の人々は。はら立する事にて候に。御心に一に心得てひろく知らさせ玉ふまじく候。あらぬさとり人の。ともかくも申候はむ事をば。耳にもきき入させ給はて。たゞ一すぢに善導の御すゝめに順がひて。いますこしも一定往生する念佛の數返を申そへんと思召べき事にて候也。たとひ往生の障とこそならずとも。不定の業とは聞えて候めれば。一定往生の正業を修すべき行のいとまを入れて。不定の業をくはへん事は。且は損にて候はずや。よくよく心得させ給ふべきにて候也。但かく申候へば。雜行をくわへん人は永く往生すまじなど申事にては候はず。何様にも餘行の人なりとも。すべて人をくだし。人をそしる事はゆゝしき過重く候事にて候也。能々御慎候て。雜行の人なればとてあなづる御心の候まじさ也。よけれあしかれ。人の上の善惡を思入れぬがよき事にて候也。又志本より此門に有

て信じぬべく候はんをば。勸させ給べく候。さとりたがひてあらぬ様ならん人などに。論じ合せ給ふ事は有まじき事にて候。よくよく習知たる聖達だにも。さやうの事をばつゝしみておはしましあひて候ぞ。まして殿原などの御身にて。一定僻事にて候はんずるに候。たゞ御身ひとつにまづ能々往生をねがひて念佛を勵給て。位高き往生を遂て。いそぎ娑婆にかへりて人をばみちびかせ給へ。かやうに委く書付て申候事も。かへすゝ憚おもふ事にて候也。御披露候まじく候。あなかしこく。

三月十四日

源空云々

罪惡の凡夫なりとも。專修念佛せば決定して往生すべし。疑なし。これを見これを見をきかかん人。あに疑網をなさんや。

法然上人傳記卷第六上

或本以下
爲下卷

一 上人被下向配所事

- 二月 輪殿被命置光親卿事
- 三 大納言律師配所下向事
- 四 被著經島事
- 五 被著高砂浦事 已上五段

一 上人被下向配所事

愚鈍罪惡の輩偏に上人の化導をたのむ所に。天魔やきほいけん。南北の碩徳。顯密の法燈。我宗を誇すと號し。或は聖道を妨と稱して。科を縦横に求むる間。建永二年丁卯二月。念佛の行人の中に下さるゝ宣旨云。顯密兩宗焦丹府而歎息。南北衆徒捧白疏而鬱訟。誠是可謂天魔遮障之結構。寧亦非佛法弘通之怨讎云々。遂に上人の門弟等いかなる事か有けん。咎を本師におぼせて遠流に處せらる。上人曰。凡往生極樂の門を開て他に隨ひ機にかうぶらしめて授る中。自邪義をかまへて師説と號する間。一身にかうぶらしめて遙に万里の波に趣く。但此事

をいたむにはあらず。昔教主釋尊の因行の時。檀施のあまり父の大王にいましめられて。かすか成山にこめられ給ひしか共。其志おこたりたまはずして。ますゝ佛道を修行し給しかば。彼山を釋迦山と名付て終に正覺の庭となりけり。諸佛菩薩亦復如此。愚老何ぞ衆生をわたさざらんやと。かゝる程に同月廿七日。上人還俗の姓名を給ふ。源元彦云々。配所土佐國と定められて。檢非違使小松の御房にひかひて宣下の旨をのべけり。禪定殿下の御計として法性寺の小御堂に逗留。同三月十六日都を出給ふ。信濃國の御家人。角張の成阿彌陀佛を棟梁として。惣て我もわれもと參勤の人々六十餘人とぞきこえし。此次第を見る人々歎悲みければ。かれをいさめ給ひける詞に云。驛路はこれ大聖の往所也。漢家には一行阿闍梨。日域には役優婆塞。謫所は又權化の栖所なり。震旦には白樂天。吾朝には菅丞相也。在經出纏みな火宅也と云云。角張は俗姓も

一 一 ありの身の上
 一 一 ありの三字
 一 一 ありの三字
 一 一 ありの三字

一 一 ありの身の上
 一 一 ありの三字
 一 一 ありの三字
 一 一 ありの三字

いやしからず。王家をまもり朝敵を平ぐといへども。本師上人に隨て奴となり僕と成。ちからを盡して御輿をかく。菜のみ水汲む役をいとはず。身を捨てつかえんとす。爰上人一人の弟子に對して一向專念の義をのべ給に。西阿彌陀佛といふ弟子推參して。如此の御義ゆめゝあるべからず候。各御返事を申さるべからずと申ければ。上人曰。汝經釋の文を見ずやと。西阿申さく。經釋の文は然といへども世間の讒嫌を存する計也と。上人又云。彌陀の本願は是愚痴暗鈍の輩。罪惡生死の類の出離解脱の直路也。我くびをさらるゝ共。この事をいはずば有べからずとて。御氣色尤至誠也。見奉る人々涙を流して隨喜す。時に信空上人申云。衰邁の御身。遠境の旅に出ましゝなば。再會いつをか期せん。音容共に今を限れり。所犯なくして流刑の宣をかうぶら給ふ。跡にとまらる身の爲何の面かあらんといひて。胸うちて歎息す。上人曰。予齡既に八旬

にせまる。たとひ帝京にありとも久からじ。此時にあたりて邊鄙の羣類を化せん事。莫大の利益なるべし。但いたむ所は。源空が興ずる淨土の法門。濁世末代の衆生の決定出離の要道なるが故に守護の天等常隨すらん。我心には遺恨なしといへども。彼天等定て冥瞰をいたさんか。若然ば因果のむなしからざる事。いきて世に住せば思合らるべし。因縁はつきず。何ぞ又今生の再會なからんや。信空上人後に云。先師の詞違はずして其むくひあり。何をもちか知るならば。承久の兵亂に。東夷上都に反て。時の君は西海の島の中にましくて。多年心をいたましめ。臣は東土の道の傍にして。一旦に命を失ふ。先言のしるしある後生きゝとるべし。凡念佛停廢の沙汰ある毎に凶厲ならずといふ事なし。人みな是をしれり。觀縷にあたはずと。此事筆端にのせ難しといへども。前事の知れざる後事の師なりと云をもての故に。世のため人のため憚なが

らはを記す。

二月輪殿被命置光親卿事

月輪禪定殿下と申は。忠仁公十一代の後胤。法性寺殿の御息性寺殿。累代の攝籙の跡にましますうへ。朝家の賢政。詩歌の才幹。君是をゆるし給ふに。世これを仰奉る。榮花重職の豪家にあそび給といへども。順次往生の眞門に御心をかけて。御出家の後は。數年上人を屈して。淨土の法門を談じ。出離の要道を尋給ふ。上人の頭光をまのあたり拜見し給ひて後は。偏に生身の佛のおもひをなし奉り給ふ。はからざるに勅勸をかうぶりて。遙なる西海の波にたゞよひ給ふ。官人小松の御房にまいりて。時日をめぐらさず。いそぎ配所へおもむきたまふべき旨を責申に。禪定殿下此事を聞食より御歎尤ふかし。其故は去年建永元年三月七日。後京極の攝政殿。俄にささだせ給ひき。本朝にたえて久しく成にける。曲水の宴とり行給べき御營有て。中御門の

御亭今更に玉鏡をみがき。風流を盡し。詩歌の題とも諸方へつかはさる。詩人オ士面々に詠吟の外他なし。十日あまりの頃。其節を遂行はるべき由聞えけるほどに。七日の夜頓死し給ふ間。くもりなき世の鏡にておはしましつれば。君を初奉りて万人惜奉らずと云事なし。禪閣の御歎き申に及ばず。御年わづかに三十八にぞ成給ける。此御悲の後は。今生の事は思召捨て。一すぢに後生菩提の御いとなみに付ても。上人に常に御對面ありて。生死無常の道理をも具に聞めされ。往生淨土の行業もいよく功つみて。聊御心も慰み給ふ所に。上人左遷の罪にあたり給ふ事を。いかなる宿業にて。かゝる事を見聞らんと。勅勸かうぶり給ふ上人は御歎きなけれども。只禪閣の御悲み見奉る。餘所までも心のをき所なかりけり。是ほどの御事申もとゞめ奉ぬ事。生きて世にあるかひもなけれども。御勘氣の初より左右なく申さんも。そのおそれふかし。連々

かゝる事
一本かゝる
一本かゝる
に作る事

にては一
本までは
に作る事

業惡一本
鳥惡一本
他家一本
他界一本
に作る事

に御氣色をうかゞひて勅免を申行べし。土佐國にてはあまりに心もとなし。我知行の國なればとて。讃岐の國へうつし奉る。御名残やとゞめがたかりけん。禪閣。

ふりすてゝ行はわかれのはしなれと

ふみわたすへきことをしを思ふ

上人御返事には。

露の身はこゝかして消ぬとも

こゝろはおなし花のうてなそ

おくれさきたつならひに候とも。同じ心にこそとたのもしく思ひまいらせ候とぞ申されける。あはれなりし事也。さて其後禪閣日夜朝暮の御歎きの故に。日來の御不食いとゞおもらせ給て。御臨終近づかせ給ける時。藤中納言光親卿を召て仰られけるは。法然上人年來歸依し奉るありさま定て存じつらん。今度の勅勸を申ゆるさずして。遂に誦所へうつし奉る事。生て甲斐なく覺れども。業惡の輩かやうに申行。逆鱗の

誠のがれがたし。事の初に申とても。左右なく御免有がたければ。愼て後日を期する處に。我身早く最後に望めり。今生の恨み只此事にあり。我他家の後なりと云とも。汝相構て連々に御氣色をうかゞひて。且はかくとぞ返々申置れて候へと申て勅免を申行べし。其のみぞ心にかゝる事にてあると。能々仰られければ。光親の卿。仰のむね更に如在を存べからず。便宜しかるべく候はん時。連々〜に天氣を伺ひ候べしとて。涙をおさへて罷出にけり。さて禪定殿下御臨終正念にして。御念佛數十返如入禪定して。同四月五日往生を遂させ給ひぬ。御年五十八。いまだ惜かるべき程の御事也。上人國に下つかせ給ひて。いくほどもなくて此事をさゝ給て。御念佛日々に回向し奉り給ふ。一佛淨土誠にたのもしくぞ覺えし。

三 大納言律師配所下向事

上人配所へ趣たまひける同き日に。大納言律師

の公全今の二尊院聖 同く西國へながされ侍りけるが。律師の舟は前に出ければ。上人の下らせ給ふとききて。暫くおさへて上人の御船にのりうつり。一目見あげ奉りて。上人の御ひざにかしらすをかたぶけて。泣哭天をひびかすといへども。上人は驚給へる氣色おはしませず。念佛してましくける。さて律師の舟よりとくくと申ければ。本のふねにのりうつりけり。

四 被著經島事

攝津國經の島に著し給ければ。村里男女老少まゝありあつまる事。濱の眞砂の敷をしらず。此島は六波羅の大相國。一千部の法華經を石の面に書寫して。漫々たる波の底にしづむ。鬱々たる魚鱗をすくはんが爲也。安元の寶曆より初て未來際を盡すまで縁をむすぶ人々は。いまも石をひろひてぞ向ふなる。鳥羽院の御時の事にや。平等院僧正行尊と申しは。故一條院の御孫。天下無双の有驗高僧にて

おはしましければ。天王寺の別當に補任せられて。拜堂の爲に下られける時。江口の遊君ども舟を近くよせければ。僧の御船に見ぐるしと申ければ。神歌をうたひ出し侍ける。

有漏路より無漏路にかよふ釋迦たにも

羅睺羅か母はありとこそきけ

と。うち出したりければ。さまゝの纏頭し給ひけり。其より後例となりて。天王寺の別當の拜堂には遊君の船をよせて纏頭にぞあづかるなる。又同宿の長者。老病にふして最後の時うたひけるいまやうに。なにしに我身の老にけん。思へばいとこそかなしけれ。今は西方極樂の。彌陀のちかひをたのむべし。とうたひければ。紫雲蒼海の波にたなびき。蓮花白日の天にふり。音樂近くきこえ。異香ちかくかほりつゝ。往生を遂げるも。此上人の御勸に隨ひ奉るゆへ也ければ。いまも上人に縁をむすび奉らんとて。我おとらじとまゝありあつまりて。おがみ奉けり。

五 被著高砂浦事

播磨國高砂の浦に著給ければ。男女老少羣集しける中に。七旬有餘の老翁と。六十有餘の老女と進み出て申けるは。我等は重代この浦の海人なり。幼少より漁を業として。朝夕魚貝の命をたちて渡世の計とす。まことやらん物の命をこそす者は。地獄に落て苦をうくる事隙なきよし傳へ承れば。悲しく侍れども。此態を離ては身命のなき難き故に。歎きながら此罪業を積事年を経たりし。此罪をのがるゝ計ごと候はゞ。助給へと申て手を合てなきければ。上人あはれみをたれて。極惡最下の人。南無阿彌陀佛と唱て。佛の悲願に乗じ。極樂に往生する趣。ねむごろにをしへたまひて。十念を授られければ。歡喜の涙を流して歸けり。彼二人は年來の夫婦也。上人の仰を承て後は。晝は浦に出て漁をすといへども。作々の行を事として。口には念佛を唱へ。夜は宅に歸りて二人同く念佛することを隣

の人も驚くほどなりけるが。遂に二人ともに臨終正念にて。高聲念佛して往生しけるよし。後に人上人に語り申ければ。罪の輕重にはよらず。念佛すれば往生する現證なりとぞ。常には御物語ありけるが。さればとて念佛行者。罪を犯せとにはあらず。所詮。罪は五逆も生ると信じて。小罪をも恐れよ。念佛は一念に生ると信じて。多念を上げめとぞ仰られける。

法然上人傳記卷第六下

- 六 被著室津事
- 七 鹽飽地頭饗應事
- 八 善通寺參詣事
- 九 津戸三郎就進狀返狀事
- 十 在國間念佛弘通事
- 十一 一念義停止事
- 六 被著無漏津事

一上候の字ありての字

一せばやと作ばるとに

一上候の字あり

一後世を一本後世の作るに本後世の作るに本後世の作るに

(764)

返事に云。七月十四日の御消息。八月廿一日に見候ぬ。遙のさかひに。かやうに仰られて候御志申盡すべからず候。誠に然べき事にてかやうに候。とかく申ばかりなく候。但し今生の事は是に付ても。我も人も思知べき事に候。いとひてもいとほんと思召べく候。けふあすとも知り候はぬ身に。かゝる目を見候。心うき事にて候へども。さればこそ穢土のならひにては候へ。只とくく往生をせばやとこそ思ひ候へ。誰も是を遺恨の事など夢にも不可思召候。然べき身の宿報と申。又穢惡充滿のさかひ。是に初めぬ事にて候へば。何事に付てもたゞ急々往生をせんと思べき事に候。あなかしこく。

源空判云

に思なして。やがて其を厭離穢土のたよりとして。欣求淨土のおもひをますべきもの也。
十 在國の間念佛弘通事
上人在國の間。無常の理をとき念佛の行を勸給ひければ。當國他國。近里遠村。道俗男女。貴賤上下羣參する事盛なる市をなす。然則上人の化導によりて。或は自力難行の執情をすて。或は邪見放逸の振舞をあらためて。念佛往生を遂る人おほかりければ。洛陽の月卿雲客の歸依は年久敷。邊鄙の田夫野人の化導は日淺し。是則年來の本懐なりしか共。時いまだいたらざれば。思ながら年月を送る所に。此時年來の本意を遂ぬる事。併朝恩也とぞ仰られける。

十一 一念義停止事

山門の西塔南谷の住侶に。鐘本坊の少輔とて聰敏の學生也けるが。最愛の兒に後れて交衆倦かりければ。三十六の歳。遁世して上人の弟子となり。念佛門に入て成覺坊と申けるが。天台宗

一一人等の中一人の作るに利益に作るに

(765)

にひきいれて。迹門の彌陀本門の彌陀を立て。十劫正覺といへるは。迹門の彌陀也。本門の彌陀は無始本覺の如來成がゆへ。彌陀と我等と全く差異なし。此謂をさく一念に事足ぬ。多念の數返甚無益なりといひて。一念義と云事を自立しけるを。上人彌陀の本願は極重最下の惡人を助け。愚癡淺識の諸機を救はんが爲なれば。一形にはげみ念々にすてざる是正意也。無行の一念義をたて。多念の數返を妨げん事不可然と仰られけるを承引せず。猶此義を興じければ。我弟子には非ずと棄置せられけり。兵部卿三位基親卿は。深く上人勸進の旨を信じて。毎日五万返の數返をせられけるを。成覺坊一念義をもて。彼卿の數返を難しければ重々の問答を致し。存知の旨を記録して上人に尋申されける状に。念佛の數返並に本願を信ずる様。愚案如是候。難者謂なく候へども。若御存知の旨候はゞ御自筆をもて書給へく候。別解別學の人にて候

附錄 法然上人傳記卷第六下

は。耳にも聞入べからず候に。御弟子等の説に候へば。不審をなし候也云云。取事長きによりて問答の記録これを略す。上人の御返事に云。仰の旨謹て承り候畢。御信をとらしむる様折紙に具に拜見候に。一分も愚意の所存に違せず候。ふかく隨喜し奉り候也。近來一念の外數返無益なりと申義出來候。勿論不足言の事候歟。文釋を離て義を申人。若既に證を得候か。尤不審に候。附佛法の外道ほかに求むべからず。天魔競來て如此の狂言出來候歟。猶く左右に能はず候云云。取愛上人配國の後。成覺坊の弟子善心坊といへる僧。越後國にして專此一念義を立けるを。光明坊といへるもの不心得事に思て。承元三年夏の比。消息をもて上人に尋申けるに付て。配所にてかゝれたる一念義停止の状に云。當世念佛門におもむく行人等の中。おほく無智誑惑の輩あり。未一宗の廢立をしらず一法の名目に及ばず。心に道心なく身に利益をもとむ。

構て一本
請て一本
作本 (766)

一本おひ
ての下ひ
よく無し
四字無し

直垂なき
よ一本直
垂る著に
作る

一本姪食
の上たひ
の二字無
し此教訓
に作

これによりて恣に妄語を構て諸人を迷亂す。偏にこれを渡世の計として。全く來生の罪をかへりみず。かたましく一念の偽法をひろめて。無行の過を謝し。あまさへ無念の新義を立て。猶一稱の小行を失ふ。微善也といへども。善根におひて跡をけづり。重罪なりといへども。罪障におひていよく勢をます。利那五欲の樂を受んが爲に。永劫三途の業をおそれず。人を教示しても。彌陀の願をたのむものは五逆を捨る事なし。心に任てこれをつくれ。袈裟を著すべからず。宜しく直垂をさよ。姪肉を斷べからず。恣に鹿鳥を食べしと云。弘法大師異生羶羊心を釋して云。たゞ姪食を思ふ事。彼羶羊のごとしと云。彼輩たゞ欲にふける事偏に彼類歟。十住心の中の三惡道の心也。誰かこれを哀まざらむや。たゞ餘教を妨のみに非ず。かへつて念佛の行をうしなふ。懈怠無慚の業を勸て。捨戒還俗の義を示す。これ本朝には外道なし。是既に天魔の構

へ也。佛法を破滅し世人を惑亂す。此教訓にしたがはん者は。癡鈍のいたす所也。いまだ教文を學せずといふとも。誠あらん人何を是を信ずべきや。善導和尚の觀念法門には。唯深持戒念佛すとのたまへり。和尚の弟子三昧發得の懷感法師の羣疑論には。都率を志求せん者は。西方の行人を毀ことなかれ。西方に生れんと欣はん者は。都率の業を毀ことなかれ。各性欲にしたがひて。情にまかせて修學すべしと釋し給へり。安養の行人もし此教に隨はんと思はんものは。祖師の跡を逐て隨分に戒品を守り。衆惡をつくらず。餘教を妨ず。餘行を輕しむる事なかれ。惣じて佛法におひて恭敬心をなし。更に三万六万の念佛を修して。五門九品の淨土を期すべし。しかるを近日北陸道の中に一の誑法の者あり。妄語を構て云。法然上人の七万返の念佛は。たゞこれ外の方便なり。内に實義あり。人いまだ是を知らず。所謂心に彌陀の本願をしれば。身

(767)

かならず極樂に往生す。淨土の業こゝに満足しぬ。此上何ぞ一返也といふとも。重て名號を唱べきや。彼上人の禪坊におひて。門人等廿人ありて祕義を談ぜしに。淺智の類は性鈍にしていまださとらず。利根の輩わづかに五人。此深法を得たり。我其一人也。彼上人の己心中の奧義也。容易にこれを授けず。器を擇て傳授せしむべしと云々。風聞の説實ならば皆以虚言也。迷者を哀れまんが爲に誓言をたつ。貧道これを祕して。偽て此旨をのべ不實の事をするさば。十方の三寶正に知見をたれ。毎日七万返の念佛むなしく其利益を失はん。圓頓行者の初より實相を緣ずる。猶六度万行を修して無生忍にいたる。いづれの法か行なくして證をうるや。乞願は。此疑網に墮せんたぐひ邪見の稠林を切て正直の心地をみがき。將來の鐵城を通過終焉の金臺にのぼれ。胡國ほど遠し。思を雁札に通ず。北陸境遙なり。心を像教にひらけ。山川雲重て。面を千万里の

月にへだつとも。化導縁あつく。ひざを一佛土の風にちかづけん。誑惑の輩いまだ半卷の書をよまず。一句の法をうけず。むなしく弟子と號する甚其謂なし。己が身に智德かけて。人をして信用せしめんが爲に。恣に外道の法を説て師匠の教として。或は自稱して弘願門と名付。或は心に任て謀書を造て念佛要文集と號す。此書の中に初て偽經を作て。新に證據をなふ。念佛祕密經是也。華嚴等の大乘の中に。本經になき所の文を作て云。諸善を作べからず。只專修一念を勤むべしと。彼書いまだ花夷に流布す。智者見ると云とも是あざむけるなるべし。愚人是を信受する事なかれ。如し此の謀書前代にもいまださかず。猶如來におひて妄語を寄す。況や凡夫におひて虚言を與へんをや。此猛惡の性。一をもて万を察すべき者也。是癡闇の輩也。いまだ邪見とするに及ばず。誑惑の類也。名利の爲に他をあやまつ。抑貧道山學の昔より。五十年の間廣

行ず一
行じ一
作本

く諸宗の章疏を披閱して。叡岳になき所をば是
を他門にたづねてかならず一見を遂ぐ。讚仰年
積て聖教殆盡す。加之。或は一夏の間四修を修
し。或は九旬の中に六時懺法を行す。年來長齋
して顯密の諸行を修練しき。身既に病老しての
ち念佛をつとむ。今稱名の一門につゐて易往の
淨土を期すといへども。なを他宗の教文におひ
て悉く敬重をなす。況や。もとより貴ぶ所の眞
言止觀をや。本山黒谷の法藏に傳持し。闕する
所の聖教をば書寫してこれを補す。然を新發意
の侶。愚闇後來の客いまだその往昔を見ず。此
深奥をしらず。僅に念佛の行義を聞て。猥しく
偏愚の邪執をなす。嗚呼哀哉。傷べし悲べし。
有智の人は是を見て旨を達せよ。其趣粗先年の比
記す所の七箇條の教誡の文に載たり。子細端多
し。毛舉不能而已。承元三年六月十九日沙門源
空云。安養欣求の行人は。無行の一念義を捨て。
多念數返をたしなむべき條。上人の制禁既に明

也。敢て違犯すべからず。但し歎くらくは。上
人の在世猶以邪見の惡義如。此。何況や。上人滅
後年久し。面受口決の門弟等みなもて往生し給
ひぬ。此後の惡義邪見は。恐る所なく憚所なから
ん歟。今又誰の人は是をいましめ。是をあらため
んや。歎べし悲べし。流を汲て源を尋ねる謂也。
我も人も我執なく偏執なく。只上人勸進の旨を
信じて。多念をばげみ畢命を期とすべきもの也。

法然上人傳記卷第七上

- 十一 歸京宣下到來即上人立國進發之事
- 十二 被著勝尾寺事
- 十三 一切經施入事
- 十四 聖覺法印一切經讚談事
- 十五 宇津宮彌三郎入道參上事
- 十六 立勝尾寺被入洛事
- 十七 被著大谷禪房事
- 十八 上人參内時雲客夢事

字無しの
一本充満
の下の
比一本頃
に一本頃
彌山五須
無しの字
上人の被
著の上被
事の上被
敷の表題
羣集一本
念佛取行
行に念佛
調之一本
調之一本
如化人一
佛に法念
る佛に法念

上人歸京事

上人下國の後。念佛の弘通隣國に充滿しければ。
可然宿善なりと。國中の貴賤よろこびあへりけ
るほどに。月輪殿最後の時に至るまで。返々
仰置しむねをもて。光親卿連々御氣色を伺
けるに。諸卿また諫言を奉られければ。彌陀本
願の念佛をすゝむる事尤至要なり。爰に諸宗の
學者。吹毛の咎を求る所に。弟子等があやまり
を本師におはせて。邊鄙にくぢけん事。冥鑑の
憚あるよしを申合れければ。同じき年承元元年
の比八月。龍顔ことの外にやはらぎて。鳳詔ほど
なく下されける。彼勅免の宣下の狀云。

左大辨下 土佐國

應早召還流人源元彦身事

右件元彦。去建永二年二月廿七日。坐辜配流
土佐國。而今依有所念行。所被召還也。者。
某宣奉勅。件人令召還者。國宜承知。依宣
行之。

承元元年八月日左大史小槻宿禰國宗

國宗宣下の狀。國に到來しければ。門弟は歸洛
を悦び。士民は餘波を惜む。此時稱名の聲いよ
々高くして。五須彌山にも至ぬべし。信心の
おもひます。いさぎよくして。入功德池にも
すまざらんをや。上人やがて國を立て。のぼり
給ふ。上人いそぎ都へも入給はず。攝津國勝
尾寺。勝如上人往生の地。いみじく覺て暫くお
はしければ。花夷の道俗。貴賤以下羣集しけり。
此寺に恆例の引聲の念佛取行ける時。衣裝見ぐ
るしかりければ。弟子信空上人に件の子細を示
つかはされて。ほどなく裝束十五具。調て持參
せられけり。住侶等感に絶ず。臨時に七日の念
佛勤行し侍りけり。抑勝尾寺は善仲。善算兩
上人。如化人行せられき。證道上人の弟子とし
て。勝如上人。此所に住して往生を遂られけり。
當寺開關のむかし。開成皇子。金字の大般若を
書寫し給ひしに。八幡大菩薩夢の中に黄金をあ

たへて。大願をとげられし。供養の時。山中の草木ことくくなびきし中に。翠松古木なを西の谷にあり。今彼谷を上人に施入のあいだ。住所と定給へり。

一切經施入事

當寺に一切經をしまさるよしきこえければ。上人所持の經論をわたし給ふに。住侶等各悦をなして。花を散じ香をたき。蓋をさして迎奉る。

聖覺法印一切經讀談の事

住侶等隨喜悅豫して。聖覺法印を届して。唱導として開題讀談の其語云。夫八万の法藏は八万の衆類をみちびき。一實真如は一向專稱をあらはす。彼大聖世尊の自説南無佛と唱へ給へる。その名をあらわさずといへども。心は彌陀の名號也。又上宮太子の誕生して南無佛と唱へ給へる。其體を萌すといへども。志は極樂の教主也。然るに慈覺大師の念佛傳燈は。經の文を

引て寶池の波に和すれども。劣機行ずるにあたはず。諸師所立の念佛三昧は。佛境を縁として心の塵をはらへども。下根の勤にあたはず。惠心僧都の要集には。二道を造て一心のものはまよひぬべし。永觀律師の十因には。十門をひらきて一篇につかず。空也上人の高聲念佛は。聞名の益をあまねくすれども。名號の徳をばあらはさず。良忍上人融通念佛は。神祇冥道をば勸給へども。凡夫の望はうとし。爰に我大師法主上人。行年四十三より念佛門に入て。普く弘給ふに。天子のいつくしき玉の冠を西にかたぶけ。月卿のかしこき金笏を東に正しくす。皇后のこびたる韋提希夫人のあとをおひ。傾城のことんなき五百侍女の儀をまなぶ。然る間富るはあごりてもてあそび。貧はなげきて友とす。農夫の鋤をふむ。念佛をもてたうたとし。織女が糸をひく。念佛をもて經緯とす。鈴をならす驛路には。念佛を唱へて鳥をとり。船ばたをた

ノくらざる
一本つまる
ぐらざる
に作る
徳池一本
徳水に作
する一本
内一本中
に作る
廣一本宅
に作る
音一本聲
に作る
のたまひ
ける一本
作る一本
一本不審
の下の字
の二の字
あ

く海上には。念佛を唱へて魚をつる。雪月花を見る人は。西樓に目をかけ。琴詩酒を翫ぶ輩は。西の枝の梨をとる。是皆彌陀をあがめざるをば瑕瑾とし。珠數をくらざるをば恥辱とす。爰をもつて花族英才といへども。念佛せざるをばおとしめ。乞丐非人といへども。念佛するをばもてなす。故に八功德池の波の上には。念佛の蓮池にみち。三尊來迎の窓の内には。紫臺をさしをくひまなし。然ればわれらが念佛せざるは彼池の荒廢なり。我等が欣求せざるは。其國の衰弊也。國のにぎはひ。佛のたのしみ。念佛をもて本とし。人のねがひ我のぞみ。念佛をもて先とす。仍當座の愚昧。公請につかへてかへる夜は。念佛を唱て枕とし。私慮を出て趣日は極樂を念じて車をはす。これ上人の教誡也。過去の宿善にあらずやとて。鼻をかみ音をむせび。舌をまいて。といこぼる間。法主涙をながし。聽衆袖をしぼりて。ことくく念佛門に入

て。併上人の勸にしたがふ。誠に是宿善の至り。愚なる心。短なる舌にて述へきにあらず。
宇津宮入道參上事
宇津宮三郎入道は。實信房蓮生と。法名をつけ。出家の形なりといへども。いまだ念佛往生の道を知らず。熊谷入道のすゝめによりて。大番役勤仕の時。勝尾寺へまいりて。上人の見參に入けるに。念佛往生のひねを授られて後。上人のたまひけるは。上來雖説定散兩門之益。望佛本願。意在衆生。一向專稱彌陀佛名と判じて。一切善惡の凡夫。口稱念佛によりて。無漏の報土に往生する事。善導和尚彌陀の化身として。かやうに釋し給へる上は。此度の往生は入道殿の心なるべしと被仰ければ。ふかく本願に歸して。上人御往生の後。御門弟の中には。誰人にか不審をも尋申べく候らんと申けるに。善惠房といへる僧に相尋べしと仰られければ。やがて見參に入候ばやと申けるに。淨土宗の學者も餘

學を知ざるは。いふかひなき事なれば。太子の御墓に願蓮房といへる天台宗の人に。學問せよとて遣したる也と仰られければ。幸に天王寺參詣の心ざし候へば。御文を給候はんとて。上人の御文をたまはりて。太子の御墓へまわり。善惠上人の見參に入て。上人御往生の後も。二なくたのみ申けり。西山吉峯といふ所に。庵室をひすびて。他事なく念佛しけるが正元元年十一月十二日。臨終の用心たがふ事なく。念佛相續して。種々の靈異を施し。耳目をどろかすほどの往生をとげき。

上人入洛事

勝尾寺の隱居の後。烏頭變毛の宣下をかうぶり。はやく花洛に還歸有べきよし。建曆元年十一月十七日。藤中納言光雅卿の奉にて。院宣を下されけるに付て。上人歸洛ありければ。一山徳をしたひ満寺はらはたをたちて。万俣の霞よりいで。九重の雲にぞ送りける。

上人被著大谷禪房事

同月廿日。上人既に入洛ありければ。慈鎮和尚の御沙汰として。大谷の禪房に居住せしめ給ふ。昔釋尊上天の雲よりくだり給ひしかば。人天大會まづ拜見し奉らん事をあらそひ。今上人南海をさかのぼりたまへば。道俗男女さきに供養をのべん事をいとなむ。羣參の輩一夜の中に一千餘人と聞えき。幽閑の地を卜給といへども。人の集る事盛なる市のごとし。

雲客夢の事

上人入洛の後。或雲客のゆめに。上人内裏へ參ぜられけるに。天童四人雲にのぼりて管絃を奏し。天蓋をさし覆ひ奉ると見て夢覺てきくに。上人參内し給へりと云。不思議なりし事也。

法然上人傳記卷第七下

十九 老病事

- 廿 高聲念佛被勸事
- 廿一 圓形紫雲垂布事
- 廿二 韋提希夫人問答事
- 廿三 御往生事
- 廿四 諸人夢相並葬送事

十九 老病事

建曆二年壬申正月二日より。上人老病のうへに日來の不食殊増氣あり。凡此兩三年は耳も不聞。目も不見。ましくつるが。更に昔のごとく明かに成て。念佛常よりも増盛也。睡眠の時も念佛の唇舌鎮へに動く。見る人奇特の思ひをなす。同三日戌の時病床の傍なる人。御往生の實不を問奉りければ。我もと天竺國に在し時は。聲聞僧に交て頭陀を行じき。いま日本にしては。天台宗に入て一代の教法を學し。又念佛門に入て衆生を利す。我もと居せし所なれば。さだめて極樂へ歸り行べしと仰られければ。

ば。勢觀上人申さく。先年も此仰侍りき。抑聲聞僧とは佛弟子の中には何哉と申し時。舍利弗也とたえ給ふ。又信空上人云。古來の先徳皆遺跡あり。而に今一宇建立の精舎なし。御入滅の後何の所をもてか御遺跡とすべきやと。上人答て曰く。遺跡は一廟を卜れば遺法同じからず。予が遺跡は諸州にあるべし。其故は念佛三昧の興行は愚老一期の勸化也。賤男賤女の柴の樞。海人漁人の葦の宮屋に至るまで。念佛を修せん砌は。皆是我遺跡なるべしとぞ仰られける。

廿 高聲念佛事

同十一日辰の尅に上人起居たまひて。西に向ひて高聲に念佛し給ふ。聞人皆涙を流す。門弟等に告て曰。高聲に念佛すべし。此名號を唱も。一人もひなしからず皆往生すべき也。高聲念佛をすゝめて。念佛の功徳を種々に讚談し給ひて。觀音勢至等の菩薩聖衆現前し給へり。

一本如來の字あり

見ふに一本

云ふに一本

積里一本

積里一本

士一本志

一本通照

の下の文

の二文字

たがえは

本がえは

本がえは

の一本大

の二本大

の二本大

の二本大

の二本大

の二本大

の二本大

の二本大

の二本大

の二本大

の二本大

の二本大

(780)

一體分身更に疑ふ事なけれ。又上人在世の間。諸人の靈夢これおほし。詮をとりて是をいはし。ある人の夢には上人釋迦如來と見る。或人の夢には上人と眞如堂の彌陀とは。一體分身也とみる。或人の夢には大勢至菩薩也と見る。或人のゆめには阿彌陀の右脇に坐し給へる人也と見る。或人の夢には道綽禪師也と見る。或人の夢には善導和尚也とみる。或人の夢には上人なる赤蓮花に坐して念佛し給ふと見る。或人の夢には武者洛中に充滿して。鬪闘堅固也といへども。上人住房には此事なし。是則念佛するゆへ也と見る。或人の夢には上人住房を見れば。瑠璃をもてつくりて照耀すきとありて。即瑠璃の橋をわたせると見る。凡此夢ども言語の及ぶ所に非ず。此外在世といひ。滅後といひ。靈夢を感ずる人勝計すべからずといへども。しげきによりて具には載せず。抑夢の境をたづねれば。虚實に通じて二義あり。凡五の因縁ありといへ

一四〇

ども。いまだ必しも虚無の事に非ず。彼積里記王の十夢は皆釋尊の遺法を表し。寶海梵士の一夢はまさしく未來の成佛を示す。いはんや誠に一乘を行ずれば。夢に八相を唱ふ。先規分明也。いまの義眞實なるべし。何をもちか知るとならば。諸人の夢たがはずして万端の瑞を施したまひ。つゝに光明遍照の文を誦して。まさしく往生極樂の願をはたし給へる故也。然則後々將來見聞道俗の中に。疑者はうたがひをたち。信者は信をまして。上人のおしへをたがえず精勤修行せば。順次にかならず極樂世界に生れて上人を奉覲し。彼加被をうけて有縁をすくはん事。掌をさして疑ふべからず。我も人も一心一向の思ひに住して。善人も悪人も専修專念の行を立て。唯畢命を期とすべき也。さて門弟等釋尊の遺誠にまかせて。遺骨をおさめ中陰をいとなむ。

法然上人傳記卷第八上

初七日追善事 二七日

三七日 四七日

五七日 六七日

七々日

初七日 不動尊 御導師信蓮房

大宮入道内大臣家實宗御諷誦文云

夫以。先師在生之昔。弟子遁朝之夕。凝一心精誠。受十重禁戒。故馮濟度於彼岸。敬修諷誦於此砌。莫嫌小善根。必爲大因緣。仍爲飾蓮臺之妙果。早叩霜鐘之逸韻矣。

別當前因幡守源朝臣盛親敬白。

二七日 普賢菩薩 御導師求佛房

願主可尋之

三七日 彌勒菩薩 御導師住眞房

末弟湛空法師。捧誦經物。唐朝王義之摺本。一紙

附錄 法然上人傳記卷第八上

面十二行。八十餘字書之。

にしへよし行へきみちのしるへせよ

むかしも鳥のあととありけり

四七日 聖觀音 御導師法蓮房

弟子良清願文云

先師當末法万年之始。弘彌陀一教之勝。智慧提。鈿。莫耶之鋒非。利。戒行瑩。珠。摩尼之光比。明。抑尊靈先。逝河。去四七日。遠人望。來迎之雲。就。新墳。來兩三度。遺弟聞。酷烈之香。倩思。誠誦之言。雖。請。菩提之揭焉。旨意彌以伏膺。

五七日 地藏菩薩 御導師權律師隆寬

弟子源智願文

彩雲掩軒。近見遠見而來集。異香滿室。我聞人聞而嗟嘆矣。

六七日 釋迦如來 御導師法印聖覺

慈鎮和尚御諷誦文云

佛子。上人存日之間。談法文。常用唱導。結

一四一

聖靈一作

慈圓一作

至統一作

秘業一作

北嶺一作

縁之思不淺。濟度之契如深。因茲當六七日忌辰。聊修諷誦。三鳴花鐘。擊法衣。送往生家。解脫衣是也。設法食。至化城之門。禪悅食是也。然則幽靈答彼平生之願。必生上品之蓮臺。佛子因此圓實之思。早得最初之引接矣。

別當法印大和尚位增圓敬白

是草案。清書ともに和尙の御筆也。大師嫡々の正統として山門の眞言の一流。秘業をつたへ奥義を極め給しかども。つねに上人に御對面ありて。本願の旨趣をとぶらひ。極樂の往生を願ましくける。稱名の薰修猶日あさく。光陰の運轉時うつりぬとやおぼしめされけん。

極樂にまた我こゝろゆきつかす

ひつしのあゆみしはしとまれ

とぞ詠じましける。又日吉社に百日御參籠の百首の御詠のおくに。

人を見るも我身を見るもこはいかに

南無阿彌陀佛

とあそばされけるに。浮世をかるくする御志ふかく。淨刹にそめる思食あさからざりし御事。偏に上人の恩徳也ければ。没後の追教に至るまでなをざりならずぞ。

七々日

兩界曼陀羅

御導師三井僧正公胤

法弟子信空願文云

先師廿五歳之昔。十二歳之時。忝結師資之約契。久積五十之年序。一旦隔生死。九迴腸欲斷。自宿叡山黒谷之草庵。至移東都白川之禪房。其間云撫育之恩。云提撕之志。報謝之思。昊天罔極。是以顯彌陀迎接一軀之尊像。安胎藏金剛兩部之種子。摺寫妙法華。書寫金光明經。各一部以開題開眼。一心懇志。三寶知見。公胤僧正。三卷の書を造て。上人所造の選擇を破す。是を淨土決疑抄と名付。而に順徳院御處胎の時。僧正は加持の爲に參じ。上人は説戒の爲に召さる。奉行遲參の間。不慮の外に一所に會合して。淨土の法門を談じ。又餘宗にわたる。

其の一重なる蓮華一本
此華一本
證也一本
いはれな
スリに作
一本か
見れば
一本中
作上
一本上
あの上
の三
字

然ば彼僧正ふかく上人に歸して。白川の房にかへりて。即決疑抄を火焔になげて。誹謗の語忽に灰燼となりぬ。然れどもなを前をかなしむ涙おさへがたく後悔をいたす。腸たちやすし。仍彼の談他の過失をもて。念の誹謗つもりしかば。其の罪障懺悔の爲に。種々の達観をさげたまひ。あまさへ中陰の唱導を望み。上品の託生を啓せられけり。凡此間佛事をいとなび。諷誦を行へ。數を知らず。さて遂に上人の墳墓を大谷の禪房の東に建立しければ。毎月廿五日はかの御報恩の爲に。上下羣集しけり。同三月十四日の夜或獨の女人。夢に上人の廟墳にまいりたれば。其庭に色々の蓮花生ぜり。僧ありてつねの持蓮花のごとくなる。未敷の蓮花一莖をとりにてこれをたまふ。即僧の云。此地に詣てんものは。皆蓮華一莖を給べし。是則往生人の類に入べき證也。普く人に是を示べしと。仍掌を合せ信をいたして。命をうくと思ひて夢

附錄 法然上人傳記卷第八下

法然上人傳記卷第八下

廿六 堀川太郎入道往生事

廿七 隨蓮夢想事

廿八 民部卿入道往生事

廿九 公胤僧正往生事

三十 靜遍僧都往生事

廿六 堀川太郎入道往生事

中陰の間。或日午尅計に。老翁一人。上人の墳墓に尋來て云。我は是西山の樵夫也。去寅の尅の夢の中に僧來て。法然上人の廟塔の柱奉加せるもの。只今極樂へ往生せり。ゆきて結縁すべしと告給へり。而に年來いまだ上人の御事

に本や
作るう
と一

を不承知の旨。今朝早旦より洛中に出て。在々所々を尋奉るほどに。數尅を経たりと申。彼柱奉加せるものは。上人を奉_レ信ける。堀川の太郎入道也。件の入道は所勞によりて。東石藏の東の東。山寺に住せり。今此老翁の告に驚て。各行てたづぬる處に。老翁も同じく望めり。遺跡の輩語云。聖人常に我傍にまし_レて臨終を示し。念佛をす_レめ給ふよしを語て悦侍つるが。今朝已に往生せりと申。諸僧老翁共に隨喜禮拜して歸りにけり。既に廟塔の柱奉加の微功なをひなしきにあらす。況や淨利の寶臺欣慕の一念。豈いたづらにほどこさんや。

廿七 隨蓮往生事

信じて。二心なく念佛しけるが。上人御往生の後はいよ_レ念佛の外にはすこしも餘念なく。三ヶ年をふるほどに。建保二年の頃。いかに念佛すとも學問せずして。三心をだにも知らざるものは往生すべからずと。世間の念佛者どもの中に申ければ。隨蓮申さく。故上人はやうなきを以てやうとす。たゞひらに佛語を信じて念佛すれば。必ず往生する也とて。全く三心の事も不_レ被_レ仰と申せば。彼人のいはく其は一切に心得まじきものゝ爲に。方便して被_レ仰ける也。上人御存知のむねとて。經釋の文などゆ_レしげに申聞せければ。隨蓮が心中に。誠にさもやあるらんと。いさ_レか疑心をあこして。誰人にか此事をたづね申べからんとおもひて。一兩月の間此事をのみ心にかけて。念佛も申さて過るほどに。或夜の夢に。法勝寺の西門をさし入て見れば。池の中に様_レの蓮花開てよにめてたかりけり。西の廊のかたへあゆみよりて見あぐれば。

の一本
字なし
の下の
字をの
一本ま
の字あり
の字あり
申てい
の字あり
一本に
申に作
く一本
一が源
字あり
其時一
其後に
作る本

閉るご
し一本
がごと
に作る
本申し
るに作
るに作
るに作

僧衆あまたならび居て。淨土の法文を談ぜらる。隨蓮さだはしへのぼりて見れば。故上人北の座に南面にまします。隨蓮を御覽じてちかくまされと被_レ召ければ。をそれ_レ傍にまいりぬ。隨蓮が存するむねいまだ申あげざるさきに。上人被_レ仰けるは汝此ほど心に歎とあり。ゆめ_レわづらふ事なかれと云々。この事一切人にも申さず。何として被_レ知食_レたるにかとおもふながら。上件のやうを申あげれば。上人仰られて云。たとへばひが事いふものありて。あの池の蓮花を。あれは蓮花にあらず。梅を櫻ぞといはんには。汝はその定に蓮花にはあらざりける。まこと梅なり櫻なりと思はんずるか。隨蓮申ていふ。現に蓮花にて候はんものをば。いかに人申ともいかでか信候べきと申に。上人曰。念佛の義また如此。源空汝に念佛して往生する事は。うたがひなしといひし事を信たるは。蓮花を蓮花と思はんがごとし。ふかく信じてとかくの沙汰

にをよばず。たゞ念佛を申べきなり。惡義邪見の梅櫻を信ずべからずと被_レ仰と見て夢さめぬ。其時隨蓮昔の御詞をふかく信じて。少きの不審なく日來の疑のこりなく散じて。一心をこらし。臨終の用心亂る事なくして。兩眼閉るごとし。遂にやうなきをやうとして。行やすくぞ行ける。

廿八 民部卿入道往生事

民部卿入道範光は。後鳥羽院の寵臣也。然に最後の時。御幸なりて。往生の實否いかとおもひ定むべきと仰下されけるに。御返事に申て云。往生更に疑所侍らず。そのゆへは去夜の夢に。僧病の床に沙門あり。誰の人ぞとたづぬるに。僧云。我は是れ源空也。唐土にては善導と名付。此土に來て衆生を利する事。既にもて三ヶ度也。今汝に命終の期を告げん爲に來臨する所也。明後日午の尅は其期なるべしといふとみて夢覺ぬ。すてに此告をかうぶるゆへに往生疑ざる由。

一けりとも一けりとも一けりとも
かへりとも一けりとも一けりとも
かへりとも一けりとも一けりとも

一の本の字な
一の本の字な
一の本の字な

其翌日午尅。たがはず正念に住し念佛して往生を遂しかば。眼前の奇特。實に不思議なりけりとぞ申合ける。

廿九 公胤僧正往生事

上人往生の後五ヶ年を送りて。建保四年丙子四月廿六日の夜。公胤僧正の夢に上人告曰。往生之業中。一日六時到。一心不乱念。功驗最第一。六時稱名者。往生必決定。雜善不決定。專修定善業。源空爲孝養。公胤能說法。感喜不可盡。臨終先來迎。源空本地身。大勢至菩薩。衆生爲化故。來此界度々。同閏六月廿日。僧正七十二。種々の瑞相を示して。禪林寺の砌にして往生を遂られし日。仙洞后宮より初奉て。槐門棘路に至るまで。紫雲瑞相に驚て。使節ちまたにみち。車馬ちりにはず。洛中洛外の道俗。村南村北の貴賤。結縁のあゆみをはこび。隨喜の心をもよほさずといふ事なし。顯密の碩徳。天下の明匠にておはしつる僧

正さへ。せめても宿善のいみじくて。上人に歸し念佛を信じて。往生の素懐を遂られぬる事。ありがたき事とぞ時の人申ける。

三十 靜遍僧都往生事

禪林寺僧都靜遍は。大納言頼盛卿の息。弘法大師の門人として。醍醐の座主勝賢僧正にしたがひて。小野流をうけ。仁和寺の上乗院の仁隆法印を師として。廣澤の流を傳て。兩流を一器にうつせる深奥の眞言師なりき。然を世舉て上人所造の選擇集を依用し。念佛に歸する人耳目にあまる。嫉妬の心を發て。選擇を破して念佛往生の道をふさがんとたくみ。破文をかくべき料紙まで用意して。是を披見し給ほどに。日比の所案にははたと相違して。末代惡世の凡夫の出離生死の道は。早く念佛にありけりと見定て。則念佛に歸して返て選擇を賞翫するあまりに。續選擇を作りて。年來嫉妬の心をもて是を破せんとたくみし事。大なるが也と後悔

一本の字な
一本の字な
一本の字な

一本の字な
一本の字な
一本の字な

(787)

して。選擇集を頂戴して。大谷の墳墓に參りて。泣く悔謝をいたす詞にいはいはく。今日よりは上人を師として念佛を行はずべし。聖靈照見を垂れて先非をゆるし給へと。其後遂に高位の崇班をのがれて心圓房と名を付て。一向專修の行を立て。偈を結て云。

一期所案極。永捨世道理。

唯稱阿彌陀。語嘿常持念。

と。世の道理を捨といへるは。世人念佛に付て無盡に義をいふに。いづれも皆一分の義理なきにあらず。然て我は只常に名を稱して。忘れずとの給へり。又法照禪師の五會法事讚に曰。彼佛因中立弘誓。聞名念我物迎來。此七言八句の文を誦してこそ。淨土宗の肝心。念佛者の目足よと。常には申されける。一期の間退轉なく語嘿常に持念して。貞應三年四月廿日往生を遂られき。宋張丞相いまだ秀才たりし時。ふかく佛法をそねみて。法を破する論を作らん事を

吟ぜし時。或人方便を廻してかたる。邪見の説どもよく見破すべき也とて。維摩經三卷を與へしに。此經を披見して歸て後悔の信を發して。專佛教を助けて返て護法論を造き。震旦日域ことなれども。捨邪歸正これおなじきをや。

法然上人傳記卷第九上

- 卅一 山門公人向御廟堂事
- 卅二 頓宮入道道散山門使事
- 卅三 改葬事
- 卅四 過洛中事
- 卅五 自嵯峨奉渡廣隆寺事
- 卅六 隆寬律師往生事
- 卅七 於粟生奉茶毗事
- 卅一 山門公人向御廟堂事

延曆寺の兩門跡と號するは。梨本。青蓮院是也。各々四明三千の貫首にそなはり。一山兩門の棟

定増一本
定照一本
已下同
長者一本
使者一作

梁にまします。或は在世の庭に法文を尋て。往生の先達とし。或は没後の庭に諷誦捧て。值遇の後會を契る。遺骸に至て豈信心あるそかに立給んや。然を上野の國より登山したりける並榎の立者定増と云者。ふかく上人の念佛弘通をそねみて。選擇集の破文を作てこれを彈選擇と名く。隆寛律師是を見給て。先師上人の素意をあらはさんが爲に。顯選擇を作て定増が難破をくつがへして。汝が僻破のあたらざる事。たとへば暗天の飛礫のごとしと。あざむきかゝれたりけるを。定増遺恨をなしけるあまり。上人往生の後十六年を経て後。堀川院の御宇嘉祿三年丁亥の夏の頃。衆徒かたらひ。天下皆一向專修に趣て。顯密の教法すたれなんとす。專修念佛を停廢すべし。就中隆寛律師。我山の學者として。同宗をすて專修をたつること不可然。念佛宗の張本を遠流せらるべし。其根本たるによりて。すべからくまづ源空が大谷の墳墓を破却して。

彼死骸を。賀茂川にほりながすべき由。衆徒嗷々の羣議におよべり。攝政は猪熊殿家。座主は浄土寺の僧正基。攝政殿の御兄なり。衆徒の濫訴すてに勅許ありければ。六月廿二日山門の所司專當等を遣して。大谷の廟堂をこぼち捨べきよし。きこえしかば。京都の守護修理亮平時氏長者をさしつかはす。頓宮の内藤五郎兵衛尉盛政法師西佛子息一人を相具して罷向ふ。頓宮の入道。山門の使者にむかひて申ける。たとひ勅許ありといふとも。武家にふれずして左右なく狼藉をいたす條。甚以自由也。しばらくあひしづまりて。穩便の沙汰をいたすべし。若制止にかゝはらずば法に任すべし。是武家の御下知の趣なりといふに猶不_レ留。

卅二 頓宮入道追_レ散山門使事

頓宮入道詞をつくして問答すといへども。謗家の凶徒あだをむすびて承引せしめず。次第に廟墳をやぶり。速疾に房舎をこぼちければ。かね

て。子細はふれをはりぬ。醫王山王もきこしめせ。念佛守護の赤山大明神にかはり奉て。魔縁うちはらひ侍らん。いつはりて四明三千の使と號して。こびて四魔三障のむらがり來る歟。もとよりは主君の爲にそのかみ切にき。命は師範の爲に唯今捨べし。たとひ千の軍數の兵向ふとも。いかてか一人當千の手にかゝるべき。豈はかりきや。戰場をもて往生の門出とし。惡徒をもて知識の因縁とすべしとは。各南無阿彌陀佛を稱すべし。只今一々に汝が命をば召取べし。自他もろともに九品蓮臺の同行となり。怨親同じく七重樹下の新賓たらん。善惡不二のことはり。邪正一如のおきては。山門の使者ならば定めて聞知らん。顯には東關の御家人。弓箭をたづさえて狼藉をふせぐ。冥には西刹の念佛者。魔軍をしりぞけて凶徒をしづめんと云て。父子ともに馬の鼻をならべ。法に任せよと下知しければ。山門の使者くもの子をちらすがごとし。或は

ぼんのくぼに足をつけて命をたすからんとするものもあり。或はひたひの間に。手をあはせて降をこはんとするものもあり。如此するほどに。其日はくれにけり。

卅三 改葬事

堂舎を破損すといへども。かやうに追散されけるが。墳墓には手かけず。かくて今夜信空上人。妙香院僧正月輪禪定に参りて。今度しばらく相しづまるといふとも。大谷は山門領也。山僧のいさどあり遂にむなしからじ。信空改葬せんと存するよしを申ければ。此義尤よろしかるべしと仰られける間。やがて今宵人しづまりて後。改葬し奉る。むかし月氏に教主釋尊の尊容をぬすみ奉し時。専ら警固をいたしき。いま日域に本師上人の遺骸をうつさんとする。むしろ災難なからんやとて。宇津宮入道蓮生守護の爲に。遁世の身なりといへども。出にし家の子息郎従をまねきて。數多の兵士をもて宿直し奉る。此外頓

宮の兵衛入道西佛。千葉の六郎大夫入道法阿。濫谷の七郎入道道阿。鹽谷の入道信成等。兵杖を帶し軍兵を率して供奉し奉る。宇津宮入道申けるは。五材四儀はもと百勝の術也。しかれば古は偏に名聞利養の爲にしてなを四儀を多し。今は速に往生極樂の爲にして忽に一心をさとれり。家をわすれ。親をわすれ。生をわすれ。身をわするゝ事。吳起が詞今日既に知れたり。身情く往事をおもへば。祖父金吾朝綱の朝臣は。東大寺の脇土觀世音菩薩を造立し奉て。かたみを南都にとり。孫子沙彌頼繩法師は西方界の教主阿彌陀如來を歸敬し奉て。たましむを上刹にすましむ。祖孫ちぎりふかく。前後たのみあるものか。さて御棺の蓋をあけたりければ。御面像は在世の時にすこしもかはらず。異香は數年の後までとなく薫じけり。誠に貴と申さむもかへりておろかなり。

卅四 過洛中事

已に念佛の事によりて。選誦に及給し上は。予其跡をおはん事尤本意なりとて。長樂寺の來迎房にて。最後の別時に七日の如法念佛を勤行せられけるに。結願の日に當りて異香室内に薫じ。蓮花白蓮庭上に生じ。瑞花空よりふりければ。見人は現身に往生せる歟とうたがひ。聞人は律師に奉仕せざることをうらむ。扱律師は森入道西阿彌陀佛承て。嘉祿三年七月五日。花洛を出て東關に趣給ふ。配所は奥州と定められしを。森入道ふかく律師に歸し奉ける餘り。念佛の先達に近付奉ぬる事。然べき宿善のいたりなりとて。律師の代官に門弟實成房を配所へ遣はし。律師をば西阿が住所相摸國飯山へ具し下奉りし時。同八月一日鎌倉を立給ひしに。武州刺史朝直朝臣廿二歳の時。相摸四郎と申けるが。末代にこれほどの智者にあひ奉らんことかたかるべしとて。御輿のまへにをひつき奉りて。事の由を申されしかば。こしをかきすへて對面せ

其曉やがて嵯峨へ遺骸を渡奉る時。御棺をかいて洛中を過るに。催されども。先師の遺弟。念佛の行人御供に參る人々一千餘人也。面々になみだをながし。各々に袖をしぼる。恐らくは双樹林の暮の色。跋提河の曉の波も。かくやと哀にぞ見へける。

卅五 自嵯峨奉渡廣隆寺事

嵯峨に渡置奉りて。在所口外すべからざる旨。各佛前に誓て退散しぬ。しかるを猶山門のいさどをりふかく。さぐり求べきよし其聞へ有しかば。五ヶ日を経て後同廿八日の夜。忍て廣隆寺の來迎房圓空がもとに移し置奉りて。其年はくれにき。

卅六 隆寛律師往生事

山門訴訟なをこはくして。隆寛律師にも限らず。成覺房。空阿彌陀佛等までも。配所定まるよし聞えしかば。律師のたまひけるは。凶徒等吾心を知ずして。定増が語による歟。但先師上人。

られにけり。朝直朝臣申されけるは。身こそ武家に生たりといへども。心は佛にかけたり。適人身をうけて。稀に明匠に逢奉れり。是併宿縁のしからしむるなるべし。願くは家業を不捨して生死を可離道を教へ給へと。律師の曰。年少の御身。武家のつはものとして。此御尋に及事宿善の内に催すなるべし。凡佛教多門なれども聖道淨土の二門を出ず。しかるに聖道門は有智持戒の人にあらずば。是を修行すべからず。淨土門は極惡最下の機の爲に。極善最上の法を授られたれば。有智無智を多らば。在家出家をさらはず。彌陀他力の本願を信ずれば。往生うたがひなし。就中末法に入て七百餘歳。時機相應の教行はた念佛の一門にかぎれり。是により飛錫禪師は末法にのぞみて。餘行をもて生死をいとふは。陸地に船を漕がごとく。他力をたのみて往生をねがふは水上に船を浮が如しと給へり。然れば名號本願の船にのりて。彌陀

壞一本續
に作る

詠一本嘆
に作る

見一本い
に作る

如來を船師として。釋迦發遣の順風に帆をあけ
ば。罪障の雲もしづまり。妄執の波もたえずし
て。一念須臾の間に。極樂世界の七寶の池の汀
にとづかん事。百即百生更にうたがひなし。此
安心たがひたまはずば。たとひ戰場に命を捨て
も。往生さはりあるべからずとの給ひければ。
朝直朝臣忽に眞實の信心を發して。毎日六万遍
の念佛は。一期退轉すべからずと誓約せられけ
るが。三十餘年稱名の薰修をつみて。文永元年五
十九歳の夏の頃。病惱をうけられけるが。五月
一日出家して臨終の儀式にとりむかはれしに。
同三日申時。年來所持の彌陀如來まのあたり病
者に告て。此度穢土をちもひすつる事は偏に我
力也。往生にあきては決定なりとの給ひけるが。
其夜の亥尅に及て高聲念佛四百餘返。體をせめ
つゝ。念佛のいきにておはり給ひにけり。在俗
の身たりながら。嚴重殊勝の往生を遂られし事。
しかしながらこれ律師の一言によるゆへ也。律

師は飯山へ下給ひし後は。森入道の尊崇いよ
くふかく。歸敬他事なかりしほどに。同年仲
冬より風痾におかされ。老病臥給ひしかば。病
床にふてをとりて。一期の身の事を記し給へり。
これを壽中吟となづく。其中に曰。我さく。達
摩和尚は配所の叢に跡をのこし。慈恩大師は壞
土のいほりに名をとゞむ。ひとり佛心宗の根
源。ひとり法相宗の高祖也。大國なをしかり。
況や邊州をや。上古又如此。況末代をや。苦
海安からず浮生夢のごとし。唯聖衆の來迎をの
ぞむ。更に有爲の遷變をいたまずとて。極樂を
賦する詩。光明を詠ずる歌をかゝれ。
佛意定知智願明。 故關夜月待雲迎。
舞姿如鳥去留易。 樂韻任風遠近鳴。
界道林池交友思。 樓臺宮殿禮尊情。
智光照攝一無捨。 八万四千三字聲。
み名をよふこゑすむやとに見る月は
雲も霞もさえはこそあらめ

日にしたがひて次第によはり給けるが。同十二
月十三日廿日改元申時安貞元に至て律師のたまひける
は。往生の時既にいたれり。予が義の邪正をも。
一向專修の往生の根本をも。只今あらはずべき
也とぞ。彌陀の三尊にむかひ。五色の糸を手に
かけ。端坐合掌して彌陀身色如金山。相好光明
照十方。唯有念佛蒙光攝。當知本願最爲強の文
を唱給ければ。傍に侍る正智唯願房も同じく是
を唱て。臨終の一念は百年の業にも勝たりと申
ければ。すこしゑめる氣色にて本尊を瞻仰し。
高聲に念佛して禪定に入がごとくしてをばり給
にけり。春秋滿八十なり。彩雲軒に近づき。異香
室にみてり。遠近の緇素市をなし。いよ々々念
佛の信心をましけり。其後實成房なく々々奥州
より飯山へまかりて。遺骨を頭にかけて上洛
し。吉水の上の山に墳墓をつきけり。但馬宮の
御夢相に。法然上人。隆寛律師は互に師弟とな
りて。ともに利他をたすけたまふ。淨土にして

律師は師範。上人は弟子。娑婆にして上人は師
範。律師は弟子なりとぞ御覽せられける。華嚴
の互爲主伴。同大權化現。ゆへあるもの歟。
卅七 於粟生奉茶毗事
上人の御遺骸は。翌年嘉祿三年十二月廿九日正月廿
五日曉。更に廣隆寺より西山の粟生是なりに迎
へ奉て。信空上人。覺阿彌陀佛。此人々々を始
として。門弟等一所に來會して茶毗し奉るに。
種々の奇特どもあり。靈雲空にみち。異香庭にか
ほる。彌往生の望をなし。ます々々欣求の思ふ
かし。眞影をうつして。遠忌を修する門々戸々
に。誰の人か三五夜中の光を惜まざる。禮奠を
設て。月忌をいとまじ。在々所々にいづれの族
か。六八弘誓の雲をのぞまざらむや。

法然上人傳記卷第九下

- 卅八 嵯峨釋迦堂上人廟塔事
- 卅九 空阿彌陀佛往生事

- 四十 津戸入道往生事
- 四十一 明惠上人託事
- 四十二 明禪法印往生事
- 四十三 上人德行惣結事

卅八 嵯峨釋迦堂上人廟塔事

上人求法のはじめに。まづ嵯峨の釋迦堂に七日參籠し給ひき。定めて御祈請の旨侍けん。釋迦彌陀契ふかく。此土他土縁淺からずして。遂に遺骨を此靈地に藏。山の麓に收む。初從 此佛菩薩結緣。還於 此佛菩薩成就といへり。眞なる哉此こと。又上人の在世念佛化導の比。或人當伽藍に參て後生を祈請しけるに。釋迦如來夢に告て曰。當時法然房源空といふものあり。往生の道をさりあけたり。此頃の人は皆其道より往生する事也と云々。奇特の佛の告。傳へさく人いよ々信心をましけり。抑栖霞觀は。嵯峨天皇の別業。卽阿彌陀堂を建立して。栖霞寺と

二下
一
本
生
の
字
有
り

名付て。傍に同御廐を食堂になし。鷹屋を鐘樓にし。泉殿を阿伽井とす。今の釋迦堂は泉の名をかりて清涼寺と名づく。但釋迦如來はこの伽藍にうつり給ひし由來を尋れば。昔釋尊一夏九旬の間。報恩經を説て。生母摩耶夫人の恩を報ぜんが爲に。切利天上にのぼり給ひし時。優闍大王。如來に離れ奉らん事をかなしみて。毗首羯磨に仰て。赤せんだんをもて尊像をうつし奉る。持地菩薩神通をもて。優闍大王の國より須彌山に。金銀水精の三の橋を渡せり。木像も生身の佛の送りへのぼり給ひしに。生身と木像と道の前後を論じ給ひし時。木像の佛は。我は木像なり。争生身の佛にはまさるべき。生身の佛先に立給へとのたまふ。生身の佛。われは入滅すべき身也。木像は利益久しかるべき佛なれば。木像先にたち給へとのたまひしかば。木像先にたちて渡り給ひき。安居の後切利天より下て。曲女城に入給ひし時は。木像身を曲て生佛に揖し給

ふに。化導を木像にゆづりて。生身の佛先に立て。祇園精舎に入給ひて後に。大唐國を化せんが爲に。震旦に來り給ふ。揚州開元寺の梅檀の像是也。爰に日本東大寺の求法の沙門齋然法橋。天元六年に官符を給ひて入唐の時。まづ開元寺に至りて尊像を尋。卽帝闕に參じて龍顏に謁し。勅免をかうぶりて。彼瑞像をうつして歸朝せんとする處。本佛を渡し可奉之由。梅檀の像面り齋然に示し給ひければ。其心を得て新佛の色を本佛に相似せしめて取替奉て。晝は佛を荷擔し奉り。夜は佛齋然を荷擔し給ひて。寛和二年七月九日に歸朝す。永延元年二月十一日に入洛す。一堂を建立して此像を奉安置。今の清涼寺是也。彼永延より以來嘉祿に至るまで二百四十年計にや成ぬらん。

卅九 空阿彌陀佛往生事

上人門弟の中に。法性寺の空阿彌陀佛は。經をもよまず。禮讚におよばず。只一向專念の行を

附 錄 法然上人傳記卷第九下

たて。多念の棟梁。專修の大將也。行徳人にしられ。名望世にかうぶらしむる。尊貴なりといへども。面をむかふればかならず崇敬し。智者也といへども。口をひらけば悉く伏膺せしむ。四十八人の能聲を調て一日七日の勤行を修する事。所々の道場に至らざる所なし。仍例のごとく年始七日の別時を修しけるが。結願の時七日修すべきよし。同行等に命じければ。各命にしたがふ。二七日結願の朝。臨終正念にして眠るがごとくして往生し給へり。春秋七十四。安貞二年正月十五日也。七日已前に死期をしれるゆへに。後の七日をのぶる所なり。種々の靈異一にあらざ。就中高野山寶幢院に寛泉房といへる上人あり。彼舍弟天王寺に住しけるが。或時天狗になやまさるゝ事あり。彼天狗は天王寺第一の唱導勸進上人東門阿闍梨也。託云。我は是東門の阿闍梨也。彌陀の本願にほこりてたゞ邪見を起がゆへに。此異道に墮せり。我在世の時

おもひき。我は是智者也。空阿彌陀佛は愚人なり。我手の小指をもてなをかの人に比すべからずと。しるかを彼空阿彌陀佛は。如説に修行して既に輪廻をまぬがれてはやく往生を得たり。我は此邪見によりて。惡道に墮し。生死に留る。後悔千萬うらやましき事限なしとて。さめくと泣けり。智恵ありがほに慢擧の心高く。邪見のきづなをさらずば。往生の障となるべき事疑なし。上人つねの仰には源空は智徳をもて人を化するなを不足也。法性寺の空阿彌陀佛は愚痴なれども。念佛の大先達としてかへつて化導廣し。我もし人身を受ば大愚痴の身をうけ。念佛勤行の人たらんとこそ仰られけれ。念佛を行じ極樂を欣はむ人は。愚痴をかへりみず。唯語嘿作々。行をささとすべきもの也。

四十 津戸入道往生事

津戸の三郎爲守は。ふかく上人の勸化を信じ。偏に極樂の往生をねがひて。二心なく念佛しけ

るが。同じくは。出家の本意をとげたくおもひければ。關東のゆるされなかりける事をなげき。在俗の身なりとも法名をつけ。戒並に袈裟をたもつべきよし上人に申入けるに付て。かの御返事云。誠さやうにて志計ふかきも。出家の定にてこそは候へ。何事も時いたる事にて候へば。強にいそぎ思召すべきことにも候はず。いかにも又すまふにもより候はず。期の至るよりはほどなき事にて候。又戒品書てまいらせ候。假名もて戒品などかきたるは。あしく候へば。是は寛印供奉と申候人のせさせ給ひたる十重禁の次第にて候。三聚淨戒はわたくしに書て候。別々に候也。袈裟まひらせ候。新きも候へども。わざと當時かけふるして候をまいらせ候也。名のり房號かきてまいらせ候。男ながらも皆法名をつけ。袈裟をかくる事にて候也云云。此御返事を給て後は。偏に出家のおもひをなして念佛しけり。其後又念珠を所望しける時。上人御返事云。

是ほどに思召事は此世一の事にはあらず。先の世のふかき契とあはれにおぼえ候。かまへて極樂に此度まいり合せ給ふべく候。常に持て候ずゞひとつまいらせ候。何事も文にはつくしがたく候云云。又或時上人御文に云。此たびかまへて往生しなると思召切べく候。受がたき人身已に受たり。逢がたき念佛往生の法門にあひたり。娑婆をいとふ心あり。極樂を欣心發りたり。彌陀の本願ふかく。往生は御心にあるべきなり。ゆめ〱御念佛おこたらず。決定往生のよしと存させ給べく候云云。又上人の御影を所望しけるに付て。或時の御返事に云。影の事は。熊谷入道の書て候しかども。無下に此姿たがひて候ひしかば。すて〱くだりて候也。されば此度もゑがきて下し候はぬには。唯口惜か。其かはりには善導和尚の御影をおがませおはしますべく候云云。我影のかはりには善導和尚の御影をおがめと仰られたる事を。ほと

んど過分の御詞かなと思けれども。人にも語りざりけるに。善導和尚の御影の御前にて念佛しける時。居ねぶりをしたる夢に。上人に向ひていらせて物語を申けるに。善導の御影をおがめと云ふ事を不審する條謂なしと。あしき御氣色なりけるに。さはぎて驚たれば。善導の御影に向ひ参らせたる事。夢の中に上人に物語申つるに。少もたがはざりければ。上人はたゞ人にては御坐ざりけりと。いよ〱信心ふかくして。往生の後はかならずおもひ出べきよしをのせられ。また極樂にまいりあへとのせられたる。御自筆の御文共をば錦の袋に入て。身をはなたずして念佛しけるが。誠に時いたりけるにや。建保七年正月に。右大臣家薨逝の時。御免を蒙て出家の本意を遂にければ。上人よりしるし給ける法名を付て尊願とぞ申ける。上人御往生の後には日に隨て極樂の戀しく。年を逐て穢土のいとはしく覺へける儘に。常に此文を取出して拜見

しては。とく迎へさせ給へと申けれども。ひ
なしく年月を送りける。上人の門弟已下の僧衆
を屈して。仁治三年十月廿八日に。三七日の如
法念佛をはじめ。十一月十八日結願の夜半。道
場のあかり障子の内にして。高聲念佛數百遍の
後。忍びて腹を切て。あらゆるほどの物をば悉
く取出して。練大口に裹て。おさなき者をよび
て。後の川に捨させにけり。夜陰の事なれば人
更には是を知らず。其後僧衆に向て。かやうに出
家籠居して。大臣殿の御菩提を訪奉るに付ても。
主君の御餘波も戀しく御坐すうへ。上人の極樂
にかならず參合へと仰の有しに。今まで不_三往
生して尊願が長命かた_く無益の事なり。釋
尊も八十の御入滅。上人も八十の御往生。尊願
又滿八十也。第十八は念佛往生の願也。今日
又十八日也。如法念佛の結願に當て。今日往生
したらんは殊勝の事なるべしなど申ければ。
かゝる用意とは思もよらず。只あらましの詞と

心得て。誠に目出こを候はめと返答しけるに。
その夜もあけ。十九日にもなりぬ。敢て苦痛な
し。只今臨終すべき心地もせざりければ。子
息民部大夫守朝をよびて。きりたる腹を引あげ
て。まるきもと云ものゝ殘て。臨終の延ると覺
る也。よりて見よと申ける時ぞ。始めて人知に
ける。心さきのほどに圓き物の有よし申けれ
ば。手を入れて引切てなげすて。是が殘たる
ゆへに臨終のぶるなるべしとぞ申ける。人々あ
つまりて驚申ければ。娑婆界のいとはしく。極
樂界のねがはしき志。日にしたがひて。いやま
さりければ。今日もとくまいりたきゆへに。
かくはからひたる次第を。かさくどき申けれ
ば。誠に願往生の志の熾盛なるありさま。見る
人皆涙をながさぬはなし。少きの痛もなく念
佛しけるが。七日まで延ける間。うがひの水の
通はすなるべしとて。七日以後はうがひをとめ
て。塗香を用けるが。氣力も更によはらず。ほ

どなく疵いゑにけり。後には時々行水を用ける
とかや。正月一日にもなりければ。死せずして
は往生すべき道なき間。尊願は正月一日の祝に
は。臨終の儀式をなして。年久しくなれり。日
來のあらましがはずして。今日往生すべきゆ
へに。延引しけりと悦て。しきりに念佛しけれ
ども。其日も過。次の日もまたくれぬ。唯今臨終
すべき心地もなかりければ。此世の事を申契り
たるだにも。眞有人は變ぜず。たがへぬは世の
ならひ也。まして上人ほどの人の往生の後は。
かならずおもひ出べき也。極樂に參りてあへと
自筆の御文たびながら。いそぎ參らんと心を盡
し侍に。速く迎へさせ給ふ事こそ。心うく侍れ
と。かさくどきて連日に歎申けるが。同十三日
の夢に。來十五日午尅に迎べきよし。上人告給
ひければ。十四日に此夢を語て。歡喜の涙をな
がし。彌念佛にいさみをなしけるが。十五日に
なりければ。上人より給ける袈裟をかけ。念珠

をもちて。西にむかひ端坐合掌して。高聲念佛
數返を唱へ。午の正中に念佛と共に息たへぬ。
紫雲空より顯れ。異香室にみつ。茶毗の庭に至る
まで。異香なを失せず。奇特其數おほしといへど
も。しげきによりてのせず。世舉て謳歌の間。將
軍家より御尋に預りしかば。悉く記し申ける。
熊谷入道初めて上人へ參りける時。もし命をも
すて。後生たすかれとならば。頓て腹をもき
らん爲の用意に持たりける刀をば。念佛して往
生すべきよしを承定ぬる上はとて。上人にま
らせけるを。上人より津戸入道に給て祕藏しけ
る。今自害の時は。件の刀を用けるにや。在家
の弟子も其數ありし中に。自害往生の素懷を遂
べき器と。御覽られけると子細なきにあらぬ
ども。腹を切て後七日は。うがひを用けれども。
其後は塗香ばかりにて。水を口にはよせざりけ
るに。五十七日の間。氣力もよはらず。聊の痛
もなく。おもひのごとく念佛相續して。仁治品

造一本作
に作る

一本音の
上上人の
し三字無

年二月廿七日改正月十五日午の尅八十一にして。元寛元年也。耳目を驚かすほどの往生を遂ぬる事は。あくまで護念増上縁の益にあづかりける事も眼前なれば。いよく希代のふしぎなりとぞ申あひける。

四十一 明惠上人記事

梅尾の明惠上人。さきに摧邪輪を造て選擇集を破し。後に莊嚴記を製し。重ねてこれを破す。しかるを逝去の後。ある月卿の邊に侍る小女に託して云。我は是明惠房高辨也。さらに悪心をもて來らず。聊示すべき事有。我日來法然上人を破する故に生死をいでず。剩へ魔道に墮せり。この事を懺悔せんが爲に來れり。若不審を殘さば。是をもて知べしといひて。紙十枚計を續て。華嚴の十玄六相。法界圓融の甚深の法門をかく事滞りなし。法門といひ。手跡といひ。皆是彼上人の平生の所作也。又小女の聲全くかの上人の音聲に。違せずして早く摧邪輪を焼べしとの

たまへり。嚴重の奇特。殆言語のふよぶ所にあらず。

四十二 明禪法印往生事

毗沙門堂法印明禪は。參議成頼卿の息。顯宗は檀那の嫡流智海法印の面受。密宗は法曼院の嫡流仙雲法印の弟子として。顯密の棟梁。山門の宗匠なりき。然るに初發心の因縁は。最勝講の聽衆に參ぜられたりける時。緇素貴賤。今日をばれとのみ思あへり。夢幻泡影。片時のさかえをわすれざるものひとりもあらず。俗家には。大將の庭の景氣。大裏の門外のふるまひ。僧中には。證義者は上童を具して別座をまうけ。攝籙の息は隨身をしたがへて直廬に參らせらる。かれこれの榮耀を見て。見聞の輩。はしりまはれるありさま。つくづくとおもへば無常忽に至りなば。餘算いつまでをか期すべき。無上菩提を見るに付ては。胸中の觀念すみまざるまゝに。籠居の思ひこの時治定せられけり。彼

至一本肝
に作る

願の下一
本故の字
有り

須菩提尊者は。石室の中に入定して。定中に佛の一夏九旬説法の後。切利天上より來下し給ひしを見奉て。今日の集會甚未曾有也。座中に佛及轉輪聖王。諸天龍神おほくあつまれり。然といへどもみないさほひ久しく留るべからず。磨滅の法也。ことごとくに無常に歸しなんと。此無常觀を初門として。諸法の畢竟じて皆空成事を悟て。尊者たへに道證を得給へりき。今此法印の發心の義。すこしも解空第一の羅漢にはあらず侍ける。扱隱遁の志は思定ぬ。出離の道いまだ一決せず。とかく思惟せられしに。持たる數珠我も思わくかたなくて。自然の手ずさみにくられける時。有縁の法。易行の道。稱名にあるべきにこそと。その座にておもひそめられて。終に籠居せられにき。或時信空上人に謁して。念佛の物語有けるに。聞ざるには信も謗もともに謬あり。これを見て若は信じ若は謗すべしとて。上人所造の選擇集を送れる間。彼書を披見して

後。淨土の宗義を得。稱名の功德をしる。其より已來つねの諺には。顯密のたしなみて。佛の惠命をつぎ。公請にしたがひて。國の安全を祈るとも。傍には淨土の教行を學して。ひそかに樂邦の往詣をとげむ事尤至要なり。公家の請をものぞまず。官途の計ことにもあてがはず。心あらん人誰か稱名を妨げん。懈怠にして既に過去遠々を歴たり。不信ならば定て未來永々を送らん歟。今はたゞ畢命を期とせん計なりとて。偏に上人勸化の詞を信じて。稱名の行おこたらず。病床に臥して後。或時俄に涕泣せらるゝ事ありけるを。弟子驚て是をたづね申しければ。明禪。聖覺とて。つがひてひとにいはるなる。不足言の對揚かなと。年來思ひしが。唯今ぞと思いでられたるなり。故郷の妄執をわすれざるは。淨刹の欣求のひまあるにこそとぞ申される。念々不捨者の信力も。此理に顯はれ。順彼佛願の正業も。たゞ一言に知られたり。臨終の

時は。聖信上人を知識とせられけり。紫雲たなびきて往生人の相ありとて。人多く羣集するよし。弟子ども申ければ。何條明禪が臨終に。紫雲のさたまで及ばんぞ。たゞ正念亂ずして。稱名をもちて息たえたらんに過べからずとて。頭北西面右脇臥にして。極重惡人。無他方便。唯稱彌陀。得生極樂の文を唱へ。念佛相續し。如入禪定して。仁治三年正月二日午尅に往生を遂られき。

四十三 上人惠行惣結事

凡智惠深奥の諸宗の賢哲。多く上人の勸化に隨て。本宗をさし置て念佛に歸して。往生を遂る人々。上人在世といひ。かの滅後といひ。觀縷にいとまあらず。高貴の智徳なをしかり。況や我等ごときの愚鈍。なにをたのみてか。念佛をゆるかせにすべきや。懈怠にして念佛を行ぜず。不信にして往生を遂ざらむは。あに佛のとながらんや。抑上人の徳行。諸宗を訪へば師毎に嗟

嘆し。化導を施せば人毎に歸敬す。たれの人か闇夜に灯なくして室の内外を照すや。誰の人か現身に光明放や。是念佛三昧故なり。誰の人か慈覺大師の袈裟を相傳するや。南岳大師誰の人か太上天皇に眞影をうつされ奉るや。相承云々誰の人か韋提希夫人と念佛の義を談するや。誰の人か諸宮諸院に歸敬せられ給ふや。誰の人か攝政殿に禮拜せられたるや。誰の人か智惠第一の名を得たるや。誰の人か没後に花夷男女。家毎に遠忌。月忌。臨時の孝養をいたすや。誰の人か人毎に影像を留て本尊とするや。此中に一徳備へたる人は餘事のたらざる事をうらむべし。其外百非をはなれたる輩。いかてか甲乙の舌をのべんや。就中上人は王公卿臣の家よりも生ぜず。茅屋茂林の下より出たりといへども。殿上にめされて猶高座にのぼる。公請學道の業にたづさはる事なけれども。明王に召れて歸敬せらる。是ひとへに慈覺大師の遺風。十重戸羅の戒香。ふかく法

衣にそみ。善導和尚の餘流。三昧發得の定力。遠く心緒をつたへ給へるによりて。方に今三國の芳躅をならひ。吾朝の遺風をかながふるに。神明佛陀の靈瑞より。賢人才士の明徳に至るまで。目に見ざる古聖の嚴顔を見。耳にきかざる異域の勝境を知る事。偏に是畫圖のあやつり。筆跡の功にあり。但晋朝七賢の形。これをつたへてもいまだ其益あらず。穆王八駿の圖。これにひかひて又何にかせむ。或は狂言綺語の繪を見て心をうごかし。或は榮花重職の粧をひらきて。目をあどろかす。更に出離の媒にあらず。併是癡愛の翫たり。然をいま九卷の繪を作して。九品の淨業に於て。一部の功力を終て。一宗の安心を全くせんが爲に。諸傳の中より要をぬき肝をとりて。或は訛謬をたゞし。或は潤色を加えて。後賢にをくりて。ともに佛國を期せんと也。若祖師の徳を擧る事。佛陀の誓にそむかずば。當時の弘通をさまたげず。將來の善根を悦ぶべし。

或は信或は謗の輩。一見一聞の人。必ず彌陀の名號を唱べし。偏に其最後臨終の引接のみにあらず。剩又現生護念の誓願まします。佛使廿五菩薩。一切時來。常に護念。何の疑かあらん。見聞一座の諸人。同音に千返の念佛を申さるべし。

願以此功德。平等施一切。

同發菩提心。往生安樂國。

九卷傳は。元祖滅後凡五十年の頃に於て。隆寛律師の門業より記録せしと古傳に云傳へたり。凡元祖御傳の内には最初の編集なり。故に舜昌法印録せる勅修御傳四十八卷も。この九卷傳を基とせり。翼贊の内。處々に九卷傳を出して引合たるは此傳本なり。然るに此九卷五十歳來埋滅して誰も見る人なし。しかも其本世に希也。今寫せる本は義山上人所持の本にて。華頂山下入信院の藏にあり。瞻譽觀微上人寫し傳へて。彼の法流の所に秘藏せしを。幸に求め得て寫す者也。實に難得の傳文。秘藏奉持すべき者也。又水戸常福寺に黃門君の納め給へる九卷の御傳あり。題號は拾遺古德傳とあり。詞書は公卿の筆。畫は土佐何某也。九卷有故に或は心得ざる人は是を九卷傳と思ふ輩も粗あり。ふ

かく思察すべし。此拾遺古德傳九卷は。貞享年中に板行して京都には行はるゝ也。しかれども脱葉多くして水戸の藏本に據らざれば全傳としがたし。今此九卷は實に宗門の大寶物なり。可珍重者也。

寶曆九年九月

忍海記

今私云。曇譽忍海上人。古傳を載せられたり。然に古傳と云と雖も信用し難し。奈何となれば九卷傳は元祖滅後凡八九十年の内に編集したりと見へたり。蓋し舜昌法印の集録にして勅修の草稿にもなりぬべし。是を以て勅修の序も九卷傳の初めの序を將用し給へり。今此傳に序文兩通あり。初めの序文に。上人の遷化すてに一百歳に及べり。次の序文に。こゝに開山源空上人と云ふ人あり。此語正に是れ舜昌なるべし。又按に兩序あるべき道理もあるなし。爾れば初序は舜昌の作。次序は別人作歟。其語意を按ずるに。本は台宗にして後に淨土門に入て元祖を異代の師匠と仰ぐと見へたり。もし然らば古傳の義趣は。年序六七十年も後れたり云云。是又畫圖も九卷傳を始起とすべし。其旨兩通の序文及び第九卷の終りに見へたり。是を以て此傳の詞はよく畫圖と符合し見得すべし。勅修詞書は畫圖に合せざる處まゝこれあり。知るべし。

曇譽在禪誌

右九卷の御傳は。賜紫飯沼弘經寺主曇譽在禪上人の秘藏なりしを。密に得てこれを寫畢。實に難得の傳文可奉珍重者也。

維時享和三癸亥歲秋九月

三 法然上人行狀畫圖世稱勅修御傳

法然上人行狀畫圖第一

夫以我本師釋迦如來は。あまねく流浪三界の迷途をすくはんがために。ふかく平等一子の悲願をおこしましますによりて。忽に無勝莊嚴の化をかくして。かたじけなく娑婆濁惡の國に入給しよりこのかた。非生に生を現じて。無憂樹の花をふくみ。非滅に滅を唱へて。堅固林の風心をいたましむ。在世八十箇年。慈雲ひとしく羣生におほひ。滅後二千餘週。法水なを三國にながる。教門しなことに。利益これまぢくなむ。そのなかに聖道の一門は。穢土にして自力をは

げまし。濁世にありて得道を期す。但おそらくは。とき澆季に及て二空の月くもりやすく。こゝろ塵縁にはせて三惡のほのほまぬかれがたし。煩惱具足の凡夫順次に輪廻の里を出ぬべきは。たゞこれ淨土の一門のみなり。これにつきて。諸家の解釋蘭菊美をほしきまゝにすといへども。唐朝の善導和尚彌陀の化身として。ひとり本願の深意をあらはし。我朝の法然上人勢至の應現として。もはら稱名の要行をひろめたまふ。和漢國ことなれども化導一致にして。男女貴賤信心を得やすく。紫雲異香往生の瑞すこぶるしげし。念佛の弘通こゝに尤さかんなりとす。しかるに上人遷化のち。星霜やゝつもれり。教誠のことば利益のあと。人やうやくこれをそらんぜず。もししるして後代にとゞめずば。たれか賢を見てひとしからんことをおもひ。出離の要路ある事をしらん。これによりてひろく前聞をとぶらひ。あまねく舊記をかながへ。まこと

附錄 法然上人行狀畫圖第一

をえらび。あやまりをたゞして。粗始終の行狀を勸するところなり。をろかなる人のさととりやすく。見んものゝ信をすゝめんがために。數軸の畫圖にあらはして。萬代の明鑑にそなふ。往生をこひねがはん輩。たれかこのこゝろざしをよみせざらむ。

抑上人は。美作國久米の南條稻岡庄の人なり。父は久米の押領使漆の時國。母は秦氏なり。子なきことをなげきて。夫婦こゝろをひとつにして佛神に祈申に。秦氏夢に剃刀をのむと見てすなはち懷妊す。時國がいはいく。汝がはらめるところ。さだめてこれ男子にして。一朝の戒師たるべしと。秦氏そのこゝろ柔和にして身に苦痛なし。かたく酒肉五辛をたちて。三寶に歸する心深かりけり。

つゝに崇徳院の御宇。長承二年四月七日午の正中に秦氏なやむ事なくして男子をうむ。時にあたりて紫雲天にそびり。館のうち家の西に。も

とよたまたにして。すゑしげく。たかき棕の木あり。白幡二流とびきたりてその木ずゑにかゝれり。鈴鐸天にひびき。文彩日にかゞやく。七日を経て天にのぼりてさりぬ。見聞の輩奇異のおもひをなさずといふことなし。これより彼木を兩幡の棕の木となづく。星霜かさなりて。かたぶきたふれにたれど。異香つねに薫じ。奇瑞たゆることなし。人これをあがめて。佛閣をたて。誕生寺と號し。影堂をつくりて念佛を修せしむ。昔應神天皇御誕生の時。八の幡くだる。正見正語等の八正道に住したまふしるしなりといへり。いま上人出胎の瑞。ことの儀あひぢなし。さだめてふかきこゝろあるべし。

かの時國は。先祖をたづぬるに。仁明天皇の御後西三條右大臣光公の後胤。式部太郎源の年。陽明門にして藏人兼高を殺す。其科によりて美作國に配流せらる。こゝに當國久米の押領使神戸の大夫漆の元國がむすめに嫁して。男子をひましむ。元國男子なかりければ。かの外孫もちて子として。その跡をつがしむるとき。源の姓をあらためて漆の盛行と號し。盛行が子重俊。重俊が子國弘。國弘が子時國なり。これによりて。かの時國聊本姓に慢ずる心ありて。當庄稻の預所明石の源内武者定明院御守源長明が嫡男堀河院御在位の時の濫口なりをあなづりて。執務にしたがはず。面謁せざりければ。定明ふかく遺恨して。保延七年の春。時國を夜討にす。この子ときに九歳也。にげかくれてものゝひまより見給に。定明庭にありて。箭をはぎてたてりければ。小矢をもちてこれをいる。定明が目のあひだにたちにけり。この疵かくれなくて。事あらはれぬべかりけり。

ば。時國が親類のあだを報ぜん事ををされて。定明逐電して。ながく當庄にいらす。それよりこれを小矢兒となづく。見聞の諸人感歎せずといふことなし。

時國ふかき疵をかうぶりて死門にのぞむとき。九歳の小兒にむかひていはく。汝さらに會稽の恥を思ひ。敵人をうらむる事なかれ。これ偏に先世の宿業也。もし遺恨をむすば。そのあだ世々につきがたかるべし。しかじはやく俗をのがれ家を出て我菩提をとぶらひ。みづからの解脱を求めんにはといひて。端坐して西にむかひ。合掌して佛を念じ。眠がごとくして息絶にけり。

法然上人行狀畫圖第二

定明逐電のち。隱居の心しづかにして已造の罪をくひ。當來の苦をかなしみ。念佛をこたらずして往生の望をとぐ。其子孫みな上人の餘流をうけ。淨土の一行をむねとせり。小兒たゞ人に

あらず。豈怨敵をうらむる心あらんや。定明疵をかうぶるによりて。跡をかくし往生をとげ。子孫又淨土門に入。權化の善巧なるべし。迷情あへてあやしみをなす事なかれ。

當國に菩提寺といふ山寺あり。かの寺の院主。覺得業と云けるは。もと延曆寺の學徒なりけり。大業の望を達せざることうらみて。南都にうつり。法相を學して所存をとぐ。ひさしの得業とぞ申ける。秦氏が弟なりければ。小兒の叔父なるうへ。父遺言の事ありければ。童子彼室にいりぬ。學問の性ながるゝ水よりもすみやかにして。一を聞て十をさとる。きくところのこと憶持して。更にわするゝことなし。

觀覺小兒の器量を見るに。いかにもたゞ人にはあらずおぼえければ。いたづらに邊鄙の塵に混ぜん事をあしみて。はやく台嶺の雲にをくらんことをぞ支度しける。しかるべき事にやありけん。小兒そのおもひきをさして。舊里にとゞまる

こゝろなく。花落をいそぐ思ひのみあり。觀覺
 よろこびてこの兒を相具して。母の所に行てこ
 とのよしをかたる。兒童母儀をこしらへていは
 く。うけがたき人身をうけあひがたき佛教にあ
 ふ。眼のまへの無常を見て。夢の中の榮耀をい
 とふべし。就中に亡父の遺言。耳の底にとまり
 て心のうちにわすれず。はやく四明にのぼりて
 すみやかに一乘をまなぶべし。但し母世にいま
 さん程は。晨昏の禮をいたし。水菽の孝をつと
 むべしといへども。有爲をいとひ無爲に在る
 は。眞實の報恩なりといへり。一旦の別離をか
 なしみ。永日の悲歎をのこし給事なかれと。再三
 なくさめ申す。母堂ことはりにおれて。承諾の
 詞をのぶといへども。袖にあまるかなしみの涙。
 小兒のくるかみをうるほす。有爲のならひしの
 びがたく。浮生のわかれまどひやすくして。か
 くぞおもひつゞける。
 かたみとてはかなきあやのとめてし

この別さへ又いかにせん
 さてしもあるべきならねば。叡岳西塔北谷持寶
 房の源光がもとにつかはす。觀覺が狀に云。進
 上大聖文殊像一體と。これ智惠のすぐれたる事
 をしめす心なりけり。

童子十五歳近衛院御宇久安三年の春二月十三日
 に。千重の霞をわけて九禁の雲に在る。つくり
 みちにして。法性寺殿時攝政の御出にまいり
 あひたてまつる。小兒馬よりありて道の傍に侍
 に。御車をとめられていづくの人ぞと御尋あ
 りければ。をくりの僧ことのよしを申あぐ。御
 禮儀ありてすぎさせ給ふ。供奉の人々存外の思
 ひをなす。のちに仰られるは。路次にあふ所
 の小童。眼より光をはなつ。いかにもたゞもの
 にあらざることをしりぬ。これによりて禮をな
 しき。とぞ仰られる。月輪殿の御歸依あさか
 らざりけるも。彼御物語を。御耳の底にとめ
 られるゆへにやありけん。とまぼつかなし。

法然上人行狀畫圖第三

童子入洛の後。まづ觀覺得業が狀を。持寶房に
 つかはす。源光觀覺が狀を披覽して。文殊の像
 をたづぬるに。たゞ小兒のみ上洛せるよし。使者
 申ければ。源光はやく兒童の聰明なることをし
 りぬ。すなはち兒のむかへにつかはしければ。
 同十五日に登山す。
 獨木かけはしあやうく。九花いろめづらし。持
 寶房にいたり給ぬ。試にまづ四教義をさづくる
 に。籤をさして。不審をなす。うたがふとこ
 ろ。みな圓宗のふるき論義なりけり。まことに
 たゞ人にあらずとぞ申あへりける。
 この兒の器量ともがらにすぎて。名譽ありしか
 ば。源光われはこれ魯鈍の淺才なり。碩學につけ
 て。圓宗の奥義をさめしめんといひて。久安
 三年四月八日この兒を相具して。功德院肥後阿
 闍梨皇圓のもとにゆきて入室せしむ。彼皇圓

は。粟田關白四代の後。參河權守重兼が嫡男。
 少納言資隆朝臣の長兄。相生の皇覺法橋の弟
 子。當時の明匠。一山の雄才也。關梨少生の聰
 敏なることをきいて。驚ていはく。去夜の夢に
 満月室に入と見る。いまこの法器に。あふべき
 前兆なりけりとぞ。悦申されける。
 同年十一月八日。花髪をそり法衣を著し。戒壇
 院にして。大乘戒をうけ給にけり。
 ある時。すでに出家の本意をとげ侍ぬ。いまに
 をきては跡を林藪にのがれんとおもふよし。師
 範の關梨に申されければ。たとひ隱遁の志あり
 とも。まづ六十卷をよみてのち。その本意を遂
 べきよし。關梨いさめ給ければ。われ閑居をね
 がふ事は。ながく名利の望をやめて。しづかに
 佛法を修學せんためなり。この仰まことにしか
 なりとて。生年十六歳の春。はじめて本書をひ
 らく。三箇年をへて。三大部をわたり給ぬ。
 惠解天然にして。秀逸のきこえあり。四教五時

の廢立。鏡をかけ。三觀一心の妙理。玉をみがく。所立の義勢。殆師のをしへにこまたり。闇梨いよ／＼感歎して。學道をつとめ大業をとげて。圓宗の棟梁となり給へと。より／＼こしらへ申されけれども。更に承諾の詞なし。なをこれ名利の學業なることをいとひ。たちまちに師席を辭して。久安六年九月十二日。生年十八歳にして西塔黒谷の慈眼房叡空の廬にいたりぬ。幼稚の昔より成人の今に至まで。父の遺言わすれがたくして。とこしなへに隱遁の心ふかきよしをのべ給に。少年にしてはやく出離の心をおこせり。まことにこれ。法然道理のひじりなりと隨喜して。法然房と號し。實名は源光の上の字と。叡空の下の字をととりて。源空とぞつけられる。かの叡空上人は。大原の良忍上人の附屬。圓頓戒相承の正統なり。瑜伽祕密の法にあきらかにして。一山これをゆるし。四海これをたうとびけり。

法然上人行狀畫圖第四

上人黒谷に蟄居の後は。偏に名利をすて。一向に出要をもとむる心切なり。これによりていづれの道よりか。このたびたしかに。生死をはなるべきといふことをあきらめんため。一切經を披閱すること數遍にをよび。自他宗の章疏眼にあてずといふことなし。惠解天然にして。その義理を傳達す。あるとき天台智者の本意をさぐり。圓頓一實の戒體を談じ給に。慈眼房は心をもて戒體とすといひ。上人は性無作の假色をもて戒體とすとたてたまふ。立破再三にをよび。問答多時をうつすとき。慈眼房腹立して。木枕をもてうたれければ。上人師の前をたゞいにけり。慈眼房思惟すること數尅の後。上人の部屋に來臨して。御房の申さるゝ旨は。はや天台大師の本意。一實圓戒の至極なりけりとぞ申されける。佛法に私なきことあはれにはんべり。かゝ

りければ上人をもて軌範として。師かへりて弟子となり給にけり。保元々上人二十四のとし。叡空上人にいとまをこひて。嵯峨の清涼寺に七日參籠のことありき。求法の一事を祈請のためなりけり。この寺の本尊釋迦善逝は。西天の雲をいで。東夏の霞をわけて。三國につたはりたまへる靈像なれば。とりわき懇志をはこび給ひけるも。ことはりにぞおぼえ侍る。上人その性。俊にして大卷の文なれども。三遍これをみ給に。文くからず義あきらかなり。諸教の義理をあきらめ。八宗の大意をうかゞひえて。かの宗々の先達にあひて。その自解ののべ給に。面々に印可し。各々に稱美せずといふことなし。清涼寺の參籠七日濟しければ。それより南都へくだり。法相宗の碩學藏俊僧都贈僧正の房にいたりて。修行者のさまにて。對面し申さんと申されたりけり。大床におはしけるを僧

都いかゞおもはれけん。あかり障子をあけてうちへ請しいれたてまつりて對面し。法談ときをうつされけり。宗義につきて不審をあげられけるに。僧都返答にをよばざる事どもありけり。上人こゝろみに獨學の推義をのべ給ければ。僧都感歎していはく。貴房はたゞ人にあらず。あそらくは大權の化現歟。昔の論主にあひたてまつるとも。これにはすぐべからずとおぼゆるほどなり。智惠深遠なること。言語道斷なりとて。二字をたてまつり。一期のあひだ。毎年供奉をのぶること。をこたりなかりけるとなむ。醍醐に三論宗の先達あり。權律師寛雅これなり。かしこにゆきて所存をのべ給に。律師すべきものいはず。うちにたちいりて。文櫃十餘合をとりいだして。予が法門附屬するに人なし。きみすてにこの法門に達し給へり。ことごとく祕書を附屬したてまつるとてこれを進ず。稱美讚歎のことば。かたはらいたき程なり。進士入

道阿性房等。御ともして。この事を見聞して。奇特のおもひをなしけり。仁和寺に華嚴宗の名匠あり。大納言法橋慶雅と號す。仁和寺の岡といふ所に居住せるゆへに。岡の法橋とぞ申ける。醍醐にもかよひけるにや。醍醐の法橋ともいへり。かの法橋は。上人の弟子阿性房の知人なりければ。上人華嚴宗の不審をたづねとはれむために。阿性房をあひぐして。むかひたまへるに。法橋まづ左右なく申いだす様は。弘法大師の十住心は。華嚴宗によりてつくり給へり。この旨を御室に申とるに。興あることなり。はやく勘申べきよし。おほせをかうぶるあひだ。このほどかんがへ侍なりと申とき。初対面なればさてもあるべけれども。學問のならひは。黙止がたくおもはれけるによりて。上人の給けるは。なにしにかは華嚴宗にはより侍べき。大日經の住心品の心をもて。つくられたるにてこそ侍れ。第六の他縁大乘心は。

法相宗の意なり。第七の覺心不生心は。三論宗也。第八の一道無爲心は。天台宗なり。第九の極無自性心は。華嚴宗なり。第十の祕密莊嚴心は。眞言宗なりとて。はじめ異生羝羊心より。をはり祕密莊嚴心まで。おの／＼偈を誦して。一々にその道理を釋しのべ給て。淺深をたて。勝劣を判ずることをば。諸宗をの／＼難をくはへ。不受し申なり。天台宗に難し申様はなど。くはしく釋しのべられ。又華嚴宗の自解の様を。こまかに申のべ給に。法橋これをきいて。阿性房の縁に侍るをよびて。これはきいたまふか。これがやうに心えてんに。往生し損じてんやと感歎して。われこの宗を相承すといへども。か／＼のごとく分明ならず。上人自解の法門をきくに。下愚處々の不審をひらく。他宗推度の智惠。自宗相傳の義理にこそ給へりとて。隨喜感歎はなはだし。かくのごとくして。たがひに法談數尅の後。この宗の血脈にいり侍ばやと。上

人のたまへば。慶雅がうへにやと。法橋申さるゝ間。いかゞさることは侍べき。華嚴宗をば。こゝとさら傳受したてまつらんと。存するなりと申されければ。血脈ならびに華嚴宗の書籍。少々わたしたてまつりぬ。さてかの法橋最後には上人を招請して。戒をうけ二字をたてまつる。戒の布施には。圓宗文類といふ。二十餘卷の文をとりだして。慶雅はこのほかは。もちたるもの侍らず。上人もことものをば。なに／＼かはせさせ給べきとて。黒谷へぞ送進じける。上人のたまひけるは。よき學生になりぬれば。かくのごとく。歸すべきことには歸するなり。この法橋は華嚴宗にとりては。よき名匠なり。辨曉法印も慶雅法橋の弟子なりとぞ。おほせられける。上人諸宗に通達し給へること。人口にあまねきうへ。慶雅法橋御室の御前にて。自門他門おほくの學生にあひ侍つれども。この上人がやうなもの申僧こそ侍らねと。稱美し申けるを。さこし

めされて。御室より上人を招請せられ。天台宗を學せらるべきよしおほせられければ。天台宗は昔はかたのごとく傳受し侍しかども。今は但念佛になりて。天台宗は廢亡し侍うへ。山門には澄憲。三井には道顯など申。名匠たち侍り。かの人々にめしとはるべきか。をのづからかへりき侍らんも。そのはゞかり侍よしを。申給しかば。みなうけたまはりをきたることなり。色題その詮侍らずとて。かさねてしきりに仰られけれども。なをかたく辭退し申給へば。さらば念佛のことを學せらるべし。そのついでに少々談義侍べしなど。おほせられけれども。自然に延引して。日月ををくられけるに。後白河法皇最後の御時。上人を御善知識にめされて。まいり給けるとき。御室も御參會ありけるに。そのことおほせられいだして。このあひだ住京のついでに。素懷をとげばや。いかゞ侍べきと仰られければ。か様のちりふしは物忽にも侍り。ま

たきとめさるゝ事も侍らん時は。中間に。もの申さし侍らんこともあしく侍れば。しづかに參上仕べしとて。そのついてもむなしくやみにき。其後いく程なくて。御室もうせさせ給にしかば。つねにその節をとげられずといへども。懇切の御志を。つくされしも。上人諸宗に達したまへるゆへなりき。

法然上人行狀畫圖第五

上人のたまはく。學問ははじめて見たつるは。きはめて大事なり。師の説を傳習はやすきなり。しかるに我は諸宗みなみづから章疏を見て心えたり。戒律にも中川の少將上人。儉蘭又といふ。名目ばかりぞきつたへたる。さしてはみな見いだしたるなり。法相宗も藏俊にあふといへども。法相を學せず。かの人はどかりをなしてをしへず。名目ひとつぞきとりたる。故慈眼房も分明ならず。小乗戒の事は非學生な

り。わづかに理觀ばかりなり。普通によりき學生といふも。大乘の戒律にきては。予がごとく沙汰したるものはすくなきなり。當世にひろく書を披見したることは。たれも覺えず。書を見るに。これはその事を詮にはいふよと。見ることのありがたき事にて侍に。われは書をとりに一見をくはふるに。その事を釋したる書よなどみる徳の侍也。詮はまづ篇目を見て。大意をとるなりと。又のたまはく。自他宗の學者。宗々所立の義を。各別に心えずして。自宗の義に違するを。これはみなひがごとく心えたるは。いはれなきことなり。宗々みなをのくたつるところの法門。各別なるうへは。諸宗の法門一同なるべからず。みな自宗の義に違すべき條は。勿論なりとぞおほせられける。建仁二年九月十九日談義のとき。上人語てのたまはく。弘法大師の十住心論は。義釋によりてつくり給へるに。義釋に違することおほし。か

の義釋は。善無畏三藏の説を。一行阿闍梨記せられたるなり。一行はいとまなき人にて。未再治にてやみにしを。のちに再治の本おほし。其中に弘法大師再治の本もある也。義釋には。極無自性心に。華嚴般若等の不思議の境界を攝すところあるを。弘法大師の再治の本には般若をばすて。たゞ華嚴を攝すとかゝれたり。又十住心には。華嚴宗ぞと釋せられたり。十住心といふは。異生羶羊心。愚童持齋心。嬰童無畏心。唯蓋無我心。拔業因種心。他緣大乘心。覺心不生心。一道無爲心。極無自性心。祕密莊嚴心なり。始の異生羶羊心は。三惡道なり。この中に修羅を攝す。第二は人道なり。この中に。もろくの儒教の仁義禮智信等を攝するなり。第三は天道なり。これに老莊の教を攝す。第六は法相宗。第七は三論宗。第八は天台宗。第九は華嚴宗。第十は眞言宗なり。はじめの一をのぞきて。餘の九種の住心には。外典内典の種々の諸

教。みなそのなかに攝せり。しかれば弘法大師の御心によりば。内外の典籍みなこれを學すべきか。これによりて。御室も多聞廣學をこのみ。御沙汰ある歟とおぼゆるなり。たゞしこの十住心論の義に大なる難あり。義釋には。あるひはたゞ經を攝すといひ。或はたゞ論を攝すともいへるを。一宗にとりなして。華嚴宗に攝す。法華宗に攝すなど。ひきなされたるは。ひがごとくおぼゆるなり。もしその宗に攝して勝劣を判ぜば。たがひに是非あり。その宗論にきては。むかしよりいまだ。ことされざるものなり。法華宗は華嚴宗よりもあさしといはゞ。すでに法華宗の心に違せり。いかてかをして天台宗といふべき。たゞ華嚴宗の心ばかりにてこそはあらめ。宗々たがひに淺深をあらそふ。よそにてたれか定判せん。おほよそ一宗のならひ。一代聖教にきて。淺深を判ずる。つねのことなり。しかれば一切經は。おなじく釋迦一佛の所

説なれども。宗々の所學にしたがひて。淺深勝劣不同なれば。いづれの宗の一切經といふべし。天台宗の一切經あり。華嚴宗の一切經あり。乃至法相三論にも。その一切經あるべし。天台宗の一切經のなかには。法華をすぐれたりとするがゆへに。爾前の諸經に相對して十勝を立たり。華嚴宗の一切經には。華嚴をもちてすぐれたりとす。三論には諸大乘經顯道無異といへども。般若を以て至極とす。法相には解深密經を以て眞實とす。かくのごとくをのく所解不同なるを。宗々を十住心にあて。淺深をさだめらるゝ條。そのいひなきことなり。諸宗のならひ。たゞ經ばかりをこそ。淺深をも勝劣をも立たることにてあれ。いはんや善無畏の義釋はすてに經ばかりに約せり。又義釋には。華嚴般若種々不思議の境界を攝すといへるを。十住心論には唯華嚴にかぎりあやまりて。その宗までを攝して。般若をば覺心不生心に攝する

こと。又もちて違せり。かくのごとき義をもちて。ひそかに難勢をくはへたてまつるほどに。いまは二十餘年にもやなりぬらん。源平の亂よりさき。嵯峨に住したりしころ。夢に見るやう。請用して他行したりけるそのあとに。弘法大師よりさとまいらせたまへとて。御使の候つると云をさして。心におもふ様。内々難じ申ことの。さこえたるよなとおもへども。さあらんにつけてもと存じて。すなはち大師の所へ參ず。五間ばかりなる家の。板敷もなくへだてもなくて。たゞ内に。よはうにぬりめぐらしたる壁の。くちもなきのみあり。大師はこのうちに。おはしますとおぼゆ。まづ外にて。こはづろひをしたれば。その壁のうちより。こなたへと仰せらるゝ聲あり。その御聲につきて。入て壁のうちを見れば。さらにその戸なし。かべのくづれたるところのみあり。其くづれよりくづりいれば。大師壁のさにはおはしまして。すなは

ち胸をあはせていただきあふ。大師の御顔は。手が左の肩にをさ給。かくて前々難破することをも。一々に會釋せしめたまふ。これをさけども。なを驚動せず。それはと申て。かさねてその義を。難じたてまつらんとするとおぼしくて。夢さめぬ。のちにこれを案ずるに。難じ申義。みな大師の御心にあひかなへるか。ひしといただきあひたてまつりたることは。御意にかなひたるが。見ゆるなるべし。げにもよく難ぜられたりと。おぼしめせばこそ。夢にもさまじく會釋し給つらめ。凡は後學畏べしと云て。學生はかならずしも。先達なればといふことはなきなり。かの如來滅後五百年に。五百の羅漢あつまりて。婆沙論をつくりしに。九百年に世親いでて。俱舍論をつくりて。さきの義を破し給き。義の是非を論ぜんことは。あながちに上古にも。あそるまじきものとぞ。おぼせられける。しか上人は。もと天台の眞言をならひ給へり。しか

るを中川の阿闍梨實範。ふかく上人の法器を感じて。許可灌頂をさづけ。宗の大事。のこりなくこれをつたふ。かの實範は。東寺の流。中院の阿闍梨教眞灌頂の弟子。かねて勸修寺の僧正範俊を師とす。たゞ事相教相に達するのみならず。他宗の法門またくからざりけり。しかるに上人を歸依のあまり。後には二字をたてまつり。鑑眞和尚相傳の戒をうく。上人は圓頓の戒法を宗とし給へりき。しかるに圓戒をさしをきて。かの相傳の戒をうけられける。さだめてふかき心侍けんかし。上人。智惠第一のほまれちまたにみち。多聞廣學のさこえ世にあまねし。おほよそ我朝にわたれる聖教傳記眼にあてずといふことなし。しかれば本國の明師觀覺も二字をたてまつり。黒谷の尊師叡空も軌範とし給き。たゞ教内の宗旨に達するのみにあらず。又教外の佛心。をざるをさぐる。宗門は。先達なきゆへにこれを決せず

と。つねにの給けるとなん。圓頓戒談義のとき。成覺房幸西尋ていはく。この戒は諸法の至極をもて戒體とす。然に山王院の大師。諸法の至極を禪とすとの給へり。もししからば禪門と。この戒體と合すやいなやと。上人決し給はく。これは教内の理法なり。かれは修心の教外也。なにをもてか合すとせん。得禪の人この戒をとかば。いよく正理にかなふべし。禪人教をとけば教文禪にしたがふ。教人禪をとけば。禪門教にしたがふ。をよそ眞言止觀をもて。禪を推べきにあらず。いはんや法相三論をや。いかにいはんや自餘の小乗の宗をやと。さらにこれ教者の詞にあらず。まことに細みじかくしては。深泉にいたりたたく。翅よはくしては。大虚にかけることなし。智あさく心つたなくして。宗門に達することあらんや。されば禪の宗旨を論ぜられたる。上人自筆の書いまにあり。末學うたがふことなかれ。

或時上人月輪殿にして。山僧と參會の事侍しに。彼僧淨土宗を立給なるは。いづれの文によりて。立給ぞやとたづぬるとき。善導の觀經の疏の附屬の文なりと答給に。重ていはく。宗義をたつる程のことに。なんぞたゞ一文によるべきやと。上人微笑して。物もの給はざりけり。かの僧山に歸てのち。實地房法印證眞にこのよしを語て。法然房すべて返答にをよばずと申けるを。法印申されけるは。法然房の物いはれざるは。不足言に處するゆへなり。かの上人は。天台宗の達者たるうへ。あまさへ諸宗にわたりて。あまねくこれを習學して。智惠深遠なる事。つねの人にこえたり。返答かなはずして。物いはずとおもふ僻見。さらにおこすべからずとぞ申されける。かの法印は。つねに上人に親近して法門を談ぜしゆへに。智惠の分際を知て。申されけるにこそ。ことに戒の法門は。上人に相承の人なり。かの法印堅義の時は。惠光房永辦法印を

師とせられけるに。元品の無明は妙覺智斷。三惑は同時斷の義を立べきよしとさづけ給けるに。證眞は。一代聖教を見に。三惑は異時斷。元品の能治は等覺智也。此旨を立べきよし申されければ。その心なるべしと。永辦法印ゆるされけるゆへに。等覺智斷の義を立す。澄憲法印題者にてしらべ給けるに。堅者五千餘卷の經教をひらきたるに。いまだ妙覺智斷の文を見ずと立するに。見聞の大衆同音に。博覽を感ずる聲甚し。その時澄憲法印。堅者すてに智劍をふるふ。題者あにさび刀をぬかざらんや。といふ名句を申されけり。弱年の昔猶かくのごとし。況や積學の後をや。一切經を披覽すること。五返なりしかども。惠心院の僧都の高覽に。同ぜんことを憚て。三返のよし披露せられけるとかや。晝夜に地藏菩薩に物語し。又おぼつかなきことあれば。中堂にまいりて藥師佛に尋たてまつり。十禪師に詣して尋申に。かならず授ら

れける。常のことばには。我師はとをくは大聖世尊。ちかくは天台妙樂とて。末師をばもちあらざりけり。往生傳をつくりて。我身をかきいれられけるとかや。時の人地藏の化身とぞ申ける。しかるに彼法印。上人を智惠深遠の人なりと申されけるは。本地の智惠といひ。垂迹の廣才といひ。たがひに知たまへるゆへなるべし。餘人の稱美よりも。氣味ありてぞおぼえ侍る。上人の老後に。竹林房靜嚴法印の弟子きたりて。堅義の才學にそなへんために。天台宗の法門をたづね申けるに。くはしく深奥をさづけられけり。かの人の中に申けるは。老耄のうへ念佛にひまなくして。聖教を見ざるよしは申されしかども。文理のあきらかなること。當時の勤學にこえたまへり。たゞ人にあらずと。そのころ山門に碩學はやしをなしき。しかるに數輩の明匠をさしをきて。隱遁の上人に宗の大事をたづ

ね申ける。その達し給へるほども。あらはれてぞ
おぼえ侍る。上人かたりてのたまはく。われ聖
教を見ざる日なし。木曾の冠者。花洛に亂入の
とき。たゞ一日聖教を見ざりきと。後には念佛
の心とまを惜て。稱名の外は他事なかりけり。
後學よろしくそのあとをまなぶべきにや。

法然上人行狀畫圖第六

上人。聖道諸宗の教門にあきらかなりしかば。法
相三論の碩徳。面々にその義解を感じ。天台華
嚴の明匠。一々にかの宏才をほむ。しかれども
なを出離の道にわづらひて。身心やすからず。順
次解脱の要路をしらんために。一切經を。ひら
き見たまふこと五返なり。一代の教迹につき
て。つらく思惟したまふに。かれもかたぐ。
これもかたし。しかるに惠心の往生要集。もはら
善導和尚の釋義をもて指南とせり。これにつき
てひらき見給に。かの釋には。亂想の凡夫。稱

名の行によりて。順次に淨土に。生ずべきむね
を判じて。凡夫の出離を。たやすくしめられた
り。藏經披覽のたびに。これをうかゞふといへ
ども。とりわき見給こと三返。つねに一心專念
彌陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨者是名
正定之業順彼佛願故の文にいたりて。末世の凡
夫。彌陀の名號を稱せば。かの佛の願に乗じ
て。たしかに往生を。うべかりけりといふ。こ
とはりを。おもひさだめ給ぬ。これによりて承
安五年の春。生年四十三。たちどころに餘行を
すてし。一向に念佛に歸し給ひにけり。
ある時上人。往生の業には。稱名にすぎたる行。
あるべからずと申さるゝを。慈眼房は。觀佛す
ぐれたるよしをの給ければ。稱名は。本願の行
なるゆへに。まさるべきよしをたて申たまふ
に。慈眼房又先師良忍上人も。觀佛すぐれたり
とこそおほせられしが。との給けるに。上人。
良忍上人も。さきにこそむまれ給たれ。と申さ

れけるとき。慈眼房腹立たまひければ。善導
和尚も。上來雖說定散兩門之益望佛本願意在衆
生一向專稱彌陀佛名と釋したまへり。稱名すぐ
れたりといふこと。あきらかなり。聖教をば。
よく御覽し給はてとぞ申されける。

上人。一向專修の身となり給にしかば。つねに四
明の巖洞をいて。西山の廣谷といふところ
に。居をしめ給き。いくほどなくて。東山吉水
のほとりに。しづかなる地ありけるに。かの廣
谷のいほりを。わたして。うつりすみ給。たづ
ねいたるものあれば。淨土の法をのべ。念佛の
行をすめらる。化導日にしたがひて。さかり
に。念佛に歸するもの。雲霞のごとし。その
ち。賀茂の河原屋。小松殿。勝尾寺。大谷な
ど。その居あらたまるといへども。勸化をこた
ることなし。つねにほまれ一朝にみち。益四海
にあまねし。これ彌陀の一教。わがくに。縁ふ
かく。念佛の勝行。末法に相應するゆへなるべ

し。大谷は。上人往生の地なり。かの跡いまに
あり。東西三丈餘。南北十丈ばかり。このうち
にたてられけん坊舎。いくほどのかまへにかあ
らんと見えたり。その節儉のほども。おもひや
られてあはれに。たとくぞ侍る。いまの御影堂
の跡これなり。
或時上人おほせられていはく。出離の志。ふか
いりしあひだ。諸の教法を信じて。諸の行業を
修す。おほよそ佛教おほしといへども。所詮戒
定惠の三學をばすぎず。所謂小乗の戒定惠。大
乗の戒定惠。顯教の戒定惠。密教の戒定惠也。
しかるに。わがこの身は。戒行にをいて。一戒
をもたもたず。禪定にをいて。一もこれをえ
せずといへり。又凡夫の心は。物にしたがひて
うつりやすし。たとへば猿猴の枝につたふが
ごとし。まことに散亂して。動じやすく。一心
しづまりがたし。無漏の正智。なにによりてか

おこらんや。若無漏の智剣なくば。いかてか。悪業煩惱のきづなをたらんや。悪業煩惱のきづなをたらずば。なんぞ生死繫縛の身を。解脱することをえんや。かなしきかな。かなしきかな。いかせせん。いかせせん。こゝに我等ごときは。すでに戒定慧の三學の器にあらず。この三學のほかに。我心に相應する法門ありや。我身に堪たる修行やあると。よろづの智者にもとめ。諸の學者に。とぶらひしに。をしふるに人もなく。しめすに輩もなし。然間なげき。經藏にいり。かなしみ。聖教にむかひて。手づからみづから。ひらき見しに。善導和尚の觀經の疏の。一心專念彌陀名號修行住坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定之業順彼佛願故といふ文を見得てのち。我等がごとくの無智の身は。偏にこの文をあふぎ。もはらこのことはりをたのみて。念々不捨の稱名を修して。決定往生の業因に備べし。たゞ善導の遺教を信ずるのみに

あらず。又あつく彌陀の弘願に順ぜり。順彼佛願故の文。ふかく魂にそみ。心にとどめたるなり。惠心の先徳の。往生要集をひらくに。往生之業念佛爲本といひ。又かの人の妙行業記の文にも。往生之業念佛爲先といへり。覺超僧都。惠心の僧都に。といての給はく。所行の念佛は。これ事を行ずるとやせん。これ理を行ずとやせん。惠心の僧都。こたへての給はく。こゝろ萬境にさへざる。こゝをもて。我たゞ稱名を行ずるなり。往生の業には。稱名尤たれり。これによりて。一生中の念佛。その數を勘たるに。二十俱胝遍なりとの給へり。然則。源空は大唐の善導和尚の。をしへにしたがひ。本朝の惠心の先徳の。すゝめにまかせて。稱名念佛のつとめ長日六萬返なり。死期やうやくちかづくによりて。又一萬返をくはへて。長日七萬返の行者なりとぞおほせられける。上人の念佛七萬遍になされてのちは。晝夜に餘

事をまじへられざりけり。されば。そのうち人のまいりて。法門をたづね申けるには。きいたまふかと。おぼしくは。念佛のこゑ。すこしひきく。なり給ふばかりにてぞありける。一向に念佛を。さしをき給こと。なかりけるとなん。上人或時かたりてのたまはく。われ淨土宗をたつる心は。凡夫の報土に。ひまるゝことを。しめさんがためなり。もし天台によれば。凡夫。淨土にひまるゝことを。ゆるすに似たれども。淨土を判ずる事あさし。もし法相によれば。淨土を判ずる事。ふかしといへども。凡夫の往生をゆるさず。諸宗の所談。ことなりといへども。すべて。凡夫報土にひまるゝことをゆるさるゆへに。善導の釋義によりて。淨土宗をたつる時。すなはち凡夫報土にひまるゝ事あらはるゝなり。こゝに。人おほく誹謗してはいく。かならず宗義を立せずとも。念佛往生をすゝむべし。いま宗義をたつる事は。たゞこれ勝他の

ためなるべし。吾等凡夫ひまるゝ事をえば。應身應土なりとも足ぬべし。なんぞ強に報身報土の義を立つるやと。この義一往ことはりなるに似たれども。再往をいへば。その義をしらざるがゆへなり。もし別の宗を立せずば。凡夫報土に生ずる義もかくれ。本願の不思議も。あらはれがたきなり。しかれば。善導和尚の釋義にまかせて。かたく報身報土の義を立す。これまた。勝他のためにあらずとぞ。おほせられける。上人。播磨の信寂房に。おほせられけるは。こゝに宣旨の二つ侍るを。とりたがへて。鎮西の宣旨を。坂東へくだし。坂東の宣旨をば。鎮西へくだしたらんには。人もちゐてんやとの給に。信寂房しばらく案じて。宣旨にても候へ。とりかへたらんをば。いかゞもちゐ侍べき。と申ければ。御房は道理をしれる人かな。やがてさぞ帝王の宣旨とは。釋迦の遺教なり。宣旨二つあ

りといふは。正像末の三時の教なり。聖道門の修行は。正像の時の教なるがゆへに。上根上智のともがらにあらざれば證しがたし。たとへば西國の宣旨のごとし。淨土門の修行は。末法濁亂の時の教なるがゆへに。下根下智のともがらを器とす。これ奥州の宣旨のごとし。しかれば。三時相應の宣旨。これをとつたがふまじきなり。大原にして。聖道淨土の論談ありしに。法門は牛角の論なりしかども。機根くらべには。源空かちたりき。聖道門は。ふかしといへども。時すぎぬれば。いまの機にかなはず。淨土門は。あさきに似たれども。當根に。かなひやすしと。いひしとき。末法萬年餘經悉滅彌陀一教利物偏増の。道理におれて。人みな。信伏しきとぞ。仰られける。

震旦に淨土の法門をのぶる人師おほしといへども。上人。唐宋二代の高僧傳の中より。曇鸞。道綽。善導。懷感。少康の五師をぬきいてい。

一宗の相承をたて給へり。其後。俊乘房重源。入唐のとき。上人仰られていはく。唐土に五祖の影像あり。かならずこれをわたすべしと。これによりて。渡唐の後。あまねく。たづねもとむるに。上人の仰たがはず。はたして五祖を一鋪に圖する。影像を得たり。重源いよく。上人の内鑑冷然なることをしる。かの當麻寺の曼陀羅は。彌陀如來化尼となりて。大炊天皇の御宇。天平寶字七年に。をりあらはし給へる靈像なり。序正三方の縁のさかひ。日觀三障の雲のありさま。人さらにわきまへがたかりしを。のちに。文德天皇の御宇。天安二年に。もろこしよりわたれる。善導大師の御釋の。觀經の疏の文を見てこそ。人不審をば。ひらき侍しか。天平寶字七年より。天安二年にいたるまでは。九十六年なり。そのかみ吾朝にて。をられたる曼陀羅の。はるかの後にわたれる。觀經の疏の文に。符合せるをば。不思議とこそ申傳て侍れ。い

ま上人さきだちて淨土の宗義を。ひらきたまひ。後に重源入唐の時。かの影像をわたすべきよしを。命ぜられ。わたすところの影像。上人の仰にたがはざること。豈奇特にあらずや。されば道俗貴賤。かの五祖の眞影を拜して。いよく上人の徳に歸し。ますく念佛の信を。ふかくしけり。當時二尊院の經藏に。安置するは。かの重源。將來の眞影なり。

法然上人行狀畫圖第七

上人。たゞ諸宗の教門に。あきらかなるのみにあらず。修行おほくその證を得給さ。そのかみ四明黒谷にして。法華三昧ををこなひ給しとき。普賢白象にのりて。まのあたり道場に現じたまふ。又上人ある時。寂空上人ならびに西仙房と。ともにをこなひたまひけるに。山王影向して。納受のかたちをあらはし給けり。これ末代の奇特なり。

上人。黒谷にして。華嚴經を講し給けるに。あをさ小ぐちなは。机のうへにありけるを。法蓮房信空に。とりてすつべきよし。おほせられければ。かの法蓮房。かぎりなく。くちなはに。をづる人なりけれども。師の命をむきがたきによりて。出文机の明障子を。あけまふけて。ちりとりにはさいれて。なげすてい。障子をたて、けり。さてかへりて見れば。くちなは。なをもとのところにあるけり。これをみるに。遍身にあせいでて。おそろしかりけり。上人見給て。などいりてはすてられぬぞと。仰せられければ。法蓮房しかく。とこたへ申さるゝに。上人默然として。物ものたまはざりけり。其夜法蓮房の夢に。大龍かたちを現じて。我はこれ華嚴經を。守護するところの龍神なり。おそろし事なかれ。といふとおもひて。ゆめさめにけり。むかしこの經龍宮にありて。人間に流布せず。龍樹菩薩龍宮にゆきて。これをひらき見

て。人間にかへりて。これをひろめ給き。その
 うち覺賢三藏。震旦にして。安帝義熙十四年三
 月十日より。揚州謝司空寺に。護淨華嚴法堂
 をたてし。華嚴經を譯し給しとき。堂のまへの蓮
 花池より。毎日に青衣なる二人の童子。あした
 にいてちりをはらひ。すみをすり。くるれ
 ば。いけの底へなん。かへり入ける。經を譯し。
 をはりてのちは。見えずなりにけり。この經ひ
 さしく龍宮にありしゆへに。龍神うやまひて。
 守護をくはへ侍けるにこそ。上人の披講まこと
 いたりて。龍神を感ぜしめたまひける。ゆゑしく
 ぞ侍ける。

上西門院ふかく上人に歸しましめて。念佛の
 御志。あさからざりけり。或時上人を請じ申さ
 れて。七箇日のあひだ説戒あり。圓戒の奥旨を
 のべ給に。一つのくちなは。からがきの上に。
 七日のあひだ。はたらかずして。聽聞の氣色な
 り。見る人あやしみおもふほどに。結願の日に

あたりて。かのくちなは死せり。そのかしらの
 中より。一の蝶いてし。そらにのぼると見る人
 もあり。天人のかたちにてのぼると見る人もあ
 りけり。昔惠表比丘。武當山にして。元無量義
 經を講讀せしに。こゑをきく青雀。歡喜苑に生ぜ
 り。かの先蹤をおもふに。この小地も。大乘の
 結縁によりて。天上にむまれ侍けるにや。
 上人秘密の窓にいら。觀念の床に坐し給しに。
 あるときは蓮華あらはれ。あるときは羯磨を
 見。あるときは寶珠を拜す。觀心明了にして。
 瑞相を眼前にあらはし給ことおほかりけり。
 上人。ある夜夢みらく。一の大山あり。その峯さ
 はめてたかし。南北長遠にして西方にむかへ
 り。山のふもとに大河あり。碧水北より出て。
 波浪南にながる。河原渺々として邊際なく。林
 樹茫茫として限數をしらず。山の腹にのぼり
 て。はるかに西方を見たまへば。地よりかみ五
 丈ばかりあがりて。空中に。一聚の紫雲あり。

この雲とびきたりて。上人のところをいたる。希
 有の思をなし給ところ。この紫雲の中より。
 無量の光をいだす。光の中より孔雀鸚鵡等の。
 百寶色の鳥。とびいてし。よもに散じ。又河濱
 に遊戯す。身より光をはなちて照耀きはまりな
 し。其後衆鳥とびのぼりて。もとのごとく紫雲の
 なかにいりぬ。この紫雲。また北にむかひて。
 山河をかくせり。かして往生人あるかと。思
 惟し給ほどに。又須臾にかへりきたりて。上人
 のまへに住す。やうやくひろごりて。一天下に
 覆ふ。雲の中より一人の僧出て。上人の所にさ
 たり住す。そのさま腰より下は。金色にして。
 こしよりかみは。墨染なり。上人合掌低頭して
 申給はく。これ誰人にましますぞやと。僧答給
 はく。我は是善導なりと。なにとのために。來給
 ぞやと申給に。汝専修念佛を。ひろむること。貴
 がゆへにきたれるなり。との給と見て夢さめ
 め。畫工乘臺におほせて。ゆめに見るところを

圖せしむ。世間に流布して。夢の善導といへる
 これなり。その面像。のちに唐朝よりわたれ
 る。影像に。たがはざりけり。上人の化導。和
 尚の尊意にかなへること。あきらけし。しかれ
 ば。上人の勸進によりて。稱名念佛を信じ。往
 生をとぐるもの。一州にみち。四海にあまね
 し。前兆のむなしからざる。たれの人か。信受
 せざらむ。

上人。専修正行としをかさね。一心専念功つもり
 給しかば。つゝに口稱三昧を發し給き。生年六
 十六。建久九年正月七日の別時念佛のあひだ。は
 じめには。まづ明相あらはれ。次に水想影現
 し。のちに瑠璃の地すこしき現前す。同二月に
 寶地。寶池。寶樓を見たまふ。それよりのち連
 々に勝相あり。或時は左の眼より光を出す。眼
 に瑠璃あり。かたち瑠璃のつぼのごとし。つぼ
 にあかさ花あり。寶瓶のごとし。或時ははるか
 に西方を見やり給に。寶樹つらなりて。高下心

にしたがひ。或時は座下實地となり。或時は佛の面像現じ。或時は三尊大身を現じ。或時は勢至來現し給。すなはち畫工に命じて。これをうつしとせめらる。或時は寶鳥。琴笛等の。種々のこゑをきく。くはしきむね。御自筆の三昧發得の記に見えたり。かの記。上人存日のあひだは披露なし。勢觀房遺跡を相承のち。これを披見せられけり。高野の明遍僧都は。かの記をひらき見て。隨喜の涙をながされけるとなむ。

法然上人行狀畫圖第八

上人。三昧發得ののちは。暗夜に燈燭なしといへども。眼より光をはなちて。聖教をひらき。室の内外を見給ふ。法蓮房も。まのあたりこれを拜し。隆寛律師も。ことに此事を信仰せられけり。ある時秉燭の程に。上人のどかに。聖教を披覽し給ふをとのしければ。正信房。いまだ燈明など。たてまつるとも。覺ざりつるにと。

おぼつかなくて。ひそかに座下を伺に。左右の御目のすみより。光をはなちて文の面をてらし見給。その光のあきらかなる事。ともしびにすぎたり。いみじく。たうときこと。かぎりなし。かやうの内證をば。ふかく隱密することにて侍にと思て。ぬきあししてまかりいてぬ。又ある時。更たけ夜しづかたして。深窓に人なし。上人ひとり念佛し給。御聲勇猛なりければ。よなく老骨をばげまし。をこたりなき御つとめ。いたはしくも。貴も覺て。もし御用もや。いますらんとて。正信房まゐりて。やりどを。ひきあけて。見たてまつれば。身光赫奕として。坐し給へる疊二帖が上にみたり。明なること。暮山に望て。夕陽を見がごとし。身の毛もよだつ計なり。たうとしといふも。をろかなり。心づきなくや。おぼすらん。さればとて。やがてまかり出んことも。中々也。進退わづらふところに。ことのやう。見えぬとや思給け

ん。上人。たれぞと問給。湛空と答申されければ。はやして。各をも。か様になしたてまつらばやなどぞ。仰られける。慈恩むかし玄奘の門下にありて。眼より光をはなちて。よる聖教を。ひらきしかば。泗州大師。上座なりしかども。なを其徳に信伏して。あふぎて師範とし給き。いま邊州にして。末代たりといへども。奇特まことに。上古に恥ざるをや。あるとき上人。念佛しておはしけるに。勢至菩薩來現し給ふ事ありけり。そのたけ一丈餘なり。畫工に命じて。其相をうつしとせめられ。ながく本尊とあふぎ。申されけり。上人。あからさまに。草庵をたちいて。かへり給へりけるに。彌陀の三尊。繪像にあらず。木像にあらず。垣をはなれ。板敷にも天井にも。つかずして。おはしましけり。其後は拜見し給ふ事。つねの事なりけり。別時念佛を修し。不斷の稱名を

つとむること。みなもと。上人の在世より。おこれり。そのなかに。上人。元久二年正月一日より。靈山寺にして。三七日の別時念佛をはじめ給ふに。燈なくして光明あり。第五夜にいたりて。行道するに。勢至菩薩。おなじく列にたちて。行道し給けり。法蓮房夢のごとくに。これを拜す。上人に。このよしを申に。さる事侍らんと答給。餘人はさらに拜せず。同年四月五日。上人。月輪殿に。まゐり給て。數尅御法談ありけり。退出のとき。禪閣庭上にくづれありさせ給て。上人を禮拜し。御ひたいを地につけて。やゝひさしくありて。おきさせ給へり。御涙にむせびて。仰られていはく。上人地をはなれて。虚空に蓮花をふみ。うしろに頭光現じて。出給つるをば見ずやと。右京權大夫入道法名中納言阿闍梨尋玄蓮房號本二人御前に候ける。みな見たてまつらざるよしを申。池の橋をわたり給ひけるほどに。頭光現じけるにより

て。かの橋をば頭光の橋とぞ申ける。もとより。御歸依ふかゝりけるに。この後はいよく佛のごとくにぞ。うやまひたてまつられける。ある人。不註上人の念珠を給はりて。よるひる名號をとなふ。ある時。あからさまにたけくぎに。かけたりけるに。一室照曜する事ありけり。その光をたゞし見るに。上人恩賜の。念珠よりいてたり。珠ごとに歴々たり。なをし暗夜に。星を見るがごとし。奇異の事なりといへり。

上人の弟子勝法房は。繪をかく仁なりけるが。上人の眞影を畫たてまつりて。其銘を所望しけるに。上人これを見給て。鏡二面を。左右の手にもち。水鏡をまへにをかれて。頂の前後を見合られ。たがふところは胡粉をぬりて。なをしつけられてのち。これこそ似たれとて。勝法房にたまはせけり。銘の事は。返答にをよばれざりけるを。勝法房。後日に又參て申出たりけり。

れば。上人の御まへに侍ける紙に。

我本因地 以念佛心 入無生忍
今於此界 攝念佛人 歸於淨土

十二月十一日

源空

勝法御房

とかきて。授られければ。是を彼眞影に押て歸敬しけり。これは首楞嚴經の勢至の圓通の文なり。上人は勢至の應現たりといふ事。世舉てこれを稱す。しかるに。おほくの文の中に。勢至の御詞を。自贊に用られ侍る。まことに奇特の事なり。今彼眞影を拜したてまつるに。胡粉を塗て。なをされたる所多し。これ末代の龜鏡たるによりて。彼御自筆の本を寫て。此繪に加置とて。又或人。上人の眞影を寫て。其銘を申けるにも。この文を書て賜けり。彼正本のたはりて。いまにありとなむ申侍る。又讚州生福寺にすみ給し時は。勢至菩薩の像を。自作して。法然本地身。大勢至菩薩。爲度衆生故。

顯置此道場。等置文にぞ載られける。委事は。彼配所の卷に。しるすもの也。勢至の垂迹たる條。その證據かくのごとし。尤仰信するにたれり。諸人感夢の事。おほきなかに。或人は。上人。蓮花のなかにして。念佛し給と見る。或人は。天童。上人を圍遶して。管絃遊戯すとみる。あるは又。洛中みな鬪諍堅固なれども。たゞ上人の住所ひとり無爲なり。これすなはち。念佛するゆへと見る。あるは嗟峨の釋迦如來。つげての給はく。當時法然房といふ人の。ひらきたる往生の道妙にして。おほくの人。みなそのみちより往生すべし。と仰らると見る。されば上人勸化のいち。都鄙に往生をとぐる人おほし。紫雲音樂こゝにも見え。かしてにもきこゆ。夢のつげ。ひなしからざる事をしりぬ。極樂にのぞみをかけんともがら。たれか上人のをしへをあふがざらん。

法然上人行狀畫圖第九

上人。道心うちこ薫し。行業ほかにあらはる。上王公より。下黎元にいたるまで。その徳に歸せずといふことなかりき。後白河法皇。河東押小路の仙洞にて。御如法經を修し。ましますことありき。上人をもて御先達とせらる。文治四年八月十四日。前方便をはじめらる。御經衆は。法皇。妙音院入道相國師長。源空上人。ならびに。門弟行賢大徳。山門には。良宴法印。行智律師。仙雲律師。覺兼阿闍梨。重圓大徳。園城寺には。道顯僧都。眞賢阿闍梨。玄修阿闍梨。圓隆阿闍梨。圓玄阿闍梨等なり。去十日。日吉の社に。臨幸ありし時。衆徒。執當澄雲法印をもて。申入けるは。東寺の僧。今度の御經衆に。めし入らるべきよし。そのきこえあり。慈覺大師始行の法則なり。他門の僧しかるべからず。又或上人めし入らるべきよし。風聞す。これはあなが

ちに。子細を申べからずと云云。これによりて。東寺の僧はめされず。上人は勅喚ありて。御先達をつとめらる。上人龍次の第一たるうへ。先達たり。一座たるべきよしおほせらる。上人辭し申さるといへども。勅定しきりなるによりて。第一座に著す。正面の東西に座をしく。東の一座に上人。西の一座に法皇。上人のつぎに。入道相國著し給。良宴法印以下。官次にまかせて。列座す。行基菩薩は。世俗の法によりて。婆羅門僧正の。しもに著し給き。この例になぞらへば。良宴法印。上座たるべしといへども。別勅にて。上人一座に著せらる。上人禮盤にのぼりて啓白。其後。錫杖を誦し。懺法をはじめたまふ。前方便の間は。毎日三時懺法なり。同廿日の後夜の時より。正懺悔をはじめらる。後夜の調聲は。上人。晨朝の調聲は。法皇。御つとめあり。堂莊嚴。美をつくされ。作法又嚴重なり。法皇御靈夢の事ましましけり。子細御

願文中納言兼光に見えたり。
 九月四日御料紙をむかへらる。件の料紙は。觀性法橋の。進ずるところなり。かの法橋。慈鎮和尚于時同宿のあひだ。御料紙安置の所は。和尚の住坊。三條白川なり。鳥羽院の。第七宮覺快親王の舊跡にてぞありける。良宴法印以下。十一人の經衆は。かの所へむかふ。宿老の。のこりとまざる儀になぞらへて。法皇。上人。相國禪門。道場に。まうけさせ給ふ料紙を。銅の筒におさめ。御輿に入たてまつりて。むかへたてまつる。南の。ひがくしのしたに案をたてて。御輿をかきすへたてまつる。良宴法印以下の經衆。外に候して伽陀を誦す。正面の。明障子をあけられて。法皇伽陀を誦しますすに。上人。入道相國。おなじく助音申さる。料紙を。道場に安置の。ち。行道。合殺あり。この儀は。さだまれる法式にあらず。上人これを申をこなはれけり。

同八日。寫經の水をひかへらる。下蔭の僧衆等。横川にのぼりて。慈覺大師のをこなひ給し。根本の水をくみて。銅の瓶にいれて持參す。同十一日御筆立なり。慈鎮和尚。觀性法橋は。御經衆にあらずといへども。もとより如法經中たるによりて。寫經の時參ぜらる。和尚は。入道相國のしもに著し。觀性法橋は。仙雲律師のしもに坐す。上人禮盤にのぼりて啓白。下座の。ち行道をはりて。伽陀を誦す。其後。十六人著座して。同時に筆をとり。書寫をはじめらる。同十二日巳尅に。御書寫ことをへしかば。すなはち十種供養の儀あり。伶人の上達部。透渡殿に著す。地下の樂人。日隱の西の腋に坐して。沙陀調の調子をふく。正面の庭上に。赤地の錦の地鋪をしきて。その上に。机二脚をたて。十種供養の具を安ず。天童二人。舞童十六人。東西よりすゝみ出て。供具をとりて南の階下に參じて。傳供をなす。衆僧正面の。左右に立て

傳供す。このあひだ。十天樂を奏す。御導師澄憲法印なり。傳供のときは。制禁かたくして參詣の道俗。やり水の北に。のぞまずといへども。説法の時は勅許ありて。聽聞の緇素。羣をなす。辯説玉をはく。貴賤みな涙をながす。説法のおもむき。前々に超過せり。ことに叡威あるよし。權大納言兼雅卿をもて仰下さる。導師下座の時。千秋樂を奏す。入道相國。唱歌。中御門大納言宗家卿助音。凡今日の儀式。萬代の美談なり。六十の御賀を。をこなはれず。自然にこの事にあるかのよし。時の人申あへり。同十三日御經奉納のために。首楞嚴院に臨幸あり。長吏圓良法印の沙汰として。水飲に御所をまうけ。供御。ならびに御行水を用意す。法皇。鳥居の岡より。御歩行。まづ四季講堂に入御。その。ち如法堂の中門の外に。天童以下供具をさゝげて。左右にたつ。樂人法界房の。北の砌に候して。樂を奏す。中門のうちより。御

淨履をたてまつりて。如法堂に入御。中門より御堂にいたるまで。蓮道をしく。西の戸より。御經を。入たてまつりて。正面の南の庇に安ず。御經衆。南の簀子に候す。行智律師。御經をとり出し。たてまつる。法皇うけとらせおはしまして。長吏圓良法印に。わたしたまはず。このあひだ伽陀を誦す。御導師圓能法印于時法橋なり。説法のうち。中門のほかにして。御布施を給ふ。次に十天樂を奏す。さて法界房に。渡御のうち。宗明樂を奏し。伽陀を誦す。御導師又圓能法印なり。啓白下座の後。中堂に臨幸あり。中堂より還御。食堂にして。御裝束をあらためらる。このあひだ。衆徒庭上に羣參して。延年種々の藝をほどこす。奉行人定長卿をもて。御願無爲の條。ひとへにこれ。衆徒祈念のいたすところなり。叡威はなほだしきよし。澄雲法印に。おほせくださる。澄雲庭にありて。勅定のおもむきを。衆徒におほす。そのうち。ゆふべ

にをよびければ。すなはち。還御あり。亥尅に押小路殿に著御。本道場にして。懺法を、こなはる。これを歡喜懺法と號す。抑慈覺大師の門徒餘流。山門。園城の碩徳高僧。その數おほかる中に。隱遁の上人を。めしうだして。御先達とせられけること。しかしながら。佛徳のいたり。御歸依のあまりなり。

法然上人行狀畫圖第十

高倉院御在位の時。承安五年の春。勅請ありしかば。主上に一乘圓戒を。さづけたてまつらる。卿相頂戴し。宮人稽首す。清和の御門。貞觀年中に。慈覺大師を。紫宸に請じたてまつられ。天皇。皇后ともに。圓戒をうけましましき。上人かの九代の嫡嗣として。法流たゞ一器につたはり。はるかにいにしへのあとをおこし。たまひぬること。いみじく侍れ。後白河法皇。勅請ありければ。上人法住寺の御

所に。參じたまひて。一乘圓戒を。さづけ申されけり。山門。園城の。碩徳をめされて。番々。往生要集を講じ。をの／＼所存の義を。のべさせられけるに。上人おほせにしたがひて。披講し給けるに。往生極樂の教行は濁世末代の目足なり。道俗貴賤。たれか歸せざらむものと。よみあげ給より。はじめてきこしめさるゝやうに。御さにもそみて。たうとく。御感涙はなほだしかりけり。御信仰のあまり。右京權大夫隆信朝臣におほせて。上人の眞影を圖して。蓮華王院の寶藏に。おさめらる。先代にも。その例されなる事とぞ申あへりける。後白河法皇。ひとへに上人の勸化に歸しましたまし。御信仰。他にことなりしかば。百萬遍の御苦行。二百餘箇度まで。功をつみ。比類なき御事にてぞ。ましくける。建久三年正月五日より。御惱ありけるに。日にしたがひて。おもらせおはしましたければ。御善知識に。參ぜらるべ

きよし。仰下さるゝによりて。二月廿六日に。上人參じたまひて。御戒を授たてまつられ。御往生の儀式を。さだめ申さる。念佛往生の道は。日ごろさこしめしをかれけるうへ。かさねて申入らるゝむね。ねんごろなりしかば。いよいよ御信心ふかくして。御念佛をこたせたまはず。御臨終ちかづかせ給ければ。同三月十二日戌尅に。御佛を渡したてまつられ。十三日寅尅御臨終正念にして。稱名相續し。御端坐ねぶるがごとくして。往生の素懷をとげさせ給き。御年六十六なり。誠に御宿縁のいたり。あはれにぞおぼへ侍る。

法皇崩御の後。かの御菩提の御ために。建久三年秋のころ。大和前司親盛入道法名八坂の引導寺にして。心阿彌陀佛調聲し。住蓮。安樂。見佛等のたぐひ助音して。六時禮讚を修し。七日念佛す。結願の時。種々の捧物を。とりいでけるを。上人不受の氣。おはしまして。念佛はみ

づからのための。つとめなり。法皇の御菩提に。廻向したてまつるとも。布施以外の事なり。ゆめ／＼あるべからずとぞ。いましめ給ける。これ六時禮讚。苦行のはじめなり。

後白河法皇の十三年の。御遠忌にあたりて。土御門院。元久元年三月に。御佛事を修せられけるに。上人蓮華王院にして。淨土の三部經を。書寫せられ。能聲をえらびて。六時禮讚を勤行して。ねんごろに。御菩提をぞ。訪申されける。又大和入道見佛も。おなじく。法皇の御菩提を。いのり申さんために。いづれの行法をか。修すべきと思惟するに。法皇。見佛が夢に。我菩提をば。如法に訪べきよしを。示されけり。則見佛此由を。上人に申ければ。上人。淨土の三部經を。如法に書寫すべき次第。法華の如法經になぞらへて。法則を出さる。所謂かの記に云。

淨土三部經如法經次第

一 御料紙事。紙會を殖て。千日はををこなへ。其間は念佛禮讚を用べし。若かくのごとくをこなへる。料紙なくば。市の料紙を用べし。一堂莊嚴事。如常
一 前方便七箇日事。沐浴。潔齋。淨衣等。常のごとし。但絹綿の類は。用否人の意に。あるべし。
一 入道場次第。門前の灑水。並香呂。花籠。香象等。常のごとし。次に。無言行道三返。奉請。合殺等。常のごとし。次に諸衆寶座の前に。列立して。惣禮の伽陀を。誦すべし。其詞に云。
歸命本師釋迦佛 十方世界諸如來
願受施主衆生請 不捨慈悲入道場
南無十方三世一切諸佛。哀愍納受。入此道場。
本國彌陀諸聖衆 平等俱來坐道場
道場聖衆實難逢 衆等頂禮彌陀尊
南無極樂世界。諸尊聖衆。慈悲護念。證明功德。

次に彌陀を讚歎したてまつるべし。

弘誓多門四十八

偏標念佛最爲親

人能念佛々還念

專心想佛々知人

南無極樂化主彌陀如來。命終決定。往生極樂。次に經を。讚歎すべし。

念々思聞淨土教

文々句句誓當勤

憶想長時流浪苦

專心聽法入眞門

南無淨土三部。甚深妙典。命終決定。往生極樂。

次に禮讚日没の時より。是を始べし。諸衆著座。導師登禮盤。禮讚の後。高聲念佛三百遍。

但時の早晩によるべし。禮讚の時尅は。日没申時。初夜戌時。半夜子時。後夜寅時。晨朝辰時。日中午時。なるべし。

次に佛經を。讚歎すべし。迦陀。其詞先のごとし。

但開白の時は。念佛以後の。讚歎を略すべし。又開白以後は。惣禮の伽陀を。略すべし。次に例時の作法。常のごとし。但日没一時を用べし。次に讀經は。雙卷觀經なるべし。轉讀の多

少。時の早晩に隨べし。次に出堂。後々の時。これになぞらへて知べし。前方便。七箇日の間。日別かくのごとくなるべし。一寫經七箇日事。沐浴。潔齋。入道場。禮讚。念佛。讚歎。讀經等の次第。前方便のごとし。一事も違すべからず。筆立の次第。初日。晨朝の禮讚以後。啓白あるべし。其器量を選べし。分經。并墨筆等以下の諸事。常のごとし。日別の書寫。禮讚以後。多少時によるべし。但七箇日の間に。其功は終べきなり。日別解説。日中の禮讚以後なるべし。日々の次第。是になぞらへて知べし。七箇日の間の儀式。かくのごとし。

次に奉納の次第。常のごとし。佛經讚歎。先のごとし。但讚歎の多少。時宜によるべし。奉納路次の間の合殺。常のごとし。上人記錄の法則。かくのごとし。追福のために。これらの善根を修する事。このときより。はじ

まれるとなん。申つたへ侍る。されば其後三部經を如法に書寫する事。世におほくきこえ侍り。後鳥羽院。度々勅請ありて。圓戒を御傳受。上西門院。修明門院。おなじく御受戒ありき。かゝりしかば。三公。公卿。かうべをかたぶけ。一朝あふぎて。傳戒の師とせずと。いふ事なかりき。

法然上人行狀畫圖第十一

諸人の歸依あさからざりし中に。九條の關白殿兼實公號後法性寺殿又號月輪殿信仰他にことに崇重比類なかりき。二月十九日法性寺殿の御忌日に御佛事ありけるに。傳供のとき僧俗座を分て立ならべり。今日はことにねんごろなる御佛事なり。上人も傳供に立給べしと殿下おほせごとありければ。松殿基房まことにさ候べしと申給に。上人は隱遁の身たるうへ凡僧にておはするに。慈鎮和尚于時受戒の師範たるに恕せられて。上人を座上

にひき申されければ。菩提山の僧正圓信おなじく上座をゆづりたてまつりたまふ。上人兩僧正の上に立て。松殿の俗の一座にておはしましけるにむかひて僧の一座なりけり。道德のいたりいみじきことにも侍るかな。月輪殿をつくられるに。例もなき屋を一字指圖を下されて立させられけり。殿下の御所おほく見候へどもかゝる屋いまだ見候はずと。奉行の三位範季卿申されければ。思食様ありとていそがせられければ。まづつくりたて、けり。何事の御料にかとおもふ程に。はや上人の御やすみどころなりけり。老者にておはしませば。まづこゝにてやすめたてまつりて。のちに御對面あらんためにてぞありける。御歸依のあまり。これまでの御沙汰にをよびければ。たぐひなく有がたき事にぞ。時の人申あへりける。ある時上人月輪殿へ參じたまへるに。殿下御はだしにてありむかはせたまへば。聖覺法印。三

井の大納言僧都覺心。おなじくありむかひ恐々せられけり。上人僧都をあやしげに見たまふ。聖覺あれは大納言僧都御房に候と申さるれば。僧都とりあへず覺心となりの申されき。意は大納言も僧都も世におほければ。實名にてそれとしられたてまつらんとなり。殿下加様にせさせたまへば。まして卿相雲客のありさはがるゝ事ことほりなり。

建久八年上人いさゝかなやみたまふことありけり。殿下ふかく御なげきありける程に。いくほどなくて平愈したまひにけり。上人おなじき九年正月一日より草庵にとぢこもりて別請におもひきたまはざりければ。藤右衛門尉重經を御使として淨土の法門。年來教誡を承るといへども心腑におさめがたし。要文をしるし給はりて。且は面談にならずらへ。且は後の御かたみにもそなへ侍らんと仰られければ。安樂房外記入道を執筆として選擇集を撰せられけるに。第三の章書

寫のとき。予若筆作の器にたらずば。かくのごとくの會座に參ぜざらましと申けるを聞給て。この僧僑慢の心ふかくして惡道に墮しなんとて。これをしりぞけられにけり。其後は眞觀房感西にぞ書せられける。此書を撰進せられて後。同年五月一日上人の夢の中に善導和尚來應して。汝專修念佛を弘通するゆへに。殊更に來れるなりとしめしたまふ。此書冥慮にかなへることしりぬべし。ふかく信受するにたれり。殿下の御歸依あさからずして。上人參たまふごとくに殿下ありむかはせ給へば。公卿殿上人のありさはがるゝ事を。上人うるさき事に思給て。九條殿へまいりたまはざらんために。房籠りとして別請におもひき給はず。いづかたへもありきたまはざりけり。殿下しきりに御なげきありて。たとひ房籠りなりとも。身に違例などの侍らんときは。來給なんやと仰られければ。さやらの御時は子細に及び侍らずと申されければ。せめ

ても請し由されむとは。常に御違例とぞ號せられける。此上は辭し申にところなくして參給けるを見て。門弟正行房心中に。あはれ房籠りとて餘の所へはましまさずして。九條殿へのみ參給こと。しかしながら檀越をへつらひ給とこそ人はそしり申さんずれ。しかるべからぬわざかなと思てねたる夢に。上人汝はわが九條殿へまいる事をそしり思ふなど仰らるゝに。いかてかさる事候べきと申せば。汝はさあもふなり。九條殿と我とは先生に因縁あり。餘人に准ずべからず。宿習かぎりある事をしらずして。誘ずる心をおこさば。定て罪をうべきなりと仰らるゝと見る。さめてのち上人にこの由を語申ければ。さてさぞかし。先生に因縁ある事なりとぞの給ける。御歸依他にことなるほど。まことにたゞ事にあらずぞおぼへ侍る。

殿下ひとへに念佛門に入給にのちは。浮生の榮耀をかくして。往生淨土の御いとなみ他事

なかりき。つゝに建仁二年正月二十八日月輪殿にして御素懷法名をとりける。上人を和尚として圓戒を受持し。御歸依ますふかりけり。

法然上人行狀畫圖第十二

大炊御門左大臣經宗所勞の時。ある人の方便にて。上人を知識に請し申されけり。念佛往生のこと。日比いと沙汰にをよばぬ人にて。左右なく勸進のこと中々あしさまなるべかりければ。上人のはかりごとにて。屏風をへだて。ある僧と。なにとなく法門を仰られけるに。天竺晨旦我朝まで。佛法の傳はれる次第など。ゆゝしく仰られたて。念佛往生の末代相應の法なる事などごまかに宣説し給ふに。左府これをききたまひて。信仰の心をこり給にければ。一すぢにその勸化にしたがひ。歸敬他にことなりき。生年七十一。文治五年二月十三日出家をとけられけり法名金剛覺。爲宣平法皇御名之。命珠之後改法性覺。由在茂申問。命珠之後改法性覺。所勞次第に危急の

間。同二十七日より上人參住して念佛をすゝめ申さる。翌日辰尅臨終正念にして往生をとげ給にけり。上人のこゝろばせ。まことにかしこくぞ侍りける。

花山院左大臣兼雅は。ふかく上人に歸したまひて。鎮西庄園の土貢をわかつて。毎年に施入せられけり。我は院内よりほかは車たてたることなし。しかれども法然上人の庵室に車たてたらんは。なにかくるしかるべきとて。つねにわたり給て。圓頓戒をうけ念佛の法門を談ぜられけり。生年五十四。正治二年七月十四日出家をとげ。同十六日に往生を遂られけるとなむ。

右京權太夫隆信朝臣は。ふかく上人に歸し。餘佛餘行をさしをきて。たゞ彌陀の一尊をあがめ。ひとへに念佛の一行をつとむ。つゝに上人にしたがひて。建仁元年に出家をとげ。法名を戒心と號す。一向專念の外他事なかりけり。生年六十四の春所勞危急にをよぶ。上人きし給

て。住蓮安樂二人の門弟をつかはして知識とせられけり。すてにをはりにのぞむに。二人の僧を左右にをきて。病者と知識と同音に念佛し。來迎の讚をとなへ。端坐合掌して往生をとぐ。元久元年二月廿二日なり。紫雲音樂以下の奇瑞一にあらざ。後に正信房かの墓所に向て念佛したまふに異香なをうせず。日本往生傳にしるし入られけるとなん。

卿二品の弟民部卿範光は。後鳥羽院の寵臣なり。ひとへに上人に歸して稱名の外他事なかりけり。生年五十四の春。承元々年三月十五日に出家をとげ。法名を靜心と號す。病惱危急の由きこしめされければ。しのびて御幸ありけり。後生のこといかゞ思ひさだめ侍ると御たづねありければ。今度の往生決定してさらに疑ふところ候はず。其故は去夜の夢に一人の高僧來る。誰人によしますと問に。我はこれ源空なり。唐土にしては善導となづけ。此土にしては源空と

いふ。此界に来て衆生をみちびく事すてに三箇度なり。今汝に命終の期をしめさんがために來臨す。明後日午の尅その期なるべしとの給と見て夢さめ侍りぬ。すてに冥の告にあづかれり。往生むなしかるべからざる由を存すと申す。是を聞食されてふかく御隨喜ありけり。件の日時すこしもたがはず正念に安住し。稱名相續して往生をとぐ。不思議の事なりけり。

大宮内府實宗公は。歸敬の心ざし他にことにおはせしかば。つねに上人に謁して念佛往生のみちをあきらめ。つねに上人を和尚として建永元年十一月二十七日出家をとげ。專修のつとめをこたりたまはず。上人の入滅をかなしみて初七日の諷誦をさへげられき。生年六十七建曆二年十二月八日。正念たがはず念佛相續して。往生をとげられにけり。

野宮左大臣公繼は。師弟の契あさからざるによりて。興福寺の衆徒。上人の念佛興行をそねみ申

て。奏聞に及し時は。上人ならびに弟子權大納言公繼を遠流せらるべき由申状をさへぐといへども。さらに其心ざしをあらためず。專修のつとめをこたる事なくして。生年五十三嘉祿三年正月廿三日に職を辭し。同じき三十日に種々の奇瑞をあらはして往生をとげ。いまに末代の美談となり給へり。すべて月卿雲客の中に。化導に歸する人あほく侍りしかども。しげきによりてのせず。

法然上人行狀畫圖第十三

聖護院無品親王靜惠御違例の時。醫療術をつくさるといへども。しるしなかりければ。門徒の上總宰相僧正行舜。大貳僧正公胤以下の人々。信讀の般若經を轉讀して。祈禱をいたさる。この人々はみな。佛家の鸞鳳。僧中の龍象なりき。しかれどもすてにあやうくおはしましければ。この人々をさしをかれて上人を招請せられ

しに。御使二度まではかたく辭退してまゐりたまはず。第三度の御使に。宰相律師實昌と云人來臨して。理をまげて一度まいりたまひて。念佛の事申さかせさせ給へとて。引立る様にせしかば。まことに往生しますまへき人にててもや御坐すらんとて。やがて律師の車にのり具して。まいりたまひぬ。親王御對面ありて。いかゞしてこのたび生死をはなれ侍るべき。後生たすけ給へと仰られければ。上人臨終の行儀を談じ申され。彌陀本願のちもむきをのべ給ふに。親王感涙しきりにくだりたまひ。歸敬のたなごゝろをぞ合せられける。上人はやがてかへり給にければ。次の日御往生ありけるに。最後に念佛一萬五千遍申させ給て。念佛とともに。御息とまゝり給にけり。諸人隨喜のたなごゝろを合せ。上人の徳をぞほめ申ける。實昌律師。後に御往生のやうを上人に語申されければ。上人もよろこび申されけり。

延曆寺東塔。竹林房靜嚴法印。吉水の禪房にいたりて。いかゞして此たび生死をはなれ候べきとの給ければ。源空こそ尋申たく侍れと答申されけるに。法印又決擇門はさる事にて。出離の道にをきては。智徳いたり道心ふかくましませば。定めて安立の義候らんと申さるれば。源空は。彌陀の本願に乗じて。極樂の往生を期する外は。またく知ことなしと。法印申さるゝやう。所存もかくのごとし。美言をうけたまはりて。愚案をかたくせんがために尋申す所なり。但妄念のきをひおこり侍るをばいかゞし候べきと。上人の給はく。是煩惱の所爲なれば。凡夫の力及べからず。たゞ本願を湧て名號を唱ふれば。佛の願力に乗じて往生をうと知れりと。法印信心決定し。疑念たちまちにとけぬ。往生さらんうたがひなしとて。退出し給けり。上人清水寺にして。説戒のつゐてに。罪惡の凡夫なれども。本願をたのみて念佛すれば。往生

うたがひなきむね。ねんごろにすゝめたまひければ。寺家の大勸進沙彌印藏。ふかく本願を信じ。ひとへに念佛に歸す。是によりて文治四年五月十五日。瀧山寺を道場として。不斷常行念佛三昧をはじめしに。能信といへる僧。香爐をとりて。開白發願して行道するに。願主印藏。寺僧等。ならびに比丘比丘尼その數をしらず結縁しけり。その行いまに退轉なし。阿彌陀堂の常行念佛と號する是也。抑清水寺の靈像は。極樂淨土には一生補處の薩埵。娑婆穢國には施無畏者の大士なり。仁和寺入道親王の御夢想に。觀音みづからのたまはく。清水寺の瀧は過去にもこれありき。現在にもこれあり。未來にも又これあるべし。是則大日如來の鍔字の智水なりとて。一首を詠じたまふ。

清水の瀧へまいはをのつから

現世安穩後生極樂

としめし給ければ。大威儀師俊縁を御使として。

寺家へ仰送られけるとかや。まことにそのたのみ深かるべきものなり。上人の勸化によりて。この砌にして不斷念佛をはじめけるも。よしある事にや侍らん。
南都興福寺の古年童は。上人清水寺にて説戒の時。念佛をすゝめ給を聞て。歸敬渴仰のあまり。やがて發心出家して。松苑寺のほとりに。菴を結て念佛しけるが。つゝに靈瑞を感じ。高聲念佛して往生をとぐ。能信といふ僧。如法經のかうぞをうへながら。往生人に縁を結ばんために。棺のさきの火の役をつとめてかへるに。異香衣のうへに薰ず。人々奇特の思ひをなし。信心をます者おほかりけり。
建仁二年三月十六日。上人語てのたまはく。慈眼房は受戒の師範なるうへ。同宿して衣食の二事一向この聖の扶持なりき。然れども法門をこゝろく習たる事はなし。法門の義は水火のごとく相違して。つねに論談せしなり。この聖と

源空とは。南北に坊をならべて住したりしに。ある時聖の居たまへる坊のまへをすぐるに。聖見たまひて。あの御房やとよび給へば。とまりて縁に居て候と申に。大乘の實智をおこさて淨土に往生してんやとの給に。往生し候ひなんと答申とき。なにさは見えたるぞとのたまふ間。往生要集に見えて候と申に。往生要集の中をも見給たるぞとの給間。いざたれか中を見ざるやらんと申たれば。聖腹立て。枕をもて投打にうち給へば。やはらにげて我坊の方へまかりたれば。をふておはして。はさきの柄をもて肩をうちなどし給ひき。又後に文をもておはして。これはいかにいふことばとのたまふ。心の中に無益なり。事の出くれば。いまは物申さじと誓をよこして。いざいか候らんと申たれば。又腹立て。それらが様なる人を同宿したるは。か様の事をもいひ合せん料にてこそあれとの給き。か様にしてつねにいさかひはせしかども。

最後には覺悟房といひし聖に二字をかゝせて。

かへりて弟子に成て。坊舎聖教のゆづり文をも。もとは讓渡と書れたりしをとり返して。進上と書なをしてたびて。生々世々にたがひに師弟とならん料に申ぞとの給き。眞言の師範なりし。相摸阿闍梨重宴も。最後には受戒の弟子になりて戒をうけたまひき。正しく三部の灌頂をさづけたまひし。丹後の迎攝房も。かへりて弟子となりて。顯宗の法門。ならびに淨土の法門をば源空に習て。つゝに往生をとげに。當時の院主僧都圓長は。重宴阿闍梨の眞言の弟子なれば。源空には同朋なり。しかるに。かの圓長眞言の教相を重宴阿闍梨に問ければ。心にはおぼゆれども。我は非學生にて云ひらかぬぞとよ。法然房に問ていはせて申さんと重宴のたまひければ。圓長も後には弟子に成て物習はんと云て。やがて受戒して師弟のふるまひにてありき。最初の師範なりし美作の觀覺得業も弟子に

なりて源空を戒師として受戒し給き。おほくの師範みな弟子と成給し中にも。當時の碩學共の慈眼房の受戒の弟子ならぬはなきに。その師の慈眼房の。かへりて弟子に成給たる事は不思議の事とこそおぼゆれなど。さまざまかたり給へば。さく人皆隨喜し。不思議の事なりとぞ申あひける。

左衛門志藤原宗貞。ならびに妻室惟宗の氏女。夫婦心を一にして堂舎建立の發願をなし。雲居寺の北東の頬にその地をしめ。建仁元年四月十九日に上棟し。同二年春の比其功すてに終りけり。本尊は阿彌陀の像。脇士は觀音地藏を安置したてまつる。同年の秋のころ。上人吉水の御房より。雲居寺の勝應彌陀院へ百日參詣し給し時。願主宗貞門前に蹲居して。堂舎建立の旨趣をのべ。御供養あるべき由を望申ければ。上人堂内に入給て。佛像安置の體を御覽せられ。この堂は源空が供養すべき堂にあらずとて出られ

にけり。願主その心を得ずして周章するところに。或人申て云。上人は勢至菩薩の垂跡にましますと云こと人口あまねし。しかるに脇士に勢至菩薩のましまさるること。上人の御心に違する歟と申ければ。いそぎ又勢至菩薩を造立し。本の地藏をば異所に渡したてまつり。その跡に勢至菩薩を居たてまつりて。後上人又雲居寺御參詣の時。建仁二年八月晦日。かさねて案内を申處に。相違なく供養をとげられにけり。別の御啓白なし。たゞ念佛千遍を唱へたまひ。やがて不斷念佛を始行せられ。寺號を引攝寺とつけらる。この堂いまにあり。勢至菩薩のうしろにすへたてまつる地藏これなり。

法然上人行狀畫圖第十四

天台座主權僧正顯真。いまだ大僧都にておはせしとき。承安三年生年四十三にして。官職を辭し菩提を求て。大原に籠居。春秋四箇年に及と

ころに。安元二年七月八日建春門院崩御の間。かの御菩提の爲に。法住寺に新法華堂を立られ。七々の御忌を迎へて。同八月廿五日に行法をはじめられしに。その先達に。叡山法花堂の一和尚位。正覺房眞惠をめされしかば。勅定にしががひし時。大原の僧都かの關をのぞみて。聊宿願の事侍り。しばらく入衆あるべからざるよし。堂中にふれをくりて後。同九月一日子の尅に登山し。則參堂して一衆に列し。蔭次にまかせて。二床の二和尚に著し。丑の尅一時つとめられて後。一床の一和尚につきたまひぬ。其後は禪光房顯明を代官として。三大師天台傳の御忌日。以下大小の課役等みな新入のごとく勤仕せられぬ。又四季懺法の初夜の時には。かならず參堂し給ひき。是則出離の道。たやすからざる事をなげきて。名利の學道をのがれ籠居すといへども。決定出離の直路。思案いまだ一決せず。晝夜に此事をのみなげく處に。十二禪衆の

關を聞とき。かの半行半坐の行法は。天台大師御筆の法華經を本尊として。傳教大師弘仁三年七月に草創したまへる要行なり。これ生死解脱の直路なるべしとおもひより給て。十二禪衆に列し給にけり。毎日毎時のつとめに。懺法一卷をくはへて修する事は。かの僧都はじめをかれしかば。一衆同心してその行いまにをこたらず。

其後八箇年の歳曆をすぎて。壽永二年九月に。日吉の御幸の時。座主明雲の賞をゆづりて。法印に叙せらるといへども。かたく松門をとぢ。ひそかに蓬屋に居してことにしたがはず。たゞ生死の出がたき事をのみなげく。同じ法流をくめるよしみをもて。つねに永辨法印と。出離の道をかたりあはせ給に。かくのごときの事は。法然上人に御尋あるべき由を。永辨申けるにつきて。相摸房と云者を使者として。登山の便宜にかならず音信せしめ給へ。申承るべき事侍る

よし。仰られたりければ。上人坂本へ渡り給てかくと申されけり。法印おはしましあひて對面し。このたびいかゞして。生死をはなれ侍るべきとの給に。上人いかにも御はからひにはすぐべからずと。法印申されけるは。先達にましませば。定めて思定め給つる旨あるらん。しめしたまへとなりとの給へば。上人自身の爲には。いさゝか思定めたる旨候。たゞはやく極樂の往生をとげ候べしと申されければ。法印順次の往生とげがたきゆへにこの尋をいたす。いかゞしてこのたびたやすく往生をとぐべきや。との給ふ時。上人答たまはく。成佛はかたしといへども往生は得やすし。道綽。善導の心によれば。佛の願力を強縁として。亂想の凡夫。淨土に往生すと。其後たがひに言説なくして。上人かへり給て後。法印の給けるは。法然房は智慧深遠なれども。聊偏執の失ありと。上人この事をかへりきし給て。我知ざる事にはかならず疑心をあこ

す事なり。との給けるを。法印又かへりきし給て。まことに然也。われ顯密の教文に稽古をつとむといへども。しかしながら名利の爲にして。淨土を心ざらざるゆへに。道綽。善導の釋義をかゞはず。法然房にあらずば。たれかかくのごとくのことばをいだすべきやとて。このことばにはびて。百日の間大原に籠居して。淨土の章疏を披閱したまひてのち。すでに淨土の法門をこそ見立侍にたれ。來臨して談せしめ給へと仰られたりければ。文治二年秋のころ。上人大原へ渡り給ふ。東大寺の大勸進俊乘房重源。いまだ出離の道をおもひ定めざりけるを哀み給て。この由を告仰られたりければ。弟子三十餘人を相具して大原にむかふ。勝林院の丈六堂に會合す。上人の方には。重源以下の弟子どもそのかずあつまれり。法印の方には。門徒以下の碩學。ならびに大原の聖達坐しつらなれり。山門の衆徒をはじめて。見聞の人おほかりけり。論談

往復する事。一日一夜なり。上人。法相。三論。華嚴。法華。眞言。佛心等の諸宗にわたりて。凡夫の初心より佛果の極位にいたるまで。修行の方軌。得度の相貌つぶさにのべ給て。是等の法みな義理ふかく利益すぐれたり。機法相應せば得脱くびすを廻らすべからず。たゞし源空ごときの頑愚のたぐひは。更にその器にあらざるゆへに。さとりがたくまどひやすし。しかる間源空發心の後。聖道門の諸宗につきて。ひろく出離の道をとぶらふに。かれもかたくこれもかたし。是則世くだり人をろかにして。機教あひそむくゆへなり。しかるを善導の釋義。三部の妙典のこゝろ。彌陀の願力を強縁とするゆへに。有智無智を論ぜず。持戒破戒をえらばず。無漏無生の國にひまれて。ながく不退を證する事。たゞこれ淨土の一門。念佛の一行なりとて。法藏比丘の因行より。彌陀如來の果徳にいたるまで。理をさしめ詞をつくしをはりて。た

ゞこれ涯分の自證をのぶるばかりなり。またく上機の解行をさまたげんとにはあらず。との給ければ。法印よりはじめて滿座の衆。みな信伏しにけり。かたちを見れば源空上人。まことに彌陀如來の應現かどぞ感歎しあへりける。法印香爐をとり高聲念佛をはじめ行道したまふに。大衆みな同音に。念佛を修する事三日三夜。こゑ山谷にみち。ひゞき林野をうごかす。信をおこし縁を結ぶ人おほかりき。法印道心うちにもよほして。出離の要路をもとめられけるに。上人の諷諫を得給て後は。たち所に餘行を指置て。一向專修の行者となり給ければ。自身の出離ひとへに念佛往生を期し給のみにあらず。あまさへ又他人をすゝめられき。姨の禪尼をすゝめんために。念佛勸進の消息をつかはさる。世間に流布して。顯眞の消息と號するこれなり。その詞云。われ佛を念ずれば。佛我を照し給ふ。光明我をてらせば。罪障

きえずといふことなし。藥王樹にふるものは。毒なれどもくすりとなる。光をかうぶらんもの。たれか罪障ののこりあらん。かくばかりやすき行を。無數劫のあひだ思よらざりけるかなし。時過たる智惠禪定を修せんよりも。利益現在なる光明名號を稱念すべし。一行すなはち一切行なれば。念佛の一行に諸行ことごとくをさまり。一念すなはち無量念なれば。一稱彌陀なにの不足かあらん。法界宮にいらんとおもはゞ。極樂の東門よりいれ。法身體を證せんとおもはゞ。彌陀の名號をとなふべし。道綽は講説をすて、一向に念佛になり。善導は雜行をさらいて專修をすゝむ。占畠の林に入ぬれば餘香をかかず。淨名の室に入ぬれば。功德の香をのみかぎ。この山にいらん人は。たゞ念佛の香をばはや。取證。文治二年十二月廿九日護摩堂尼御前へと云。法印專修の身となり。念佛を行と

し給し事。この消息に明かなり。又十二人の衆を定めをきて。文治三年正月十五日より。勝林院に不斷念佛をはじめをこなはれしに。法印は十二人の隨一にて。戌尅をぞつとめ給ける。開白の夜は。十二人皆參じ行道して。同音の念佛を修するに。毘沙門天王列に立給へりけるを。法印のあたり拜したまひて。良忍上人の融通念佛には。鞍馬寺の毘沙門天王くみしたまひ。あまさへ諸天善神をすゝめ入給ひけるとも思合せられ。いよゝ信心をまし貴くおぼへければ。念佛守護の爲に。毘沙門天王を當室のうち。安置せられけり。法印一の大願をたて、いはく。この寺に五坊をたて、一向稱名を相續して。餘行をまじへつとめじと。その願ひなしからず。つゝに文治三年十月にはたされにけり。池上の阿闍梨皇慶の舊跡。乙護法守護の靈地に五坊をたて。楞嚴院安樂の谷をうつして新安樂と號し。性智房。鏡智

房。妙智房。佛智房。勝智房とぞつけられける。その行法いまに退轉せずとなん。かの時大佛の上人俊乘房。又一の意樂をおこして。我國の道俗。炎魔王宮にひざまづきて。名字を問れんとき。佛號を唱へしめんために。阿彌陀佛名をつくべしとて。みづから南無阿彌陀佛とぞ號せられける。これ我朝の阿彌陀佛名のはじめ也。其後三千の衆徒。をして舉し申によりて。文治六年三月七日。天台座主に補せらるといへども。かたく辭し申給しを。勅使大原へひかひて。宣命をくだして座主職をさづけける。つゝに召出されて。同五月廿四日最勝講の證義をつとめ。同二十八日權僧正に拜任す。治山三箇年の間。内論義二箇度。寂光大師の御廟の番論義。傳教大師の御廟淨土院の番論義など。取をこなはれ。もはら吾山の佛法のたえたるをつぎ。すたれたるをおこされしかども。かたはらには。なを稱名の行業をこたらずして。法華堂

の初夜の行法には。高聲念佛千遍をくはへ修せられき。その行いまに退轉なし。日來の腫物のいたはり。にはかに増氣して。淨土院の番論義にして。正念たがはず念佛相續し往生の素懷をとげ給き。遺言の旨ありければ。すなはち大原にをくりたてまつりぬ。近古の高僧。山門の英傑なり。しかしながら上人の訓導によりて出要をおもひ定められき。心あらん人。たれかそのあとをこひねがはざらん。僧正つねにのたまひけるは。一向專念の身となりて。顯密の行業をさしをさしはじめは。よに心ぼそかりしなりとぞ。申されける。

法然上人行狀畫圖第十五

慈鎮和尚正慈圓は。法性寺殿忠通の御息。青蓮院の覺快法親王第七宮の附弟。山門の樞鍵。祕教の棟梁として。三昧の一流。祕決をつくし奥義を

きはめ。山務四箇度興隆ひかしてこえ。名望世にすぐれたまへり。しかれども宿習の開發し給けるにや。しきりに世間の榮耀をいとひ。ふかく出離の要道をたづね。隱遁の志あさからずして。より／＼籠居の暇を申されけるに。あへて勅許なかりければ。その本意をとげられずといへども。ある時しばらく西山の善峯寺に籠居して。心閑につとめをこなはれるに。いつしか勅使ひまなくして。つゝに召出され給にけり。その後は隱居のすまひもかなはざりければ。つねに上人に御對面ありて。底下の凡夫開悟得達の要義を談ぜられけるに。上人諸宗の大綱をあげて一々の義理をつくさるゝに。皆是上代上機のためのをしへにして末代下根のたぐひをよびがたし。淨土の宗旨。稱名の本願のみぞ。苦海の船師。愛河の橋梁にて。愚鈍下智の當機にあひかなへるとて。聖道淨土の奧義をのべられければ。和尚隨喜の御心ねんごろにして。一乘圓頓の

戒をうけ。散心稱名の行をぞ崇重せられける。本願の旨趣をとぶらひ。極樂の往生をのぞみましくける餘にや。建仁元年九月二十二日より七箇日の間。日吉聖眞子の拜殿にして。實圓寶全仁慶良尋已下二十餘人の門弟をとまひて。且は本地彌陀の内證に資し。且は垂跡明神の外用をかざらんがために。慈覺大師の古風をしたひ。西方懺法をぞをこなはれる。六時の時ことに高聲念佛千遍までとなへ給しに。偏執我慢の大衆。定めて違亂をなす事やあらんと人思ひあへりけるに。七箇日の間。そこばくの大衆羣集すといへども。皆歸敬の掌を合せて。誹謗のくちびるをうごかさず。信心無二の前には。魔障便を得ざるにや。見聞の諸人不思議の思をなし。たとまらずといふ事なかりけり。四天王寺の別當に補任せられし時は。大僧正行慶。寺務の時顛倒して後。年久しくなりにし繪堂を新造して。漢家本朝の往生傳をえらび。尊智法

眼におほせて。九品往生の人を畫圖にあらはし。入道相國賴實以下。九人の秀才をすゝめて和歌を詠じて。九品面々の行狀を稱嘆し。菅宰相于時大爲長卿をして。四韻の周詩を賦せしめ。權大納言教家卿。色紙形をぞ清書せられける。所謂。

- 上品上生 智覺禪師新修住
- 九品蓮臺其最上 杭州智覺獨當機
- 詞花永馥神接賦 宿鳥不驚寂定衣
- 直詣西方生死斷 不經陰府古今稀
- 炎王常拜畫圖像 蘇息高僧面見歸
- 入道大相國賴實公
- 九のしなみなき花のうてなにも
- ころものうらにとりやすむらん
- 上品中生 尼善慧戒珠集
- 賢劫如來放大光 善哉善慧往西方
- 六旬有限新泉路 三昧無人舊道場
- 池上蓮粧生八葉 俗間花色耻餘香

附錄 法然上人行狀畫圖第十五

眼前兼得佛靈告

九品妙臺第二望

前攝政殿下道家公

ふるさとにのこる蓮はあるしにて
やとる一よに花をひらくる

- 上品下生 侍從所監藤原忠季後拾遺
- 我朝朝請大夫士 二世清祈一念深
- 勁節先彰同雪竹 善根高挺屬雲林
- 三年十月黃昏淚 上品下生金刺心
- 夢裏乘蓮西去速 客塵自是不能侵
- 權大納言基家

みしゆめのやとをうつゝにさとりきて

きのふの花につゆをひらくる

- 中品上生 大原沙彌戒珠集
- 大原貧侶臨河畔 欲畫彌陀功獨遲
- 尊像未成沙暖處 浮生易滅雨來時
- 夜夢縱告出離道 老淚不堪憶子悲
- 中品上生今所示 至子舊友各相思
- 前太政大臣公經公

夕立に水もまさこの河なみや

はちすのなかのうへのしらつゆ

中品中生 少將義孝保胤往生傳

天延之比無常理 子葉落風槐體家

故苑露消空暗涙 荒原煙盡只春霞

羽林昔有雙棲鳥 夢路今攀一詠花

極樂界中詩上趣 品生所示足相加

右大將實氏

しのはすよなに古里の梅か香も

かさなる中の花のやとりに

中品下生 沙門智縁戒珠傳

昔在人間雖放逸 歸眞季積智縁功

鬢花落飜罷煉鶴 羽獵發心禮世雄

晝夜三時三品觀 桑榆一幕一期終

九蓮第六託生趣 述盡向西結大夢

正三位家隆

すてやらて子を思ふ鹿のしるへより

かりの山路はいとひいてにき

下品上生 釋法敬戒珠傳

當初法敬有遺約 身後不忘靈告專

音樂聞天遷化曉 光明入夢十三年

善哉一子出家力 遂是雙親得道緣

昔寺維那修善積 宜昇下品上生蓮

從二位民部卿定家

立歸るゆめのたうちををしへをく

うてなの花のすゑのうはつゆ

下品中生 覺眞阿闍梨續本朝往生傳

尋鞍馬寺久棲遲 祈請炎王有所思

陽茂闍梨從入夢 西方覺藥不生疑

九生蓮位上中下 萬部花文讀誦持

以第八門當此品 來緣定熟命終時

入道從三位保季

をしへいる道はかすかの里の月

さとれば春のひかりなりけり

下品下生 釋慧進新修往生傳

釋慧進貧無所畜 檀施之物誰應侵

欲飛鵝眼空勞眼 不憶鼻心還有心
百部花文今已滿 八旬榆景遂西沈
善哉下品下生位 從在世間素意深

正四位下範宗朝臣

このしなねかふ蓮のすゑのいとを
みたさてかへるよるのしらなみ

色紙形記銘曰

貞應三年甲申始自去冬三春孟夏之間。以繪師
法眼尊智守本樣依傳文圖繪既訖。今於西
面更畫作九品往生之人。殊勸進一乘淨土之
業。表裏共不交他筆。尊智圖之。以詩歌形
其心。詩句九品同令菅大夫爲長卿作之。和歌
丞相以下。廣勸九人各詠一首。復當南北裏
同畫四天像。此堂大僧正行慶寺務之間顛倒之
後。以聖靈院禮堂東廂爲其所。今新建立于
舊跡。彰興隆之本意也。

別當前大僧正法印大和尚位慈圓記之
これ偏に。ひろく諸人の心をすゝめて欣求の思

をばげまさんためなり。まことに此行狀を見
て。誰の人か穢惡充滿のさかひをいとひ。淨土
不退の砌をこひねがはざらん。自證の得脱のみ
にあらず。化他の御志ふかゝりける。ありがた
くたとも侍るかな。日吉の社に百日參籠し給
て。後生菩提を祈申されける念誦のひまに。百
首の歌を詠じ給けるおくに。

我たのひ七の社のゆふたすさ

かけても六の道にかへすな

人をもみるも我身をみるもこはいかに

なむあみたふつ南無阿彌陀佛

とぞ書付給ける。往生ののぞみふかくして。欣

求の心をはげまされけるに。稱名の薰修日あさ

く。光陰の運轉時うつりぬとやおぼしめされけ

ん。ある時詠じ給けるは。

極樂にまたわか心ゆきつかす

ひつしのあゆみしはしとまれ

浮生を軽くし思を淨利にかけ給事。ひとへに上

人諷諫のゆへなりければ。歸敬他にことにして。上人遷化の時は哀傷にたへず。最初の引接を待よし。中陰の作善に諷誦文をさしげられ。報恩謝徳の儀ねんごろなりけり。されば御臨終の後。或人の夢に示されけるは。さしも苦勞せし顯密の稽古は。物の用にもたえず。時々せし空觀と稱名念佛ばかりぞ後世の資糧とはなりたるとぞ仰られける。

月輪の禪閣の御息。妙香院の僧正良快は。慈鎮和尚の附法として。大師正嫡の跡をうけ。顯密兼學の宗匠なりき。しかれども宿縁の内にもよほされけるにや。上人の勸化に歸したまひ。厭離穢土の思ひふかく。欣求淨土の願ねんごろなりしかば。偏に彌陀の本願を信じて念佛を行じ給ひ。淺近念佛抄を記して。無智の輩をすゝめらる。彼序のことばには。夫以本覺真如の月。無明戲論の雲にかくれ。常住佛性の蓮。生死妄染の泥にうつもれしよりこのかた。或は燒熱大燒熱

の炎に咽びて。多百千劫塵數の諸佛の出世をもすぎ。或は紅蓮大紅蓮の氷にとぢられて。無量億生恆沙の如來の化導にももれたり。或は餓鬼城に入て。一萬五千歳飢饉のうれへ忍びがたく。或は畜生道に墮して。三十四億類殘害のくるしみいくそばくぞ。たま／＼人中の生をうくといへども。餘州にありて佛法をさかず。まれに天上の報を感ずといへども。快樂にほこりて淨業を修する事なし。而今南瞻部洲佛法流布の國にひまれて。西方淨刹欣求指南の教を得たり。このたび出離の直道に赴ずば。いづれの時にか菩提の正路に向べき。就中一生涯のさだまりなき事夢のごとし。幻のごとし。五盛陰の待ことある。且とやせん。暮とやせん。しかるに。煩惱内にもよほし。惡縁外にひきて。このことはりにおどろく輩すくなく。その勤をいたすたぐひまれなり。願死またくわかきによらず。重病かならずしも老を待ことなし。誰かさだめん今日と

の日にあらずとは。争しらん我身その類にあらずとは。無常のつげ忽にきたり。有爲のすがたながかくれぬれば。一善のたくはへもなきにによりて。はやく三途の底に墮しぬ。過去漫々の流轉すてにかくのごとし。未來永々の輪廻又然べし。いそぎて出離の要術を求めよ。更に生死の妄報に著することなかれ。爰に彌陀の念佛は。諸教所讚多在彌陀。大恩教主すてにこの佛を稱讚したまふ。彌陀一教利物偏増。末代の我等最かの國を欣べし。誠是末代相應の要法。凡夫易行の直道なる者歟。このゆへに初心の行者のために念佛の簡要をしるして。分て七段として。もて九品を期す。取證とぞかゝれたる。

法然上人行狀畫圖第十六

高野の僧都明遍は。少納言通憲の子なり。長門の法印敏覺が嫡弟として。三論の奥旨をさはめ。才名世にゆるされたりしかども。名利をい

とふ心ふかくして。本寺のまじはりをしてのまざ。つゝに三十七のとし交衆をのがれ。公請を辭し。光明山に居をしめて。諸行をすてず。萬善をいとはず。ひろく出離の要路をたづね。あまねく顯密の勤行をいたされけり。時の人明遍は當時無雙の碩學なり。轉任遲々のゆへに籠居する歟のよし。をの／＼しみあひければ。生年四十五の時。小僧都を宣下せられけれども。かたく辭して勅喚にしたがはず。隱遁のおもひいよ／＼切にして。建久六年五十四歳にてながく光明山をすて。跡を高野山にかくし。出離のつとめます／＼ねんごろなり。有智の道心者。ちかくはこの人なり。僧都。上人所造の選擇集を披覽して。この書のおもむき。いさ／＼か偏執なるところありけりとおもひて。寝られたる夜の夢に。天王寺の西門に病者かざもしらずなやみふせるを。一人の聖の鉢にかゆをいれて。匙をもちて病人の口ごとに

いる、ありけり。誰人にかあらんとふに。かたはらなる人こたへて。法然上人なりといふと見てさめぬ。僧都おもはく。われ選擇集を偏執の文なりと思つるを。いましめらるゝゆめなるべし。この上人は機をしり時をしりたる聖にておはしけり。病人の様は。はじめには。柑子。橘。梨子。柿などのたぐひを食すれども。のちには。それもとまりぬれば。わづかにおもゆをもちて。のどをうるほすばかりに。命をさへへたり。かくこの書に一向に念佛をすめられたるこれにたがはず。五濁濫漫の世には。佛法の利益次第に減ず。このころはあまりに代くだりて。我等がありさま。たとへば重病のものごとし。三論。法相の柑子。橘もくはれず。眞言。止觀の梨子。柿もくはれねば。念佛三昧のおもゆにて生死をいづべきなりけりとて。忽に顯密の諸行をさしをきて。専修念佛の門にいり。その名を空阿彌陀佛とぞ號せられる。とりわき。天王寺

と見られけるも。由緒なきにあらず。この寺は極樂補處の觀音大士。聖德太子とむまれて。佛法をこの國にひろめ給し最初の伽藍なり。欽明天皇の御ために。七日の念佛をつとめたまひ。命長七年二月十三日。黒木の臣を御使として。善光寺の如來へ御書を進ぜらる。その御ことばには。名號七日稱揚已。以斯爲報。廣大恩。仰願本師彌陀尊。助我濟度。常護念と侍けるに。如來の御返報には。一日稱揚無恩留。何況七日大功德。我待衆生。心無間。汝能濟度豈不護。とぞあそばされける。御表書には。上宮救世大聖の御返事と侍けり。この御消息にこそ。この國は念佛三昧の有縁なる事もあらはれにけれ。かの鳥居の額にも。釋迦如來轉法輪所。當極樂土東門中心とぞかゝれて侍る。わが國に生をうけん人は。尤この念佛門に歸すべきものなり。上人天王寺におはしけるとき。僧都善光寺參詣の事ありけるが。たづね參せられて。まづ使にて

案内し給ふに。上人客殿に出まふけて。これへと仰らる。僧都さしりて。いまだ居なほらぬほどに。このたびいかゞして。生死をはなれ候べきと申されければ。南無阿彌陀佛と唱へて往生をとぐるにはしかずとこそ存候へと仰られければ。僧都申さるゝやう。たれもさは見をよびて侍り。たゞし念佛のとき心の散亂し。妄念のおこり候をば。いかゞし候べきと。上人のたまはく。欲界の散地に生をうくるもの。心あに散亂せざらんや。煩惱具足の凡夫いかでか妄念をとむべき。その條は源空もちからをよび候はず。心はちりみだれ。妄念はきをひおこるといへども。口に名號をとなへば。彌陀の願力に乗じて。決定往生すべしと申されければ。これうけ給候はんために。まいりて候つるなりとて。僧都やがて退出し給にければ。初對面の人。一言も世間の禮儀の詞なくして退出せられぬることよとて。人々たうとびあひけり。扱上人うち

へいり給て。心をしづめ。妄念おこさずして。念佛せんとおもはんは。むまれつきの目鼻ととりはなちて。念佛せんとおもはんがごとし。あなこゝしとぞ仰られける。その後は。僧都ふかく上人に歸し。専修の行をこたりなかりけるが。念珠をはやくくりて。數遍おほき事をば。不實のきはまりなりとて。おほきに不受せられけるに。あるとき修行者一人きたりて。毎日の念佛は。いかほどをか所作とさだむべく候らんとたづね申けるに。御房はいくら程を申さるゝぞと。かへしとはれければ。毎日百萬遍を申よしを答ふるに。例の不實のものよとて。返答にも及ばずして。うちへいられにければ。修行者も歸にけり。僧都ちとまどろみ給へる夢に。貴氣なる僧きたりてつづけての給はく。毎日百萬遍の行者を。いひさまたげぬる事はなはだしかるべからずとて。もてのほかなる氣色にて。われはこれ善導なりと仰らると

見てもどろきぬ。遍身にあせながれ。胸さはぎて。心のときどころなきまで。かなしくおぼえて。時尅いくほどをへざりければ。かの修行者をよびかへして。このよしをかたり。前非をくゐんために。人を方々にわかちつかはしてをばせられ。高野中をたづねさせらるゝに。つゐにゆきがたをしらすなりにけり。僧都申されけるは。日來はやぐりの數遍を不受する事。佛意にそむけるゆへに。化人のつけしめされけるなり。實の修行者にはあらざりけりとて。其後のみづからも。つねに百萬遍の數遍をせられける。僧都の夢想もちてこれを思に。上人數遍をすゝめ給へる事。あに和尚の尊意にかなはざらんや。たゞあふきて信をとるべし。をろかなる心もちて。これをあざける事なかれ。僧都ひとへに上人の勸化を仰信し。ふた心なかりければ。上人の滅後には。かの遺骨を一期のあひだ頸にかけて。のちには高野の大將法印貞曉

右幕相傳せられけり。龍山三十年のあひだ。朝には自誓戒舍利講。夕には臨終の行儀を修し。惣じて六時の同音念佛。日々夜々にをこたる事なし。他のためには。人のぞみにしたがつて。顯密の法門を談ぜられけれども。自行には一向稱名の外他事をまじへず。長齋持戒にして。草庵をいづることなし。練行としふりて薰修日あらたなり。さても穢土の縁つきて。西土の望ちかづきけるにや。貞應三年四月上旬のころより。いさゝか風病にかされ。寢食例に違しければ。門弟等をのく結番して看病をいたし。念佛のこえやむ時なし。病にしづむといへども。法門の談議日ごろにかはらず。日をふるまゝに。經論の明文を誦じて。念佛いよ／＼強盛なり。つゐに六月十六日子尅頭北面西にして。念佛相續し。禪定に入がごとく。いきたえ給にけり。生年八十三なり。見る人隨喜の感涙をながし。さく人在世の徳行をぞしたひける。

法然上人行狀畫圖第十七

安居院の法印聖覺は。入道少納言通憲の孫子。法印大僧都澄憲の眞弟なり。叡山竹林房の法印靜嚴を師とす。論說二道をかねて。智辯人にすぐれたりき。しかるに宿習のいたりにやありけん。ふかく上人の化導に歸して。淨土往生の口決をうく。大和前司親盛入道。御往生の後は疑をたれの人にか決すべきと。上人にとひたてまつりけるに。聖覺法印わが心をしれりとの給へり。淨土の法門にをきて所存をのこされざる事しりぬべし。されば法印一卷の書を製作して。ひろく念佛をすゝむ。世間に流布して唯信鈔と號するこれなり。かの書に云。罪ふかくばいよ／＼極樂をねがふべし。不簡破戒罪根深といへり。善すぐれてはます／＼彌陀を念ずべし。三念五念佛來迎といへり。むなしく身を卑下し心を怯弱にして。佛智不思議智を疑事なかれ。た

とへば人たかき岸のしたにありて。のぼる事あたはざらんに。ちからつよき人岸の上に有て綱をふるして。この綱にとりつかせて。われ岸の上に引登せんといはんに。ひく人のちからをうたがひ。綱のよはからん事をあやふみて。手をさめてこれをとらずば。更に岸の上ののぼるべからず。偏にその言にしたがひて。掌をのべてこれをとらんには。即のぼる事をうべし。佛力をうたがひ。願力をたのまざる人は。菩提の岸にのぼる事かたし。只信心の手をのべて。誓願の綱をとるべし。電光朝露の命。芭蕉泡沫の身。わづかに一世の勤修をもて忽に五趣の古郷をはなれんとす。豈ゆるく諸行を兼んや。諸佛菩薩の結縁は。隨心供佛の朝を期すべし。大小經典の義理は。百法明門の暮を待べし。已上略抄とぞ侍める。この法印ふかく上人の勸化を信敬のあひだ。處々にして説法のためには。彌陀の本願を讚歎し。念佛の功能をほめ申されける

を。上人きゝ給て。これひとへに善導の御方便。機感純熟の折節也。然べき名僧專修念佛の義を信じて。所々にして講釋せば。念佛の弘通何事かこれにしかんやと。悦仰られて。法印のもとへ申つかはされけるは。法華經の中には定まりて。阿彌陀經を副供養せらるゝなれば。いかなる所にて。譏嫌さまであしからざらん所にては。阿彌陀經につきて四十八願の釋を釋しのべられ候べきよし。くはしく授られけるとな

元久二年八月に上人瘡病をわづらひ給事ありけり。月輪殿きこしめしおどろきて。醫師をめされ種々の療方をつくさるといへども。治術かなはざりしかば。とりわき冥助をあふがれ。御祈請あらむために。詫摩の法眼證賀におほせて。善導和尚の眞影を圖繪せられ。後京極殿その銘をかゝせ給て。安居院の法印聖覺于時に。御導師參勤すべきよし仰らるゝに。法印申されけ

るは。聖覺も瘡病の事候が。明日はおこり日に候へども。貴命のがれがたさうへ。師範の恩を報ぜんために參勤すべく候。たゞし早且に御佛事をはじめらるべしとて。翌日拂曉に小松殿へ參じて。辰時より説法をはじめて。未尅に結願す。その説法の大底は。大師釋尊を衆生に同じ給ときは。つねに病惱をうけ。療治をもちゐたまふ。いはんや凡夫血肉の身。いかてかその愁なからん。しかれども。淺智愚鈍の衆生は。このことばりをしらず。さだめて疑心をなさんか。上人の化導すてに佛意にかなふゆへに。まのあたり。往生をとぐるものそのかずをしらず。しかれば諸佛菩薩諸天龍神。いかてか衆生の不信をなげき給はざらん。四天王佛法をまもり給はゞ。かならずわが大師上人の病惱をいやし給へと。ねんごろに申のべ給ければ。善導の御影の御前に。異香しきりに薫じ。上人も聖覺もともに瘡病おちにけり。聖覺自歎じ

て。先師法印は炎早の御祈禱に大内にして唱導をつとめ。當座に雨をふらして名譽をほどこしき。聖覺が身にはこの事第一の高名なりとぞ申されける。まことに末代の奇特。そのころの口遊にてぞありける。

法印ひとへに上人勸化を信伏して。念佛往生の口傳相承。そのかくれなく名譽ありしかば。承久三年のころ。但馬宮親王念佛往生に條々の不審をたて。名譽ある先達に御尋ありけり。この法印その專一なり。かの請文に云。御念佛のあひだの御用心は。一切の功德善根の中に。念佛最上に候。十惡五逆なりといへども。罪障またくその障とならず。一稱一念のちから決定して往生せしむべきよし。眞實堅固に御信受候べきなり。聊も猶豫の儀ゆめゝ候べからず。或は身の懈怠不淨にはゞかり。或は心の散亂妄念にをそれて。往生極樂に不定のおもひをなすは。極たるひが事にて候。佛意にそむくべく候

なり。日々の御所作更に不淨を憚思食べからず候。念佛の本意はたゞ常念を要とし候。行住坐臥時處諸縁を簡はず候。但し毎月一日などは。殊に御精進潔齋にて御念佛候べきなり。その外日々の御所作は。たゞ御手水ばかりにて候べき也已上。又嘉祿二年のころ。後鳥羽院遠所の御所取詮。西林院の僧正承に。仰下されける御書にも。散心念佛の事一定出離しぬべく候はんやう。明禪聖覺などにはしく尋さぐりて。最上の至要をしるし申さるべきよし。仰下されければ。法印こまかにしるし申されけるとなむ。

上人の第三年の御忌にあたりて。御追善のため。建保二年正月に。法印眞如堂にして。七箇日のあひだ道俗をあつめて。融通念佛をすゝめられけるに。往生の要樞。安心起行のやう。上人勸化のむねこまゝとてのべたまひて。これもし我大師法然上人の仰られぬことを申さば。當寺の本尊御照罰し給候へと。誓言再三に及てのち。

もしなを不審あらん人は。鎮西の聖光房にたづねとはるべしと申されければ。聴衆の中に一人の隠遁の僧ありけるが。草庵にかへらずして。すぐに筑後國にくだりて。聖光房に謁し。法流をつたへ門弟となり。九州弘通の法將となりける。敬蓮社といへるこれなり。法印追福の心ざしあらはれて。諸人の隨喜はなはだしくぞありける。

かの法印一山の明匠四海の導師として。公家の勅喚。諸亭の招請ひまなかりしかども。西土往生の心ざしふかく。稱名念佛の行をこたりなくして。つゝに文暦二年三月五日生年六十九にて。端坐合掌し。念佛數百遍をとなへ。往生の素懐をとげられける。まことにかしこくたうとくぞ侍る。

上野國の國府に明圓といふ僧侍りき。遊行聖の念佛申てとほりけるをとめをきて。道場をかまへ念佛を興行しける程に。或夜のゆめに。貴

僧きたりて告云。念佛申ものは。かならず極樂に往生するなり。敢て疑事なかれ。末代惡世の衆生。出離解脱の道。念佛にすぎたるはなし。我は吾朝の大導師聖覺といふものなり。法然上人の教によりて。彌陀の本願を信じ念佛を行じて。極樂に往生したるなりとて。一期の行狀。往生の次第こまかにかたり給て。いまこの道場の念佛に結縁せんがために。常にこの道場にあるなり。但十一月には本所に法談の事あるによりて。結縁のために必本所にかへるべし。法談以後は又このところにかへりて。念佛に結縁すべきなりとの給へり。夢さめて後。不思議の思をなし。聖覺といへる人はいづれの所の人ぞ。吾朝の大導師とは何事ぞとたづぬるに。しりたりといふものなかりければ。明圓鎌倉へのぼりて。日光の別當僧正の房にいたりて尋申に。聖覺法印といへるは。京都の安居院といふ所に侍りき。天下の大導師。名譽の能説なりしかば。し

らぬ人はなしと仰られければ。やがて上洛して。安居院の舊跡をたづね。嫡弟憲實法印に夢の次第をかたるに。在世の行狀といひ。往生の次第といひ。一事として違する事なし。就中十一月一日より天台大師講を始行して。二十四日までは毎日の講經終日の論談なり。しかるに十一月には本所に法談あり。結縁のために必本所に歸べきよし示さるゝ事。この講演の砌に影向の條疑なしとて。憲實法印感涙をぞながされける。明圓は聖覺法印の墳墓にまうて。夢の中の勸化をよろこび。歡喜の涙をながし。二心なき專修の行者になりければ。本國にかへりては。自行化他のつとめ。念佛の外他事なかりけり。其後は安居院の墓詣となづけて。毎年上洛して。かの墳墓にぞまうてける。一期のあひだ念佛をこたる事なくして。瑞相をあらはし。端坐合掌して。數百遍の念佛をとなへ。殊勝の往生を遂にけり。子息明心幼稚の程は。明圓が後

家の尼。年ごとに安居院の墓詣をしけるが。明心成人の後は。年ごとに明心上洛しけり。明心又兼日に往生の時日をさして。いすにのぼりて念佛數百遍をとなへ。端坐合掌して往生の素懐を遂にければ。其後は明心が子息明觀。毎年上洛して墓詣をぞしける。この念佛衆は聖覺の舊跡を。念佛の本所と仰崇しけるによりて。或年明觀上洛の時。憲實法印の嫡弟憲基法印にのぞみ申様。この念佛盡未來際退轉すべからざるよし。僧衆の中に御下知を下さるべきよし申けるによりて。彌陀本願の念佛は。濁世末代の出離解脱の要法なるいはれ。盡未來際退轉すべからざるよし。懇懇に書下されければ。御下知の旨にまかせて。ひとへに本願をあふぎ。念佛退轉あるまじきよし。僧衆等請文をさしげ。念佛いよ／＼ねんごろなりければ。國中の貴賤歸敬の掌をあはせ。結縁のおもひふかし。天竺震旦我朝三國のあひだに。多くの人師念佛の勸化をいた

すといへども。いまだ夢の中の勸化をきかず。この法印の勸化。まことにめづらしく貴くも侍かな。

法然上人行狀畫圖第十八

上人製作の選擇集は。月輪殿の仰によりてえらび進ぜらるゝ所也。蓋念佛往生の龜鏡たり。其簡要少々しるし侍べし。かの集の第一段云。道綽禪師聖道淨土の二門をたて。聖道門をすて淨土に歸する文。問云。一切衆生皆佛性あり。遠劫よりこのかたおほくの佛にあふべし。何によりてかいまにいたるまで。なをみづから生死に輪廻して。火宅を出ざるやと。答云。二種の勝法をえて。生死をはらはざるによりて。こゝをもちて火宅をいでず。何ものをか二とする。一にはいはく聖道。二にはいはく淨土なり。その聖道の一種は。いまの時に證しがたし。一には大聖をさること遙遠なるによる。二には

理ふかくさと微なるによる。この故に大集月藏經云。わが末法の時の億々の衆生。行をおこし道を修すとも。いまだ一人としてうるものあらじ。當今は末法是五濁惡世なり。たゞ淨土の一門のみありて。通入すべきみちなり。この故に大經云。もし衆生ありて。たとひ一生惡をつくるとも。命終の時にのぞみて。十念相續してわが名字を稱せん。若むまれずば正覺をとらじ。又一切衆生すべてみづからはからず。もし大乘によらば眞如實相第一義空。かつていまだ心にかず。もし小乘を論せば。見諦修道に修入し。乃至那含羅漢五下を斷じ五上をのぞくこと。道俗をとふ事なくいまだ其分あらず。たとひ人天の果報あれども。みな五戒十善のためによくこの報をまねく。然にたもちうるものはなはだまれなり。もし起惡造罪を論せば。なんど暴風駛雨にことならん。こゝをもて諸佛の大慈すゝめて淨土に歸せしめ給ふ。たとひ一形

惡をつくれども。たゞよく意をかけて。專精につねによく念佛すれば。一切の諸障自然に消除してさだめて往生する事をう。何ぞ思量せずしてすべて去心なきや。私云。淨土宗の學者。まづすべからく此旨をしるべし。たとひさきより聖道門を學せる人なりといふとも。淨土門にきてその心ざしあらんものは。すべからく聖道をすて淨土に歸すべし。例せばかの曇鸞法師は。四論の講説をすて、一向に淨土に歸し。道綽禪師は。涅槃の廣業をさしをきて。ひとへに西方の行をひろめしがごとし。上古の賢哲なをもつてかくのごとし。末代の愚魯むしろこれにしたがはざらんや。同第三段云。彌陀如來餘行をもて往生の本願とせず。たゞ念佛をもて往生の本願とする文といひて。無量壽經の上卷本願の文以下をひけり。私の詞云。問云。あまねく諸願に約して應惡をえらびすて、善妙をえらびとする事その理しかるべし。なんのゆへぞ。第十

八の願に一切の諸行をえらびすて、たゞひとへに念佛の一行をえらびとりて。往生の本願とするや。答云。聖意はかりがたしやすく解するにあたはず。しかりといへどもいまこゝろみに二の義をもてこれを解せん。一には勝劣の義。二には難易の義也。初に勝劣といふは。念佛はこれすぐれ。餘行は劣なり。ゆへいかんとなれば。名號はこれ万徳の歸する所也。しかればすなはち彌陀一佛のあらゆる四智三身十力四無畏等の一切の内證の功德。相好光明說法利生等の一切の外用の功德。みなことごとく阿彌陀佛の名號の中に攝在せり。かるがゆへに名號の功德もともすぐれたりとす。餘行はしからず。をのゝ一隅をまもる。こゝをもて劣也とす。たとへば世間の屋舎のごとし。その屋舎の名字の中には。棟梁椽柱等の一切の家具を攝す。棟梁等の一々の名字の中には。一切を攝することあたはず。これをもてしりぬべし。しかればすな

はち名號の功德は。餘の一切の功德にすぐれたり。故に劣をすて、勝をとりても本願とする歟。次に難易の義といふは念佛は修しやすく。諸行は修しがたし。抄略かるがゆへにしりぬ。念佛はやすがゆへに一切に通ず。諸行はかたきがゆへに諸機に通ぜず。然則一切衆生をして。平等に往生せしめんがために。難をすて、易をとりて本願とする歟。若それ造像起塔をもて本願とせば。貧窮困乏のたぐひはさだめて。往生のいぞみをたゝん。しかるを富貴のものはずくなく。貧賤のものはずはなはだおほし。もし智慧高才をもて本願とせば。愚鈍下智のものは定て往生の望をたゝん。しかるに智慧のものはすくなく。愚癡のものはなはだおほし。多聞多見をもて本願とせば。少聞少見の輩はさだめて往生の望をたゝん。しかるを多聞のものはすくなく少聞のものはなはだおほし。もし持戒持律をもて本願とせば。破戒無戒の人はさだめて往

生のいぞみをたゝん。しかるを持戒のものはすくなく。破戒のものは甚多し。自餘の諸行これに准じてしるべし。まさにしるべし。上の諸行等をもて本願とせば。往生をうるものはすくなく。往生せざるものはおほからん。然則彌陀如来法藏比丘のひかし平等の慈悲にもよほされて。あまねく一切を攝せんがために。造像起塔等の諸行をもて往生の本願とせず。たゞ稱名念佛の一行をもてその本願とするなり。乃問曰。一切の菩薩その願をたつといへども。あるひはすてに成就せるもあり。又いまだ成就せざるもあり。いぶかし法藏菩薩の四十八願は。すてに成就せりとやせん。はたいまだ成就せずとやせん。答曰。法藏の誓願は一々に成就し給へり。いかんとなれば。極樂界の中にすてに三惡趣なし。まさにしるべしこれすなはち無三惡趣の願を成就し給へるなり。なにをもてかしることをうるとならば。すなはち願成就の文に。又地獄

餓鬼畜生諸難の趣なしといへるこれなり。又彼國の人天。命をはりてのち三惡趣にかへることなし。まさにしるべしこれすなはち不更惡趣の願を成就せるなり。何をもちかしることをうるとならば。すなはち願成就の文に。又彼菩薩乃至成佛まで惡趣にかへらずといへる是なり。又極樂の人天。すてに一人として三十二相を具せざる者あることなし。正にしるべし是則具三十二相の願を成就せるなり。何をもちかしることをうるとならば。すなはち願成就の文に。彼國にむまるゝもの。みなことごとく三十二相を具足すといへる是なり。かくのごとくはじめ無三惡趣の願より。をはり得三法忍の願にいたるまで。一々の誓願みなもて成就し給へり。第十八の念佛往生の事あにひとりもて成就せざらんや。然則念佛の人みなもて往生す。何をもちかしることをうるとならば。すなはち念佛往生の願成就の文に。もろくの衆生ありて其名

號をきいて信心歡喜して。乃至一念至心に迴向して彼國にむまれんと願すれば。則往生することを得て。不退轉に住すといへる是也。をよそ四十八願をもて淨土を莊嚴せり。花池寶閣願力にあらずといふことなし。なんぞ其中にをいて。ひとり念佛往生の願を疑惑すべきや。しかのみならず一々の願のをはりに。もししからずば正覺をとらじといへり。しかるに阿彌陀佛成佛してよりこのかた。今にをきて十劫也。成佛のちかひすてにもて成就し給へり。まさにしるべし一々の願むなくまさくべからず。故に善導の給はく。彼佛今現に世にましくて成佛し給へり。まさにしるべし本誓重願むなしからずといふことを。衆生稱念すればかならず往生を上巳。それ速に生死をはなれんとおもはむ。二種の勝法の中に。しばらく聖道門をさしをきて。えらびて淨土門にいれ。淨土門にいらんとおもはむ。正雜二行の中に。しばらくもろく

の難行をなげすてゝ。えらびて正行に歸すべし。正行を修せんとおもはゞ。正助二業の中になを助業を傍にして。えらびて正定をもちにすべし。正定の業といふは。すなはちこれ佛の御名を稱する也。名を稱すればかならずひまるゝことをう。佛の本願によるがゆへにと。しづかにおもんみれば善導の觀經の疏は。是西方の指南。行者の目足なり。しかればすなはち西方の行人。かならずすべからず珍敬すべし。就中毎夜の夢の中に僧ありて玄義を指授せり。僧といふはをそらくはこれ彌陀の應現なり。しからばいふべしこの疏は彌陀の傳説なりと。いかにいはんや大唐に相傳していはく。善導はこれ彌陀の化身なりと。しからばいふべしこの文はこれ彌陀の直説なりと。すてにうつさんとおもはんものは。もはら經法のごとくせよといへり。此ことばまことなるかな。あふぎて本地をたづぬれば四十八願の法王なり。十劫正覺のとなへ念佛

にたのみあり。ふして垂迹をとらへば專修念佛の導師なり。三昧正受のことば往生にうたがひなし。本迹ことなりといへども化導これ一なり。こゝに貧道むかし。此典を披閱して粗素意をさとれり。たち所に餘行をとどめてこゝに念佛に歸す。それよりこのかた今日にいたるまで。自行化他たゞ念佛を事とす。然間まれに津をとふものには。しめすに西方の通津をもてし。たまゝ行をたづぬるものには。をしゆるに念佛の別行をもてす。これを信ずるものはおほく。信ぜざるものはすくなし。已上念佛を事とし往生をこひねがはん人。あに此書をゆるかせにすべけんや。

同製作の往生大要鈔に云。至誠心といは。眞實の心なり。その眞實といは。身にふるまひ口にひ心に思はんこと。みな人目をかざる事なく。誠をあらはすなり。しかるを人つねに勇猛強盛の心をおこすを至誠心と申は。此釋の心に

はたがふなり。又云。よはき三心具足したらん人は。くらゐこそさがらんずれ。なを往生はうたがふべからざるなり。又云。外相の善惡をばかへりみず。世間の謗譽をばわきまへず。内心に穢土をいとひ淨土をもねがひ。惡をもとめ善をも修して。まめやかに佛の意にかなはん事を思を眞實とは申也。又云。かやうに申せば。ひとへにこの世の人目はいかにもありなんとて。人のそしりをもかへりみず。ほかをかざらねばとて。心のまゝにふるまふがよきと申してはなきなり。はうにまかせてふるまへば。放逸とてわろき事にてあるなり。時にのぞみたる機嫌戒のためばかりに。いさゝか人めをつゝひかたは。わざともさこそあるべけれ。又云。機嫌戒となづけて。やがて虚假になる事もありぬべし。これをかまへてよくこゝろえわくべし。又云。此義を心えわかぬ人にこそあめれ。佛の本願をばうたがはねども。我心のわるけれ

ば往生かなはじと申あひたるが。やがて本願をうたがふにて侍也。さやうに申たちなば。いかに程までか佛の本願にかなふべしとかしり侍べき。それをわきまへざらんにとりては。心のわるさはつきせぬ事にてこそあらんずれば。いまは往生してんと思ひたつ世はあるまじ。佛の御力をばいか程とかはしる。これにすぎて佛の願をうたがふ事はいかゞ有べき。又云。たゞ心の善惡をもかへりみず。つみの輕重をもわきまへず。心に往生せんと思て。くちに南無阿彌陀佛となへば。こゑにつきて決定往生の思をなすべし。その決定心によりて。すなはち往生の業はさだまるなり。又云。かく心えぬればやすきなり。往生は不定に思へば。やがて不定になり。一定と思へば。やがて一定する事也。又云。深信といは。かの佛の本願はいかなる罪人をもせず。たゞ名號をとふる一聲まで。決定して往生すとふかくたのみて。すこしのうたがひ

もなきを申なり。又云。つみつくるをもすて給はねば。心にまかせてつくらんもくるしかるまじ。一念にも往生すなれば。念佛はおほく申さずともありなんと。あしく心うる人のいできて。つみをばゆるし。念佛をばせいするやうに申すが。返々もあさましく候なり。あくをすゝめ善をとむる佛法はいかゞあるべき。上人大經を釋し給とき。四十八願の中の第三十五の女人往生の願の意をのべての給はく。上の念佛往生の願は男女をさらはず。然にいま別に此願ある其こゝろいかん。つら／＼この事を案ずるに。女人はさほりをもし。別して女人に約せずばすなはち疑心を生ずべし。其ゆへは。女人はとがをもし。大梵高臺の閣にもへだてられて。梵衆梵輔の雲をのぞむことなく。帝釋柔軟の床にもくだされて。三十三天の花をもてあそぶ事なし。六天魔王の位。四種輪王の跡。のぞみながくたえてかけをささず。生死有漏の果

報。無常生滅のつたなき身とだにもならず。いかにいはんや佛のくらむをや。諸經論の中にきはれ。在々所々に撰出せられて。三途八難にあらざれば赴べきかたもなく。六種四生にあらざれば受べきかたちなし。この日本にも靈地靈驗の砌には。みなこと／＼くきはれたり。比叡山は傳教大師の建立。大師みづから結界して。谷をさかひ峯をかぎりて女人の形をいれず。されば一乗峯たかくして五障の雲たなびく事なく。一味谷ふかくして三從の水ながるゝ事なし。高野山は弘法大師結界の峯。眞言上乘繁昌の地也。三密の月輪あまねくてらすといへども。女人非器のやみをばてらす。五瓶の智水ひとしくながるといへども。女人垢穢のあかをばすゝがず。聖武天皇の御願。十六丈金銅の舍那。はるかにこれを拜見すといへども。なを扉の内にはいれられず。天智天皇の建立五丈石像の彌勒。あふぎてこれを禮拜すれども。なほ壇の上には

障あり。乃至金峯の雲のうへ。醍醐の霞のそこ。女人更にかけをささず。悲哉兩足ありといへども。のぼらざる法の峯あり。ふまざる佛の庭あり。恥哉兩眼あきらかなりといへども。見ざる靈地あり拜せざる靈像あり。この穢土の瓦礫荆棘の山。泥木素像の佛だにも障あり。いかにいはんや衆寶合成の淨土。萬德究竟の佛をや。これによりて往生そのうたがひあるべし。かるがゆへに此理をかゞみて別に此願あり。善導和尚この願を釋しての給はく。彌陀の大願力によるがゆへに。女人佛の名號を稱すれば。命終のとき。女身を轉じ男子となる事を得。彌陀御手をさづけ。菩薩身をたすけて。寶花のうへに坐し。佛にしたがひて往生し。佛の大會にいりて無生を證悟す。一切の女人。もし彌陀の名願力によらずば。千劫萬劫恆沙等の劫にも。つゝに女身を轉ずることを得べからずといへり。是則女人の苦をぬき女人の樂をあたふる。慈悲の誓

願利生なり。已上見乎大經釋取要抄之。ある時尋常なる尼女房ども。吉水の御房へまいりて。罪ふかき女人も。念佛だにも申せば。極樂へまいり候なるは。まことに候やらんと申ければ。上人の釋の心をねんごろに申のべられて。第十八の願の上のうたがひをたゞんがために。とりわき女人往生の願をたて給へる事。まことにたのもしくかたじけなきよしを仰られければ。歡喜の涙をながし。みな念佛門にいりにけるとなむ。

法然上人行狀畫圖第十九

月輪の禪閣の御歸依あさからざりしかば。北政所もおなじく御信伏ありて。念佛往生の事を御たづねありける御返事云。かしこまで申上候。さては御念佛申させはしまし候なるこそ。よにうれしく候へ。まことに往生の行は念佛が目出たき事にて候なり。そのゆへは念佛は彌陀の

本願の行なればなり。餘の行はそれ眞言止觀のたかさ行なりといへども。彌陀の本願にあらず。又念佛は釋迦の付屬の行なり。餘行はまことに定散兩門の目出たき行なりといへども。釋尊これを付屬し給はず。又念佛は六方の諸佛の證誠の行なり。餘の行はたとひ顯密事理のやんごとなき行なりと申せども。諸佛これを證誠し給はず。このゆへにやう／＼の行おほく候へども。往生のみちにはひとへに念佛すぐれたる事にて候なり。しかるに往生のみちにうとき人の申すやうは。餘の眞言止觀の行にたへざる人の。やすきまゝのつとめてこそ念佛はあれと申は。きはめたるひがごとにて候。そのゆへは彌陀の本願にあらざる餘行をさらひすて。又釋尊の付屬にあらざる行をばえらびとめ。又諸佛の證誠にあらざる行をばやめをさめて。いまはたゞ彌陀の本願にまかせ。釋尊の付屬により。諸佛の證誠にしたがひて。をろかなるわたくしのはか

らひをやめて。これらのゆへつよき念佛の行をつとめて。往生をばいのるべしと申にて候なり。されば惠心僧都の往生要集に。往生の業には念佛を本とすと申たるこの心なり。いまはたゞ餘行をとめて一向に念佛にならせ給へし。念佛にとりても。一向專修の念佛が目出たき事にて候なり。其むね三昧發得の善導の觀經疏に見えたり。又雙卷經に。一向專念無量壽佛といへり。一向の言は二向三向に對して。ひとへに餘の行をえらびてさらひのぞく心なり。君達などの御いのりのれうにも念佛がめてたく候。往生要集にも。餘行の中に念佛すぐれたるよし見えたり。又傳教大師の七難消滅の法にも。念佛をつとむべしと見えて候。おほよそ現世後生の御つとめ。なにごとかこれにすぎ候べきや。いまはたゞ一向專修の但念佛者にならせおはしますべく候。略抄これによりて。專修念佛の御こゝろさし。ふた心なかりけるとなむ。

阿波介といふ陰陽師。上人に給仕して念佛するありけり。或時上人かの俗をさして。あの阿波介が申念佛と。源空が申念佛と。いづれかまさると聖光房にたづね仰られけるに。心中にわきまふるむねありといへども。御ことばをうけ給はりて。たしかに所存を治定せんがために。いかでかさすがに御念佛にはひとしく候べきと申されたりければ。上人ゆゑしく御氣色かはりて。されば日來淨土の法門とてはなにごとをさかれけるぞ。あの阿波介も佛たすけ給へとおもひて南無阿彌陀佛と申す。源空も佛たすけ給へとおもひて南無阿彌陀佛とこそ申せ。更に差別なきなりと仰られければ。もとより存ずる所なれども。宗義の肝心いまさるなるやうに。たゞたうとくおぼえて感涙をもよほしきとぞかたり給ける。二念數をしいだしたるは。この阿波介にてなん侍なり。かの阿波介。百八の念珠を二連もちて念佛しけるに。そのゆへを入たづねけれ

ば。弟子ひまなく上下すれば。その緒つかれやすし。一連にては念佛を申し。一連にては數をとりて。つもの所の數を弟子にとれば。緒やすまりてつかれざる也と申ければ。上人さゝ給て。なに事もわが心にそみぬる事には才覺がいでくるなり。阿波介。きはめて性鈍にその心をろかなれども。往生の一大事心にそみぬるゆへに。かゝる事をも案じ出けるなり。まことにこれたくみなりとぞほめ仰られける。上人かたりての給はく。淨土の法門を學する住山者ありき。示云。われすてに此教の大旨を得たり。しかれども信心いまだあこらず。いかにしてか信心あこすべきとなげきあはせしにつきて。三寶に祈請すべきよし教訓をくはへて侍しかば。かの僧はるかに程へてきたりていはく。御をしへにしたがひて祈請をいたし侍しあひだ。あるとき東大寺に詣たりしに。ありふし棟木をあぐる日にて。おびたゞしき大物の材木ども。

いかにしてひきあぐべしともおぼえぬを。轆轤をかまへてこれをおぐるに。大木おめくくと中にまきあげられてとぶがごとし。あなふしぎと見る程に。おもふ所におとしすへにき。これを見て良匠のはかりごとをかくのごとし。いかにいはんや彌陀如來の善巧方便をやとおもひしおりに。疑網たち所にたえて信心決定せり。これしかしながら。日比祈請のしるしなりとかたりき。其後兩三年をへてなん。種々の靈瑞を現じて往生を上げける。受教と發心とは各別なるゆへに。習學するには發心せざれども。境界の縁を見て信心をおこしけるなり。人なみくくに。淨土の法門をきゝ念佛の行をたつとも。信心いまだおこらざらん人は。たゞねんごろに心をかけてつねに思惟し。また三寶にいのり申べきなりとぞ仰られける。

尼聖如房は。ふかく上人の化導に歸し。ひとへに念佛を修す。所勞の事ありけるが。臨終ちかづ

きて。いま一度上人を見たてまつらばやと申ければ。このよしを上人に申に。ありふし別行の程なりければ。御文にてこまかに仰つかはされけり。かの狀云。聖如房の御事こそ返々あさましく候へ。乃たゞ例ならぬ御事。大事になどうけ給はり候はんだにも。いま一度は見まいらせたく。をよりまでの御念佛の事もおぼつかなくこそ思まいらせ候べきに。まして御心にかけてつねに御たづね候らんこそ。まことにあはれにも心ぐるしくもおもひまいらせ候へ。左右なくうけ給候まゝにまいり候て。見まいらせたく候へども。おもひきりてしばしいてありき候はて念佛申候はゞやと。思はじめたる事の候を。やうにこそよる事にて候へ。これをば退してもまいるべきにて候に。又思候へば。詮じてはこの世の見參。とてもかくても候なん。かばねを執するまどひにもなり候ぬべし。たれとてもとまりはつべき身にも候はず。我も人も。たゞをくれ

さきだつ。かはりめばかりにてこそ候へ。そのたえまを思候も。又いつまでかとさだめなきうへに。たとひ久しと申とも。ゆめまぼろしいくほどかは候べきなれば。たゞかまへておなじ佛の國にまいりあひて。蓮のうへにてこの世のいぶせさもはるけ。ともに過去の因縁をもかたり。たがひに未來の化導をもたすけん事こそ返々も詮にて候べきと。はじめより申をき候しが。返々も本願をとりつめまいらせて。一念もうたがふ御心なく。一聲も南無阿彌陀佛と申せば。我身はたとひいかにつみふかくとも。佛の願力によりて一定往生するぞとおぼしめして。よくく一すぢに念佛の候べきなり。我等が往生は。ゆめく我身のよきあしきにより候まじ。ひとへに佛の御力ばかりにて候べきなり。我力にては。いかにめてたくたうとき人と申とも。末法のごころ。たゞちに淨土にむまるゝほどの事はありがたく候べき。又佛の御ちからにて候

はんには。いかに罪ふかくをろかにつたなき身なりとも。それにはより候まじ。たゞ佛の願力を。信じ信ぜぬにこそより候べき。乃至て往生はせさせおはしますまじきやうにのみ。申さかする人々の候らんこそ。返々あさましく心ぐるしく候へ。いかなる智者。めてたき人。おほせらるゝとも。それになおどろかせおはしまし候そ。をのくのみちにはめてたくたうとき人なり共。さとりあらず行ことなる人の申候事は。往生淨土のためには。中々ゆゝしき退縁惡知識とも。申候ぬべき事どもにて候。たゞ凡夫のはからひをば。さゝいれさせおはしますさて。一すぢに佛の御ちかひをたのみまいらせさせおはしますべく候。さとりことなる人の。往生をいひさまたげんによりて。一念もうたがふ心あるべからずといふことは。善導和尚のよくくこまかに仰られたる事にて候なり。乃中々あらぬすぢなる人はあしく候なん。たゞいかならん人に

ても。尼女房なりとも。つねに御まへに候はん人に念佛申させて。きかせおはしまして。御心ひとつをつよくおぼしめして。一向に凡夫の善知識を思食すて。佛を善知識にたのみまいらせさせ給べく候。乃かやうに念佛を。かきこもりて申候はんなど思候も。ひとへに我身ひとつのためとのみは。もとより思候はず。ありしもこの御事をかくうけ給候ぬれば。いまよりは一念ものこさず。ことごとくその往生の御たすけになさんと。廻向しまいらせ候はんずれば。かまへてくおぼしめすさまに。とげさせまいらせ候はゞやとこそは。ふかく念じまいらせ候へ。もしこの心ざしまことならば。いかてか御たすけにもならて候べき。たのみおぼしめさるべきにて候。おほかたは申いて候しひとことばに御心をととめさせおはします事も。この世ひとつの事にて候はじと。さきの世もゆかしくあはれにこそ。思しらるゝ事にて候へば。うけ給候ごとく。

このたびまことにさきだせおはしますにて。又おもはずにさきだちまいらせ候事になるさだめなさに候とも。つねに一佛浄土にまいりあいまいらせ候はん事。うたがひなくおぼえ候。ゆめまぼろしのこの世にて。いま一度など思申候事は。とてもかくても候なん。これをば一すぢにおぼしめしすて。いとともふかくねがふ御心をもまし。御念佛をもはげませおはしまして。かしこにてまたんとおぼしめすべく候。乃もしむげにはくならせおはしましたる御事にて候はゞ。これは事ながく候べく候。えうをととりて。つたへまいらせさせおはしますべく候。うけ給候まゝになにとなくあはれにおぼえて。をしかへし又申候なり。略抄 この御文の趣をふかく心にそめて。念佛をこたらずして。つねにめてたき往生をとげにけるとなむ。仁和寺にすみける尼。上人にまゐりて申やう。みづから千部の法華經をよむべきよし。宿願の

事ありて。七百部はすてによみをはれり。しかるにとすてにたけ侍ぬ。のこりの功いかにしてをへ侍べしともおぼえ侍らずと。なげき申ければ。としたけたまへる御身には。めてたく七百部まではよみ給へるものかな。のこりをば。一向念佛になされ候べしとて。念佛の功能をとききかせられければ。そのゝちは法華經誦誦をととめて。一向專稱してとし月をへて。すてに往生をとげにけり。丹後國志樂の庄に彌勒寺といふ山寺の一和尚なりける僧の。むかしは天台山の學徒。のちには遁世して。上人の弟子となりて一向に念佛して。五條の坊門富小路にすみけるが。ひるねしける夢にそらに紫雲をびけり。中に一人の尼あり。まことに心よげにうちゑみて。われは法然上人のをしへによりて念佛して。只今すてに極樂へ往生し候ぬぞ。これは仁和寺に候つる尼なりと申と見て夢さめぬ。やがて上人のおはしましける九條なる所へ參て。妄

想にてや候らん。かゝるゆめを見て候と申ければ。上人うち案じたまひて。さる人あるらんとて。やがて仁和寺へ使をつかはされんとするに。日くれにければ。次のあしたつかはさる。便宜のよしにてなに事か候とたづぬべしとおぼせられければ。つかひかの所へむかひてたづね申に。かの尼公は。昨日午尅にはや往生し候ぬとぞ答申ける。あはれにたうとき事にてぞありける。

法然上人行狀畫圖第二十

河内國に天野の四郎とて。強盜の張本なるものありけり。人をころし財をかすむるを業として世をわたりけるが。としたけて後。上人の化導に歸し。出家して教阿彌陀佛と號しけり。つねに上人の御もとに參じて教訓をかうぶりけるが。或時夜半ばかりに上人おきゐたまひて。ひそかに念佛し給かとおぼしき事ありけり。教阿

彌陀佛うちしわぶきたりければ。上人やがてふし給ぬ。ねいり給へるさまにてその夜もあけにけり。教阿彌陀佛。心のうちにいと心えぬわざかなとおもひけれども。たづね申にをよばてやみにけり。程へてのち又参たるに。上人は持佛堂におはしませば。教阿彌陀佛はおほゆかに候して申けるは。無縁のものにて在京かなひがたく侍れば。相模國河村と申ところに。あひしりたるもの侍をたのみてまかりくだり侍り。としたけ侍ぬれば。又見参に入らんこともかたく候。もとより無智の者にて侍れば。甚深の法門をうけ給候とても。その甲斐あるべしとも覺侍らず。たゞ詮をととりて。決定往生仕ぬべき御一言をうけ給はりて。生涯の御かたみにをなへ侍らんと。上人の給はく。まづ念佛には甚深の義といふことなし。念佛申ものは。かならず往生すとしるばかり也。いかなる智者學生なりとも。宗にあかさざらん義をば。いかてかつくり

いだしていふべき。ゆめ／＼甚深の義あるらんと。ゆかしく思はるべからず。念佛はやすき行なれば申人はおほけれども。往生するものすくなきは。決定往生の故實をしらぬゆへなり。去月に又人もなくて。御房と源空とたゞ二人ありしに。夜半ばかりにしのびやかに起居て念佛せしをば。御房はさかれけるかと仰らるれば。寢耳にさやらんと承候きと申ければ。それこそやがて決定往生の念佛よ。虚假とて。かざる心にて申念佛が往生はせぬなり。決定往生せんとおもはゞ。かざる心なくして。まことの心にて申べし。いふかひなきおさなきもの。もしは畜生などにむかひては。かざる心はなければども。朋同行はいふにをよばず。その外つねになれ見る。妻子眷屬なれども。東西を辨ふる程の者になりぬれば。それがために。かならずかざる心はおこるなり。人の中にすまんに。その心なき凡夫はあるべからず。すべて親きも疎も貴も賤

も。人にすぎたる往生のあだはなし。それがためにかざる心をおこして。順次の往生をとげざればなり。さりとして獨居もかなはず。いかゞして人目をかざる心なくして。まことの心にて念佛すべきといふに。つねに人にまじりて。しづまる心もなく。かざる心もあらんものは。夜さしふけて。見る人もなく。聞人もなからん時。しのびやかに起居て。百遍にても千遍にても。多少こゝろにまかせて申さん念佛のみぞ。かざる心もなければ。佛意に相應して。決定往生はとぐべき。この心を得なばかならずしも夜にはかざるべからず。朝にても晝にても暮にても。人のきゝはゞかりなからん所にて。つねにかくのごとく申べし。所詮決定往生をねがふ。まことの念佛申さんずるかざらぬ心ねは。たとへば盗人ありて。人の財を思かけて。ぬすまんとおもふ心は底にふかけれども。面はさりげなき様にもてなして。かまへてあやしげなる色を。

人に見えじとおもはんがごとし。そのぬすみ心は人またくしらねば。すこしもかざらぬ心なり。決定往生せんとする心も又かくのごとし。人おほくあつまり居たらん中にて。念佛申いゝるを人に見せずして。心にむするまじきなり。其時の念佛は。佛よりほかはたれかこれをするべき。佛しらせ給はゞ。往生なんぞ疑はんと仰られければ。教阿彌陀佛申さく。決定往生の法門こそ心得候ぬれ。すてにさとりきはめ侍り。この仰をうけ給はらざらましかば。このたびの往生はあぶなく候はまし。但この仰のごとくにては。人のまへにて念珠をくり。口をはたらかす事は。あるまじく候やらんと。上人の給はく。それ又僻韻なり。念佛の本意は常念を詮とす。されば念々相續せよとこそすゝめられたれ。たとへば世間の人を見るに。おなじ人なれども豪臆あひわかれて。臆病の者になりぬれば。身のためくるしかるまじき。聊のいかりをもをぢを

それて逃かくる。豪の者になりぬれば。命をうしなふべきはさ敵の。しかも逃かくれなばたすかるべきなれども。すこしもをそれず。ひとしざりもせざるがごとし。これがやうに。眞僞の二類あり。地體いつはり性にして。かざる心あるものは。身のために要なき。聊の事をもかならずいつはりかざるなり。もとよりまことの心ありて虚言せぬものは。聊の矯偽しては。身のためおほきにその益あるべき事なれども。身の利養をばかへりみず。底にまことありてすこしもかざる心なし。これみな本性にうけてひまれたるところなり。そのまことの心のもの。往生せんともひて念佛に歸したらんは。いか成所いか成人のまへにて申とも。すこしもかざる心あるまじければ。これ眞實心の念佛にして。決定往生すべきなり。なんぞこれをいましめん。又地體はいつはり性にして。世間さまにつけては。いさゝか不實の事もありしかども。

知識にあひて發心して。往生せんともおもふ心ふかくなりぬれば。念々相續せんとおもひて。いかなる所いかなる人のまへにても。無想にひた申にまうさん者。これ又眞實心の念佛なれば。決定往生すべきなり。また制の限にあらず。いまいふところは。三心の中に一心もかけぬれば。往生せずと釋し給へるに。三心の中の眞實心。人ごとに發がたければ。その眞實心を發べきやうをいふばかりなり。さればとて。たゞのとき念佛な申とはいかゞすむべきと。又教阿彌陀佛申さく。さきに仰の侍つるやうに。夜念佛申さんにはかならず起居候べきか。又念珠袈裟をとり侍べきかと。上人の給はく。念佛の行は行住坐臥をさらはぬ事なれば。ふして申さんとも居て申さんとも。心にまかせ時によるべし。念珠をとり袈裟をかくる事も。又折により體にしたがふべし。たゞ詮する所。威儀はいかにもあれ。このたびかまへて往生せんともひ

て。まことしく念佛申さんのみぞ大切なるを仰られければ。教阿彌陀佛。歡喜踊躍し合掌禮拜して。罷出にけり。翌日に法蓮房信空のもとへゆきて暇ごひしけるに。昨日上人の授給へる決定往生の義とて申いだして。このたびの往生は。すこしも疑なきよしよろこび申て。東國へ下向しにけり。其後上人の御まへにて。法蓮房この事を申いだして。さる御事の侍けるにやと申されければ。その事なり。さる舊盜人と聞置て侍しほどに。對機說法して侍き。一定心得たりげにこそ見えしかとぞ仰られける。教阿。かの河村にくだりてすみ侍けるが。所勞づきて終焉にのぞみけるに。同行にかたりていはく。わが往生は決定なり。これすなはちふかく上人のをしへを信ずるゆへなり。往生のやうかならず上人に參じて申べしと遺言して。正念たがはず合掌みだるゝ事なく。高聲念佛數十遍となへてをばりにけり。同行やがて上洛して遺言の次第

くはしく上人に申ければ。よく心をたりと見えしが。相違せざりける。あはれなる事なりとぞ仰られける。
沙彌隨蓮住四條萬里小路は。上人配所へおもむき給し時。御とも申て歸依あさからざりき。上人これをあはれみて。念佛往生の道を開示し給に。ふかく信受してふた心なく念佛しけり。上人往生の後。建保二年のころ。いかに念佛すとも。學問して三心をしらざらんには。往生すべからずと申ものありければ。隨蓮申さく。故上人は。念佛は様なきをやうとす。たゞひらに佛語を信じて念佛すれば。往生するなりとて。またく三心のことをも仰られざりきと。彼人かさねていはく。一切に心うましきものゝために。方便して仰られけるなり。上人御素意のちもむきはとて。經釋の文などゆゝしげに申さかせければ。まことにさもやあるらんと。いさゝか疑心をおこすことありけるに。ある夜のゆめに。法勝寺

の西門より入て見れば。池のなかにいろ／＼の蓮花さきみだれたり。西の廊のかたへあゆみよりに見れば。僧衆あまた列座して。淨土の法門を談ず。隨蓮さきはしにのぼりあがりてみれば。上人北座に南むきに坐したまへり。隨蓮見たてまつりてかしまるに。上人見たまひて。これへまわれとめしければ。まぢかくまいりぬ。隨蓮いまだことばをいださるに。上人の給はく。汝がこのほど心になげきおもふこと。ゆめ／＼わづらふべからずと。隨蓮この事すべて人にも申さず。なにとしてしろしめしたるにかと思ひながら。上件のやうをくはしく申に。上人仰られていはく。たとへばひがごとをいふもの有て。あの池の蓮華を蓮華にはあらず梅ぞ櫻ぞと。いはゞ信ずべしやと。隨蓮申て云。現に蓮花にて候はんをば。いかに人申候ともいかてか信じ候べきやと。上人の給はく。念佛の義も又かくのごとし。源空が。汝に念佛して往生

する事は。決定して疑なしとをしへしを信じたるは。蓮華を蓮華とよもはんがごとし。ふかく信じてとかくの沙汰に及ばず。たとへ念佛を申べきなり。あらぬ邪見の櫻梅の義をば。ゆめ／＼信ずべからず。と仰らると見てゆめさめぬ。隨蓮疑念のこりなく散じにけり。念佛功つもあり。臨終正念にして。往生の素懐をとげにけるとな

ん。抑上人あるところには三心のやうをくはしくをしへ。ある所には三心の沙汰詮なきよし仰られたり。これ人によるべき事なり。名號ととなふれば。かならず往生すとばかりまめやかにたのみてとなふれば。その人の心にをのづから三心もそなはりぬるを。中々に三心とてこと／＼しく申すほどに。かへりて信心をみだることも待なり。かゝらん人のためには。三心の沙汰無益の事なるべし。もし日來はうたがひの心もありて三心具せぬ人も。聖教を學すれば道理に

れて三心のちこる事もあれば。さやうならん人のためには。三心の様をしらんも大切なるべきを。一向にこれを非せば。又そのとがあるべし。このすぢを心えなば。上人兩様の御勸進。さらに相違を成すべからざるものなり。遠江國久野の作佛房といひし山臥は。役行者の跡をいひ。山林斗數の行をたて、大峯を經歷し。熊野參詣のあゆみをはこぶ事。四十八箇度也。たびごとに證誠權現の寶前にひざまづき。われさらに現世の果報をいのらず。ねがはくは出離の要道をしめし給へとちかひけるに。四十八度満する時。當時京都に法然房といふひじりあり。ゆきて出離の道をたづぬべしとしめし給ければ。すなはち上洛して上人に謁したてまつり。念佛往生の教導にあづかり。一向專修の行者となりけり。本國にくだりては。みづから市にいて。染物などやうのものを賣買して。命をつぐはかりごとししけり。もとより孤獨の身

なれば。同行もなく知識もなし。病をうけざれば。病惱のくるしみなく療治のわづらひなし。往生の期いたりて道場にいり。佛前にしてみづからかねをうち。高聲念佛數尅にをよぶ。小法師朝食をとのへて案内しけるに。しばらくとて。なを念佛のこゑしきりなり。念佛とてまりのち。また申おどろかすに。をともせざりければ。ちかくよりて見るに。本尊にむかひ端坐合掌す。そのかほえめるがごとし。さるほどに紫雲におどろき異香をたづねて。諸人雲集し來縁をむすぶ。奇特のことなりけり。上人の勸化神慮にかなへることかくのごとし。抑熊野山證誠權現は。本地阿彌陀如來なり。いま神明とあらはれて。無福の衆生に福をあたへんとちかひ給へるも。せめて慈悲のあまりに貪欲ふかくして。ひとへに今生の榮耀に心をそめ。後生の苦患をわすれたる衆生の。人身をうけたるかひなくして。ふたゝび惡道にかへるべきともがら

を。すくはんがための濟度の方便なるべし。されば當山にまうて。後世ぼだいをいのるひとは。ながれにさほすがごとく。本願の正意にかなひて。かならず順次の往生をとぐなどぞ申つたへ侍る。九品の鳥居をたてられたるも。九品の淨土に引接の御本意を表すといへり。參詣の人。内に本地の本願をたのみ。外には垂迹の擁護をあふぎて。たゞひとへに順次往生の心ざしをささとし。侍るべきものをや。

法然上人行狀畫圖第二十一

上人つねに仰られける御詞

上人の給はく。口傳なくして淨土の法門を見るは。往生の得分を見うしなふなり。其故は極樂の往生は上は天親龍樹をすしめ。下は末世の凡夫十惡五逆の罪人まですしめ給へり。しかるをわが身は最下の凡夫にて。善人をすしめ給へる文を見て。卑下の心をあこして。往生を不定に

おもひて。順次の往生を得ざるなり。しかれば善人をすしめ給へる所をば善人の分と見。惡人を勧め給へる所をば我分と見て得分にするなり。かくのごとくみさだめぬれば。決定往生の信心かたまりて。本願に乗じて順次の往生をとぐるなり。

又云。念佛申にはまたく別の様なし。たゞ申せば極樂へむまると知て。心をいたして申せばまいるなり。

又云。南無阿彌陀佛といふは。別したる事には思へからず。阿彌陀ほとけ我をたすけ給へといふことばと心得て。心には阿彌陀ほとけ。たすけ給へとおもひて。口には南無阿彌陀佛と唱るを。三心具足の名號と申なり。

又云。罪は十惡五逆の者。なをむまると信じて。小罪をもをかざじと思へし。罪人なをむま

る。いかにいはんや善人をや。行は一念十念ひなしからずと信じて。無間に修すべし。一念な

めやかにおもひ入たる人の氣色は。世の中をひとくねり。恨たる色にて常にはある也。

又云。人の命は食事の時。むせて死する事も有なり。南無阿彌陀佛とかみて。南無阿彌陀佛とのみ入べきなり。

又云。法爾の道理と云事あり。ほのほは空にのぼり。水はくんだりさまになる。菓子の中に。すき物ありあまき物あり。これらはみな法爾の道理なり。阿彌陀佛の本願は。名號をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給たれば。たゞ一向に念佛だにも申せば。佛の來迎は法爾の道理にてうたがひなし。

又云。善導の釋を拜見するに。源空が目には。三心も南無阿彌陀佛。五念も南無阿彌陀佛。四修も南無阿彌陀佛なり。

又云。弘願といへるは。如大經說。一切善惡凡夫得生者。莫不皆乘阿彌陀佛大願業力。爲増上緣と。善導釋し給へり。予がごとき

をむまる。いかにいはんや多念をや。

又云。一念十念に往生をすといへばとて。念佛を疎想到申すは。信が行をさまたぐるなり。念々不捨者といへばとて。一念を不定におもふは。行が信をさまたぐるなり。信をば一念にひまると信じ。行をば一形にはげむべし。又一念を不定に思ふは。念々の念佛ごとに不信の念佛になるなり。其故は。阿彌陀佛は。一念に一度の往生をあてをき給へる願なれば。念ごとに往生の業となるなり。

又云。煩惱のうすくあつきをもかへりみず。罪障の輕き重きをも沙汰せず。たゞ口に南無阿彌陀佛と唱へて。聲につきて決定往生のおもひをなすべし。

又云。たとひ餘事をいとなむとも。念佛を申々これをするとおもひをなせ。餘事をし。念佛すとはおもふべからず。

又云。往生をねがひ。極樂にまいらん事を。ま

不堪の身は。ひとへにたゞ弘願をたのみなり。又云。我はこれ烏帽子もさざる男なり。十悪の法然房。愚癡の法然房が。念佛して往生せんと云なり。

又云。學生骨になりて。念佛やうしなはんずらん。

又云。本願の念佛には。ひとりだちをせさせ。すけをさゝぬなり。すけといふは。智恵をもすけにさし。持戒をもすけにさし。道心をもすけにさし。慈悲をもすけにさすなり。善人は善人ながら念佛し。悪人は悪人ながら念佛して。たゞむまれつきのまゝにて念佛する人を。念佛にすけさゝぬとは云也。さりながら悪をあらため。善人となりて念佛せん人は。佛の御心に叶べし。かなはぬ物ゆへに。とあらんかゝらんと。決定心おこらぬ人は。往生不定の人なるべし。

又云。佛告阿難。汝好持是語。持是語者。即

是持無量壽佛名といへり。名號をさくといふとも。信ぜずばさかざるがごとし。たとい信ずといふとも。唱へずば信ぜざるがごとし。たゞ常に念佛すべきなり。

又云。近來の行人。觀法をなす事なかれ。佛像を觀ずとも。運慶康慶が造たる佛程だにも。觀じあらはすべからず。極樂の莊嚴を觀ずとも。櫻梅桃李の花菓程も。觀じあらはさん事かたかるべし。たゞ彼佛今現在世成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生の釋を信じて。ふかく本願をたのみて。一向に名號を唱べし。名號を唱れば。三心をのづから具足する也。

又云。往生の業成就は。臨終平生にわたるべし。本願の文簡別せざるゆへなり。惠心の心も。平生にわたると見えたり。

又云。他力本願に乗ずるに二あり。乗ぜざるに二あり。乗ぜざるに二といふは。一には罪をつくるとき乗ぜず。其故は。かくのごとく罪をつ

くれば。念佛申とも往生不定なりとおもふ時に乗ぜず。二には道心のおこる時乗ぜず。其故は。おなじく念佛申とも。かくのごとく道心ありて申さんずる念佛にてこそ往生はせんずれ。無道心にては念佛す共かなふべからずと。道心をささとして。本願をつきにおもふ時乗ぜざるなり。次に本願に乗ずるに二の様といふは。一には罪つくる時乗ずるなり。其故は。かくのごとく罪をつくれれば。決定して地獄に落べし。しかるに本願の名號を唱れば。決定往生せん事のうれしさよとよろこぶ時に乗ずるなり。二には道心おこる時乗ずるなり。其故は。此道心にて往生すべからず。これ程の道心は。無始よりこのかたおこれども。いまだ生死をはなれず。故に道心の有無を論ぜず。造罪の輕重をいはず。たゞ本願の稱名を。念々相續せんちからによりてぞ。往生は遂べきとおもふ時に。他力本願に乗ずるなり。

又云。せこにこめたる鹿も。友に目をかけずして。人影にかへらず。むかひたる方へ。おもひさりて。まひらににぐれば。いくへ人あれども。かならずにげらるゝなり。その定に他力をふかく信じて。萬事をしらず。往生をとげんとおもふべきなり。

又云。稱名の時に心におもふべき様は。人の膝などをひきはたらかして。や。たすけ給へと云定なるべし。

又云。七日七夜心無間といふは。明日の大事をかゝじと。今日はげむがごとくすべし。

又云。人の手より物を得んずるに。すてに得たらんと。いまだ得ざるといづれか勝べき。源空はすてに得たる心地にて念佛は申なり。

又云。往生は一定と思へば一定なり。不定と思へば不定也。

又云。念佛申さんもの十人あらんに。たとひ九人は臨終あしくて往生せずとも。我一人は決定

して往生すべしとおもふべし。

又云。一丈の堀をこえんと思はん人は。一丈五尺をこえんとはげむべし。往生を期せん人は。決定の信をとりてあひはげむべきなり。

又云。いければ念佛の功つもあり。しなば浄土へまいりなん。とてもかくても。此身には思ひわづらう事ぞなきと思ねれば。死生共にわづらひなし。

或時上人。あはれ此度しおほせばやなど仰られけるを。乗願房承て。上人だにもか様に不定気なる仰の候はんには。その餘の人はいかゞし候べきと申ければ。上人打わらひ給て。まさしく蓮臺にのらんまでは。いかてか此思ひはたえ候べきとぞの給ける。

或人。上人の申させ給ふ御念佛は。念々ごとに佛の御心にかなひ候らんなど申けるを。いかなればと上人かへしとはげむべし。智者にておはしませば。名號の功德をもくはしくしるしめし。本

願の機をもあきらかに御心得あるゆへにと申けるとき。汝本願を信ずる事まだしかりけり。彌陀如來の本願の名號は。木こり草かり。菜つみ水くひたぐひごときのもの。内外ともにかけて。一文不通なるがとなふれば。必むまると信じて。眞實にねがひて。常に念佛申を最上の機とす。もし智恵をもちて生死をはなるべくば。源空いかてかかの聖道門をすて。この浄土門に越べきや。聖道門の修行は。智恵をさはめて生死をはなれ。浄土門の修行は。愚癡にかへりて極樂にむまるとしるべしとぞ仰られける。

又人々後世の事申けるつゝに。往生は魚食せぬものこそすれといふ人あり。或は魚食するものこそすれといふ人あり。とかく論じけるを。上人さゝ給て。魚くふもの往生をせんには。鶉ぞせんずる。魚くふものせんには。猿ぞせんずる。くふにもよらず。くはぬにもよらず。たゞ念佛申もの往生はすとぞ。源空はしりたると

ぞ仰られける。

上人御往生の後。三井寺の住心房の夢の中にとはれても。念佛はさたく風情もなし。たゞ申より外の事なしと。上人答給ける。

又一紙にのせての給はく。末代の衆生を。往生極樂の機にあてゝ見るに。行すくなしとも疑べからず。一念十念に足ぬべし。罪人なりとも疑べからず。罪根ふかきをもさらはじとの給へり。時くだれりとも疑べからず。法滅以後の衆生なをもて往生すべし。況近來をや。我身わろしとも疑べからず。自身はこれ煩惱具足せる凡夫也との給へり。十方に浄土おほけれど。西方を願は。十惡五逆の衆生の生るゝ故なり。諸佛のなかに彌陀に歸したてまつるは。三念五念に至るまでみづから來迎し給故なり。諸行の中に念佛を用るは。かの佛の本願なる故也。いま彌陀の本願に乗じて往生しなんに。願として成ぜずと云事あるべからず。本願に乗ずる事は

信心のふかきによるべし。うけがたき人身をうけて。あひがたき本願にあひて。おししがたき道心を發して。はなれがたき輪廻の里をはなれて。生れがたき浄土に往生せん事悦の中の悦なり。罪は十惡五逆の者も生ずと信じて。少罪をも犯さじと思へし。罪人なをむまると。況や善人をや。行は一念十念なをむなしからずと信じて。無間に修すべし。一念なを生る。況や多念をや。阿彌陀佛は不取正覺の言を成就して。現に彼國にましますべし。定て命終の時は來迎し給はん。釋尊は善哉我教に隨て。生死を離と知見し給ひ。六方の諸佛は悦哉我證誠を信じて。不退の浄土に生と悦給らんと。天に仰ぎ地に臥て悦べし。このたび彌陀の本願にあふ事を。行住坐臥にも報ずべし。かの佛の恩徳を。頼ても頼べきは乃至十念の詞。信じても猶信ずべきは必得往生の文也と。此書世間に流布す。上人の小消息といへるこれなり。

上人。念佛の行者の。心得べき様を。をしへ給へる事あり。所謂われは阿彌陀をこそたのみたれ。念佛をこそ信じたれとて。諸佛菩薩の悲願をかりしめたてまつり。法華般若等の目出たき經どもを。わろくおもひ。そしる事ゆめく有べからず。阿彌陀佛を信じたればとて。よろづの佛をそしり。もろくの聖教を疑ひそしりたらんずるは。信心のひがみたるにてあるべきなり。信心たゞしからずば。阿彌陀佛の御心に叶まじければ。念佛すとも彌陀の悲願にもれん事は一定なり。又罪をつくらじとつゝしみて。よからんとするは。彌陀の本願をかりしむるにてこそあれ。又念佛を多く申さんとて。日々に數返のかずをつむは。他力をうたがふにてこそあれなどいふ事の多くきこゆる。か様の僻事ゆめゆめもちるべからず。いづれの所にか。阿彌陀佛は罪つくれとすゝめ給たる。これひとへにわが身に惡をもとめえず。罪をのみつくりぬた

るまゝに。かゝるゆくえもなき虚言をたくみいだして。ものもしらぬ男女の輩をすかしほらかし。罪業をすゝめ煩惱をおこさしむる事。しかながらこれ天魔のたぐひなり。外道のしわざなり。往生極樂のあたかたきなりと思へし。又念佛の數を多く申ものをば。自力をあげむといふ事。是またものも覺えず。あさましき僻事なり。たゞ一念二念をとなふとも。自力の心ならん人は自力の念佛とすべし。千遍萬遍をとなへ。百日千日よるひるはげみつとむとも。偏に願力をたのみ他力をあふぎたらん人の念佛は。聲々念々しかしながら他力の念佛にてあるべし。されば三心をあこしたる人の念佛は。日々夜々時々尅々に唱れども。しかしながら願力を仰ぎ他力をたのみたる心にて唱居たれば。かけてもふれても。自力の念佛とはいふべからず。また三心と申事は。その子細をしりたる人の念佛に三心具足せん事は左右に及ばず。つや／＼三心の名を

だにもしらぬ無智の輩の念佛には。いかでか三心具し候べきと申人も候やらん。これは返々僻事にて候なり。たとひ三心の名をだにもしらぬ無智の者なれども。彌陀の誓を頼奉て。すこしも疑ふ心なくして。此名號を唱れば。この心が即三心具足の心にてあるなり。さればたゞひらに信じてだにも念佛すれば。三心はをのづから具するなり。さればこそ。よにあさましき一文不通の輩の中にも。一すぢに念佛する者は。臨終正念にして目出たき往生をばすれ。これ現證あらたなる事なり。露塵も疑ふべからず。中々よくもしらぬ三心沙汰して。あしさまに心得たる人々は。臨終も思ふ様ならぬ事おほし。それにてたれもく心得べき也。又とき／＼別時の念佛を修して。心をも身をもはげまし。とくのへすゝむべきなり。日々に六萬遍七萬遍を唱へば。さても足ぬべき事にてあれども。人の心さまはいたく目なれ耳なれぬれば。いら／＼とすゝ

む心すくなく。あけくれは忿々として心閑ならぬ様にてのみ。疎略になりゆくなり。その心をすゝめんためには。時々別時の念佛を修すべきなり。しかれば善導和尚もねんごろにはげまし。惠心の先徳もくはしくをしへられたり。道場をもひきつくるひ。花香をも備たてまつらん事。たゞちからのたへたらんにしたがふべし。また我身をもことにきよめて道場に入て。或は三時或は六時などに念佛すべし。もし同行などあまたあらん時は。かはる／＼いりて不斷念佛にも修すべし。か様の事はをの／＼様に隨てはからふべし。善導和尚は。月の一日より八日に至るまで。或は八日より十五日に至るまで。或は十五日より廿三日に至るまで。或は廿三日より晦日にいたるまでと仰られたり。面々指合ざらん時ははからひて。七日の別時を常に修すべし。ゆめ／＼する事どもをいふものにかきかされて。不善の心あるべからず。またいかにも

臨終正念に安住して。目には阿彌陀ほとけをおがみ。口には彌陀の名號を唱へ。心には聖衆の來迎を待たてまつるべし。年比日比いみじく念佛の功を積たりとも。臨終に惡縁にもあひ。最後にあしき心もあこりて。念佛の心行をも退しぬるものならば。順次の往生しはづして。一生二生なりとも。三生四生なりとも。生死のながれにしたがひて。出離の道にとこほらんことは。まめやかに心うく。口惜き事ぞかし。されば善導和尚の御すゝめには。願弟子等。臨命終時。心不顛倒。心不錯亂。心不失念。身心無諸苦痛。身心快樂如入禪定。聖衆現前。乘佛本願。上品往生阿彌陀佛國。と。ねんごろに發願せよとの給へり。いよく臨終の正念をばいのりもし。ねがふべき事なり。臨終の正念をいのるは。彌陀の本願をたのまぬものぞなど申人は。善導にはいかほどまさりたる學生ぞと思へし。あなあさまし。をそろしをそろし。

また念佛は常にをこたらぬが。一定往生する事にてあるなり。善導すゝめての給はく。一發心已後。誓畢此生。無有退轉。唯以淨土爲期。又云。一心專念彌陀名號。行住坐臥。不問時節久近。念々不捨者。是名正定之業。順彼佛願。故といへり。かやうにすゝめましくたる事は。あまたおほけれども。ことごとくにかきのせがたし。頼べし仰べし。ふかく信ずべし。更に疑事なかれ。又まことしく念佛を行じて。げにしき念佛者になりぬれば。よろづの人を見るに。みなわがころにはおとりて。あさましくわるければ。わが身のよきまゝに。我はゆるしき念佛者にてあるものかな。誰々にも勝たりと思なり。この心をばよくつゝしむべき事なり。世もひろく。人もおほければ。山のおく林のなかにこもり居て。人にもしられぬ念佛者の。貴く目出たきさすがにおほくあるを。わがさかずしらぬにてこそあれ。さればわれ程

の念佛者よもあらじともふ僻事なり。この思は大憍慢にてあれば。即三心もかくるなり。またそれをたよりとして。魔縁のきたりて往生を妨ぐるなり。これ我身のいみじくて罪業をも滅し。極樂へもまいる事ならばこそあらめ。ひとへに阿彌陀佛の願力にて。煩惱をものぞき罪業をもけして。かたじけなく手づからみづから。極樂へむかへとりて歸らせまします事也。我ちからにて往生する事ならばこそ。われかしこしといふ慢心をばおこさめ。憍慢の心だにもおこりぬれば。心行かならずあやまる故に。たちどころに阿彌陀ほとけの願にそむきぬるものにて。彌陀も諸佛も護念し給はず。さるまゝには惡鬼のためにもなやまさるゝなり。返々もつゝしみて。憍慢の心をばおこすべからず。あなかしこくと。ねんごろにをしへをきたまへり。ふかく上人教誡の詞を信じて。敢て本願にほころおもひなく。往生の前途を遂べきものなり。

法然上人行狀畫圖第二十二

或人^{不詳}上人の勸化に歸してのち。安心起行のやう。こまかにたづね申けるにつきて。しるしつかはされける狀云。御返事こまかにうけたまはり候ぬ。か様に申事の一分御さとりをそへ。往生の御心ざしもよくなり候ぬべからんには。をそれをもかへりみ候べき事にて候はず。いくたびにても申たくこそ候へ。まことにわが身のいやしく。我心のつたなきをかへりみず。たれもみな彌陀のちかひをたのみて。決定往生のみちにおもひかんとこそおもふことにて候へども。人の心さまゝにて。たゞひとすぢに。ゆめまぼろしのうき世ばかりのたのしみさかへをのみもとめて。すべて後の世をもしらぬ人も候。又後をおそるべき事を思しりて。つとめをこなふ人につきても。かれこれに心をうつして。ひとすぢに一行をたのまぬ人も候。又いづれ

の行にても。もとよりこゝろざしはじめおもひ
そめつるをば。いかなることほりをきけども。
もとの執心をあらためぬ人も候。又今日はいみ
じく信をおこして。一すぢにおもひつきぬと見
る程に。のちにはうちすつる人も候。かくのみ
候て。まことしく浄土の一門にいりて。念佛の
一行をもはらにする人もありがたく候事は。我
身一のなげきとこそは人しれず思候へども。法
によりて人によらぬ理を。うしなはぬほどの人
もありがたき世にて候にや。をのづからすゝめ
こゝろみ候にも。われからあなづらはしさに。
申いづる事も。すてんずるにやと。思しらるゝ
事のみにて候事の心うかなく候て。このう
へはいまひときは。とく浄土にひまれて。さと
りをひらきてのちに。いそぎ此世界にかへりさ
たりて。神通方便をもて。結縁の人をも無縁の
ものをも。ほむるをもそしるをも。みなことご
とく念佛にすゝめられて。浄土へむかへんと。

ちかひをおこしてのみこそ。當時の心をもなぐ
さむる事にて候に。このおほせにぞ。わが心ざし
もしるしある心地して。あまりにうれしく候へ
ば。その儀にて候はゞ。おなじくはまめやかに
げに／＼しく。御沙汰候て。ゆくすゑもあやう
からず。往生もたのもしき程に。思食さだめさ
せ給べく候。詮じては。人のはからひ申べき事
にて候はず。よく／＼案じて御覽候へ。この事
にすぎたる御大事なにごとは候べき。この世
の名聞利養は。中々申ならぶるにもいま／＼し
く候。やがて昨日今日まなこにさへぎりみに
みちたるはかなさにて候めれば。事あたらしく
申たつるにも及候はず。たゞ返々御心をしづめ
て思食はからふべく候。さきには聖道浄土の二
門を心えわかちて。浄土の一門にいらせまし
すべき由を申候き。いまは浄土門につきて行ず
べき様を申べし。浄土に往生せんとおもはん人
は。安心起行と申て。心と行と相應すべきなり。

その心といふは。觀無量壽經にときて。もし衆
生あて。わが國に生まれんとおもはんものは。
三種の心をおこしてすなはち往生す。なにをか
三とする。一には至誠心。二には深心。三には
迴向發願心なり。三心を具せるものは。かなら
ずかの國に生といへり。善導和尚この三心を釋
していはく。はじめに至誠心。至といは。眞な
り。誠といは。實なり。一切衆生の身口意業に。
修する所の解行。かならず眞實心の中になすべ
きことをあかさと思ふ。外には賢善精進の相
を現じ。内には虚假をいだく事をえざれ。内外
明闇をえらばず。かならず眞實をもちぬよ。か
るがゆへに至誠心となづくといへり。この釋の
心は。至誠心といは。眞實心なり。その眞實と
いは。身にふるまひ口にいひ心におもはん事。み
なまことの心を具すべきなり。すなはら内はむ
なしくして。ほかをかざる心なきをいふなり。此
心は。うき世をそむきて。まことのみにちにおも

むくとおぼしき人々の中に。おほく用意すべき
心ばへにて候なり。われも人も。いふばかりな
きゆめの世を執ずるこゝろのふか／＼りしなごり
にて。ほど／＼につけて。名聞利養わづかにふ
りすてたるばかりを。かた／＼いみじき事にし
て。今世さまにも心のたけのうるさきにとりな
して。さとりあさき世間の人の。心ばしらす。
たうとがりいみじがるを。これこそは本意なれ
と心ざしたる心にて。やみこのほとりをかさは
なれて。かすかなる住所をたづぬるまでも。心
のしづまらんためをばつぎになして。本尊道場
の莊嚴。まがきのうちに花のこだちなどの。心
ぼそくものあはれならんことがらを。人に見え
さかれん事をのみ執ずるほどに。つゆの事も人
のそしりならん事あらじと。おもひいとなむ心
よりほかにおもひまじふる事なし。か様なる心
にのみなして佛のちかひをたのみ往生をねがは
んといふことは。おもひいれず沙汰もせぬ事

の。やがて至誠心かけて。往生せぬ心ばへにて候なり。又かく申候へば。ひとへに今世の面目をば。いかにてもありなん。人のそしりをかへりみぬがよきぞと。申儀にては候はず。人目をかへりみる事は候へども。それをのみおもひいれて。往生のさはりになるかたをば。かへりみぬやうにひきなされ候はん事の。返々をろかにくちあしく候へば。御身にあたりても。御心をさせまいらせんがために申候なり。この心につきて四句の不同あるべし。一には外相はたうとげにて内心は貴からぬ人あり。二には外相も内心も共に貴からぬ人あり。三には外相はたうとげもなく内心はたうとき人あり。四には内外共に貴き人あり。この四人が中に。さきの二人は。いまさらふところの至誠心かけたる人なり。これを虚假の人となづくべし。のちの二人は。至誠心具したる人なり。これを眞實の行者となづくべし。されば詮ずる所は。たゞ内心にまことの

心をおこして。外相をばよくもあしくも。とてもかくてもあるべきかとおぼえ候也。おほかたこの世をいとはん事も。極樂をねがはん事も。人目ばかりをおもはて。まことの心をおこすべきて候也。是を至誠心と申なり。二に深心といは。善導の釋にいはく。深心といは。すなはちこれふかく信ずる心なり。これに二種あり。一には決定してふかく。わが身は煩惱具足せる罪惡生死の凡夫なり。善根薄少にして。曠劫よりこのかたつねに流轉して。出離の縁なしと。信ずべし。二にはふかくかの阿彌陀佛の四十八願をもて。衆生を攝取し給。すなはち名號を稱すること。下十聲にいたるまで。かの願に乗じて。さだめて往生する事をうと信じて。乃至一念もうたがふ事なきがゆへに深心となづく。又深心といふは。決定して心をたて。佛教にしたがひて修行して。ながく疑心をのぞくなり。一切の別解別行。異學異見異執のために。退失

傾動せられざれといへり。この釋の心は。はじめにはわが身のほどを信じ。後には佛の願を信ずるなり。その故は。もしはじめの信心をあげずして。後の信心を釋し給はば。もろくの往生をねがはん人。たとひ本願の名號をばとなふとも。みづから心に貪慾嗔恚の煩惱をおこし。身に十惡破戒等の罪惡をもつくりたる事あらば。みだりに自身をかるしめて。身のほどをかへり見て本願を疑ひ候はまし。いまこの本願に十聲一聲まで往生すといふは。おぼろげの人にあらじなどぞ。おぼえ候はまし。しかるを善導和尚。未來の衆生の。このうたがひをおこさん事をかゝみて。この二の信をあげて。我等がいまだ煩惱をも斷ぜず。罪業をもつくる凡夫なれども。ふかく彌陀の本願を信じて念佛すれば。一聲にいたるまで。決定して往生するよしを釋したまへる。この釋のことに心にそみていみじくおぼえ候なり。まことにかくだにも。釋

し給はざらましかば。往生は不定にぞおぼえ候はましと。あやうくおぼえ候。さればこの義を心えわかぬ人やらん。わが心のわろければ。往生はかなはじとこそは。申あひて候めれ。そのうたがひのやがて往生せぬ心にて候けるものを。たゞ心の善惡をかへりみず。罪のかるきおもきをも沙汰せず。心に往生せんとおもひて。口に南無阿彌陀佛となへては。聲につきて決定往生の思をなすべし。その決定心によりて。すなはち往生の業はさだまるなり。かく心えねば。往生は不定なり。往生は不定とおもへば。やがて不定なり。一定と思へば。一定する事にて候なり。されば詮はふかく信ずる心と申候は。南無阿彌陀佛と申せば。その佛の誓にて。いかなる身をもさらはず。一定むかへ給ぞと。ふかくたのみて。いかなるとがをかへりみず。うたがふ心のすこしもなきを申候なり。又別解別行の人にやぶられざれと申は。さとりこと

に。行ことならん人のいはんことにつきて。念佛をもすて。往生をうたがふ事なかれと申候なり。乃至たとひ佛きたりて光をはなち舌をいだして。煩惱罪惡の凡夫。念佛して決定往生すといふ事はひが事ぞ。信ずべからずといふとも。それによりて。一念も疑心あるべからず。そのゆへは。一切の佛はみな同心に衆生をみちびき給なり。まづ阿彌陀如來願をおこしてのたまはく。われ佛にならんに。十方の衆生。わが國にむまれんとねがひて。わが名號を唱る事。下十聲にいたるまで我願力に乗じて。もしむまれずといはゞ。正覺をとらじとちかひ給ふ。その願成就して。すでに佛になりたまへり。しかるを釋迦佛のこの世界にいて。この佛の本願をとさ給へり。又六方にをのゝ恆河沙數の佛ましゝて。一々に舌をのべて三千大千世界におほひ。無虛妄の舌相を現して。釋迦佛の彌陀の本願をほめて。一切衆生をすゝめて。かの佛の名號を

となふれば。さだめて往生すときたまへるは。決定してうたがひなき事なり。一切衆生みなこの事を信ずべしと證誠し給へり。かくのごとく一切の佛。一佛ものこらず同心に。一切の凡夫念佛して。決定往生すべきむねを。或は願をたて。或はその願をとき。或はその説を證し。すゝめ給へり。このうへ。またいかなる佛のきたりて。往生すべからずとは。いへるぞといふことはりの候ぞかし。このゆへに。佛きたりての給ともおどろくべからずと申なり。佛なをしかなり。いはんや菩薩をや。いはんや緣覺をや。いはんや凡夫をやと心えつれば。一たびこの念佛往生の法門をさして。信をおこしてのちには。いかなる人。とかく申とも。疑心あるべからずとこそはおぼえ候へ。これを深心と申候也。三に迴向發願心といふは。善導の釋にいはく。過去をよび今生の身口意業に。修するところの。世出世の善根。をよび他の一切の凡聖

の。身口意業に修する所の。世出世の善根を隨喜して。この自他所修の善根をもて。ことごとくみな眞實の深信の心の中に迴向して。かの國にむまれんと願するなり。又迴向發願といふは。かならず決定の眞實心の中に迴向して。むまるゝことをうる思をなせ。この心ふかく信じて。なをし金剛のごとくにして。異學異見。別解別行の人のために。動亂破壊せられざれといへり。この釋の心は。まづわが身につきて。さきの世。をよび今生に身にも口にも。つくりたらしむ功德を。みなことごとく極樂に迴向して。往生をねがふなり。次にはわが身の事にても。人の事にても。この世の果報をものり。又おなじのちの世の事なりとも極樂ならぬ餘の淨土にむまれんとも。もしは都率にむまれんとも。もしは人中天上にむまれんともねがひ。かくのごとくかれにもこれにも。ことなる事に迴向する事なくして。一向極樂に往生せんと迴向すべきなり。も

しこの理をおもひさだめざらんさきに。この世のことをもいのり。あらぬ餘のかたへも迴向したる功德どもを。みなとり返して。いまはことごとく往生の業になさんと迴向すべきなり。また一切の善を。みな極樂に迴向すべしと申せばとて。念佛一門に歸して。一向に念佛を申さん人のことさらに餘の功德をつくりあつめて。迴向せよと申には候はず。たゞすぎぬるかたにつくりをきたらん功德をも。もし又これよりのちなりとも。をのづからたよりにしたがひて。念佛のほかに餘の善を修する事あらんをも。しかしながら往生の業に迴向すべしと申事にて候なり。この心金剛のごとくにして。別解別行の人にやぶられざれと申候は。さきに申つる様に。異解の人にをしへられて。かれこれに迴向する事なかれと申候なり。金剛はやぶれぬものにて候なれば。たとへにとりて。この心のやぶられざらん事も。金剛のごとくなれと申候。これを

廻向發願心とは申候なり。三心のありさま。おろく申ひらき候ぬ。この三心を具して。かならず往生するなり。もし一心もかけぬれば。往生することえずと。善導釋し給たれば。往生をねがはん人は。尤この三心を具すべきなり。至^レこれを安心とはなづけ候なり。次に起行といふは。この申ひらき候心ばへにて。一向に念佛を申させおはしますべきにて候。又こと行にて候とも極樂にかたどりて候はん行を。かれこれに心をかけずして。つとめ行ずべきにて候なり。おほよそ極樂にむまれ候べき行には。阿彌陀佛の本願にも。釋迦佛の説教にも。善導の解釋にも。諸師の料簡にも。念佛をもて本體とする事にて候なり。そのほかの行は。とりわきたれんもすめ給事候はず。さは候へども。いづれもく^レ聖教をならひ。何事にもおもひあてがひていのり申に。みなことく^レ。そのなかだちとならずといふことの候はねば。念

佛いかにもく^レ信じたくおもはざらん人は。又心のひかんにしたがつひて。いづれの行にてもつとめんにしたがつひて。極樂に廻向せよと申候也。
取^レ已^レ上
又ある人。往生の用心につきて。おぼつかなき事を。百四十五箇條までして。たづね申たりけるに。上人の御返事ありき。少々これをしるす。

一心を一にして。心よくなをり候はずとも。何事ををこなひ候はずとも。念佛ばかりにて。淨土へはまいり候べきか。答。心のみだるはこれ凡夫のならひにてちからをよばぬ事にて候。たゞ心をひとつにして。よく御念佛せさせたまはゞ。その罪を滅して。往生せさせ給べきなり。その妄念よりもおもき罪も。念佛だにもし候へば。うせ候なり。

一日所作は。かならずかすをさだめ候はずとも。よまれんにしたがつひてよみ。念佛申候べ

一 一きか。答。かすをさだめねば懈怠になり候へば。數をさだめ候がよき事にて候。
一 一にらき。ひる。鹿をくひて。香うせ候はずとも。つねに念佛は申候べきやらん。答。念佛はなにをもさはらぬ事にて候。
一 一念佛をば。日所作に。いくらばかりあてゝか申候べき。答。念佛のかすは。一萬遍をはじめて。二萬三萬五萬六萬。乃至十萬まで申候なり。此中に御こゝろにまかせて。おほしめし候はん程を。申させおはしますべし。
一 五色の絲は。佛にはひだりにと仰候き。わが手にはいづれのかたにて。いかゞひき候べき。答。左右の手にてひかせ給へし。
一 齋し候は。功德にて候やらん。かならずすべき事にて候やらん。答。齋は功德をうる事にて候なり。六齋の御齋を。さも候ぬべき。又御大事にて。御病などもおこらせおはしましぬべく候はゞ。さなくとも。たゞ御念佛だに

も。よくく^レ候はゞ。それにて生死をはなれ。淨土に往生せさせおはしますんずる事は。これによるべく候。

一 かならず佛を見。いとをひかへ候はずとも。われ申さずとも。人の申さん念佛をさゝても死候はゞ。淨土には往生し候べきやらん。答。かならずいとをひくと云事候はず。佛にむかひまいらせねども。念佛だにもすれば往生し候なり。又聞てもし候。それはよくく^レ信心ふかくての事にて候。

一 ながく生死をはなれ。三界にむまれじと。おもひ候に。極樂の衆生となりても。その縁つきぬれば。この世にひまると申は。まことに候か。たとひ國王ともなり。天上にもひまれば。たゞ三界をわかれんとおもひ候に。いかにつとめをこなひてか。歸り候はざるべき。答。これもろく^レのひが事にて候。極樂へひとたびむまれ候ぬれば。ながくこの世に

かへる事候はず。みなほとけになる事にて候なり。たゞし人をみちびかんためには。ことさらにかへる事も候。されども生死にめぐる人にては候はず。三界をはなれ。極樂に往生するには。念佛にすぎたる事は候はぬなり。よくよく御念佛候べきなり。

一 歌よむは罪にて候か。答。あながちに得候はじ。但罪ともなり。功德ともなる。

一 酒のむは罪にて候か。答。まことには。のむべくもなければども。この世のならひ。

一 錫杖はかならず誦すべきか。答。さなくとも。そのいとまに念佛一遍も申べし。尼法師こそ。ありくとき。虫のために誦し候へ。

一 臨終に。善知識にあひ候はずとも。日比の念佛にて。往生はし候べきか。答。善知識にあはずとも。臨終もふやうならずとも。念佛申さば往生すべし。

一心に妄念のいかにも思はれ候はいかゞし候べ

き。答。たゞよくよく念佛を申させ給へ。一ねてもさめても。口あらはて。念佛申候はんはいかゞ候べき。答。くるしからず。

一 六齋に。にら。ひる。いかに。答。めさゞらんはよく候。

一 毎日の所作に。六萬十萬の數遍を。念珠をくりて申候はんと。二萬三萬を念珠をたしかに。一づゝ申候はんと。いづれかよく候べき。答。凡夫のならひ。二萬三萬をあつとも。如法にはかなひがたからん。たゞ數遍のおほからんにはすぐべからず。名號を相續せんためなり。かならずしもかずを要とするにはあらず。たゞ常に念佛せんがためなり。かずをさだめぬは懈怠の因縁なれば數遍をすゝむるにて候。

一 魚鳥くひて。いかけして。經はよみ候べきか。答。いかけしてよむ本體にて候。せてよむは。功德と罪と共に候。但いかけせても。よまぬ

よりは。よむはよく候。

一 所作かきてしいれ。かねてかゝんずるを。まづし候いかに。答。しいるゝはくるしからず。かねては懈怠なり。

一 破戒の僧。愚癡の僧。供養せんも功德にて候か。答。破戒の僧愚癡の僧を。すゑの世には。佛のごとくとたむべきにて候なり。この御使に申候ぬ。きこしめし候へ。

此御詞は。上人のまさしき御手なり。阿彌陀經のうらにをしたり。

法然上人行狀畫圖第二十二

或人往生の用心につきて。條々の不審を尋申たりけるに。上人の御返事云。

一 毎日の御所作。六萬遍。めてたく候。うたがひの心だにも候はねば。十念一念も。往生はし候へども。多く申候へば。上品にむまれ候。釋にも。上品華臺見慈主。到者皆因念佛多と

候へば。

一 宿善によりて。往生すべしと人の申候らん。ひが事にては候はず。かりそめの此世の果報だにも。さきの世の罪功德によりて。よくもあしくもむさるゝ事にて候へば。まして往生程の大事。かならず宿善によるべしと。聖教にも候やらん。たゞし念佛往生は。宿善のなきにもより候はぬやらん。父母をころし。佛身より血をあやしたる程の罪人も。臨終に十念申て往生すと。觀經にも見へて候。しかるに宿善あつき善人は。をしへ候はねども。惡にをそれ。佛道に心すゝむ事にて候へば。五逆などは。いかにもくつくるまじき事にて候なり。それに五逆の罪人。念佛十念にて往生をとげ候ときは。宿善のなきにもより候まじく候。されば經に。若人造多罪。得聞六字名。火車自然去。華臺即來迎。極重惡人。無他方便。唯稱彌陀。得生極樂。若有重業障。

無生淨土因。乘彌陀願力。必生安樂國。この文の心は。もし五逆をつくれりとも。彌陀の六字の名をさかば。火の車自然にさりて。運臺さたりてむかふべし。又きはめておもき罪人の。他の方便なからんも。彌陀をとなへたてまつらば。極樂にむさるべし。又もしおもきさはりありて。淨土にむさるべき因なくとも。彌陀の願力に乗なば。安樂國にむさるべしと候へば。たのもしく候。又善導の釋には。曠劫よりこのかた六道に輪廻して。出離の縁なからん。常没の衆生をむかへんがために。阿彌陀佛は佛になりたまへりと候。その常没の衆生と申候は。恆河のそこにしづみたるいさ物の。身おほきにながくして。その河には。かりてえはたらかず。つねにしづみたるに。惡世の凡夫をばたとへられて候。又凡夫と申す二の文字をば。狂醉のごとしと。弘法大師釋したまへり。げにも凡夫の心はものぐ

るび。さけにえひたるがごとくして。善惡につけて。おもひさだめたる事なし。一時に煩惱も。たびまじはりて。善惡みだれやすければ。いづれの行なりとも。わがちからにては。行じがたし。しかるに生死をはなれ。佛道に。いるには。菩提心ををこし。煩惱をつくして。三祇百劫難行苦行してこそ。佛にはなるべきにて候に。五濁の凡夫わがちからにては。願行をなはる事かなひがたくて。六道四生にめぐり候なり。彌陀如來この事をかなしみ思食て。法藏菩薩と申し。いにしへ。われらが。行じがたき僧祇の苦行を。兆載永劫があひだ。功をつみ徳をかさねて。阿彌陀佛になりたまへり。一佛にそなへたまへる。四智三身十力無畏等の一切の内證の功德。相好光明說法利生等の外用の功德。さまざまなるを。三字の名字の中におさめいれて。この名號を。十聲一聲までも。となへんものを。かならずむか

へん。もしむかへずば。われ佛にならじと。ちかひ給へるに。かの佛いま現に世にましまして。佛になりたまへり。名號をとなへん衆生。往生うたがふべからずと。善導もおほせられて候なり。この様をふかく信じて。念佛をこたらず申て。往生うたがはぬ人を。他力を信じたるとは申候なり。世間の事にも他力は候ぞかし。足なえ腰わたるもの。とをさ道をあゆまんとおもはんはんに。かなはねば船車にのりてやすくゆく事。これわがちからにあらず。乗物のちからなれば他力なり。あさましき惡世の凡夫の。詔曲の心にて。かまへつくりたるのり物にだにも。かゝる他力あり。まして五劫のあひだ。思食さだめたる。本願他力の船いかだにのりなば。生死の海をわたらん事。うたがひ思食べからず。しかのみならず。やまひをいやす草木。くろがねをとる磁石。不思議の用力あり。麝香はかうばしき

用あり。犀の角は水をよせぬちからあり。これみな心なき草木。ちかひをおこさぬ。けだものなれども。もとより不思議の用力は。かくのみこそ候へ。まして佛法不思議の用力。ましまさざらんや。されば念佛は一聲に。八十億劫の罪を滅する用あり。彌陀は。惡業深重のものを來迎し給ちからましますと思食と。りて。宿善のありなしも沙汰せず。罪のふかきあさきもかへりみず。たゞ名號となふるもの。往生するぞと信じ思食べく候。すべて破戒も持戒も貧窮も福人も。上下の人をさらはず。たゞ我名號をだに念せば。石かはらを變じて。金となさんがごとし。來迎せんと御約束候也。法照禪師の。五會法事讚にも。彼佛因中立弘誓。聞名念我惣迎來。不簡貧窮將富貴。不簡下智與高才。不簡多聞持淨戒。不簡破戒罪根深。但使迴心多念佛。能令瓦礫變成金。たゞ御ずをくらせおはしまして。御舌をだ

にもはたらかされず候はんは。懈怠にて候べし。たゞし善導の。三縁の中の親縁を釋し給に。衆生ほとけを禮すれば。佛これを見たまふ。衆生ほとけをとなふれば。佛これをさし給ふ。衆生佛を念ずれば。佛も衆生を念じたまふ。かるがゆへに阿彌陀佛の三業と。行者の三業とかれこれひとつになりて。佛も衆生も。おや子のごとくなるゆへに。親縁となづく候ぬれば。御手にずゝをもたせたまひて候はゞ。佛これを御らん候べし。御心に念佛申すぞかしと思食候はゞ。佛も行者を念じ給べし。されば佛に見えまいらせ。念ぜられまいらす。御身にてわたらせたまひ候はんずるなり。さは候へども。つねに御したのはたらくべきにて候なり。三業相應のためにて候べし。三業とは。身と口と意とを申候なり。しかも佛の本願の稱名なるがゆへに。こゑを本體とは思食べきにて候。さて我耳にきこゆる

程申候は。高聲の念佛のうちにて候なり。一御無言目出たく候。たゞし無言ならて申念佛は。功德すくなしと思食なばあしく候。念佛をば金にたとへたる事にて候。金は火にやくにもいろまさり。水にいろにも損せず候。かやうに念佛は妄念のおこる時申候へどもけがれず。ものを申すずるにもまぎれ候はず。そのよしを御心をながら。御念佛の程は。こと事ませずして。いまずし念佛のかずをそへんと。おぼしめさんは。さにて候。もし思食わすれて。ふと物など仰候て。あなあさまし。いまはこの念佛。むなしくなりぬと。思食す御事は。ゆめ／＼候まじく候。いかやうにて申候とも往生の業にて候べく候。一百万遍の事。佛の願にては候はねども。小阿彌陀經に。若一日若二日。乃至七日。念佛申人。極樂に生ずると。とかれて候へば。七日念佛申べきにて候。その七日のほどのかずは。

百万遍にあたり候よし。人師釋して候へば。百万遍は。七日申べきにて候へども。たへ候はざらん人は。八日九日などにも申され候へかし。さればとて百万遍申さざらん人の。ひまるまじきにては候はず。一念十念にても。ひまれ候なり。一念十念にても。ひまれ候ほどの念佛と思候うれしさに。百万遍の功德をかさぬるにて候也。

一七分全得の事。仰のまゝに申げに候。さてこそ逆修はすることにて候へ。さ候へば後の世をとぶらひぬべき人の候はん人も。それをたのまずして。われとはげみて念佛申て。いそぎ極樂へまいりて。五通三明をさとりて。六道四生の衆生を利益し。父母師長の生所をたづねて。心のまゝにむかへとらんと。思べきにて候也。また當時日ごとの御念佛をも。かつ／＼廻向しまいらせられ候べし。なき人のために念佛を廻向し候へば。阿彌陀佛光をは

なちて。地獄餓鬼畜生をてらし給候へば。この三惡道にしづみて苦をうくるもの。そのくろしみやすまりて。命をはりてのち。解脱すべきにて候。大經云。若在三途勤苦之處。見此光明皆得休息。無復苦惱。壽終之後。皆蒙解脱。一本願のうたがはしき事もなし。極樂のねがはしからぬにてはなけれども。往生一定とおもひやられて。とくまいりたきこゝろの。あさゆふはしみ／＼ともおぼえずと仰候こと。まことよからぬ御ことにて候。淨土の法門をきけども。さかざるがごとくなるは。このたび三惡道よりいて。罪いまだつきざる者なりと。經にもとかれて候。又此世をいとふ御心のうすくわたらせ給にて候。そのゆへは。西國へくだらんとおもはぬ人に。船をとらせ候はんに。舟の水にうかぶ事なしとはうたがひ候はねども。當時さしているまじけれ

ば。いたくうれしくも候まじきぞかし。さて敵の城なんどにこめられて候はんが。からくしてにげてまかり候はんみちに。大なる河海などの候て。わたるべき様もなからんあり。親のもとより。船をまうけてむかへにたびたらんは。さしあたりて。いかばかりかうれしく候べき。これが様に。貪瞋煩惱の敵にしばらく。三界の焚籠にこめられたる我等を。彌陀悲母の御志ふかくして。名號の利劍をもちて。生死のきづなをさり。本願の要船を苦海の波にうかべて。かの岸につけたまふべしと。思ひ候はんうれしさは。歡喜の涙袂をしぼり。渴仰の思ひ肝にそむべきにて候。せめて身の毛もいまだつ程に思へばにて候を。のさに思食候はんは。本意なく候へども。それもとほりにて候。罪つくる事こそ。をしへ候はねども。心にもそみて覺候へ。そのゆへは。無始よりこのかた。六趣にめぐりし時

も。形はかはれども。心はかはらずして。色々さまざまに。つくりならひて候へば。今もうぬ／＼しからず。やすくはつくられ候へ。念佛申て往生せばやと思ふ事は。此度はじめてわづかに聞得たる事にて候へば。きとは信ぜられ候はぬなり。そのうへ。人の心は頓機漸機とて。ふたしな候なり。頓機は聞てやがてさとの心にて候。漸機はやう／＼さとの心にて候なり。ものまうてなどをし候に。足はやき人は。一時にまいつく所へ。足をそきものは。日くらしにもかなはぬ様には候へども。まいる心だにも候へば。遂にはとげ候様に。ねがふ御心だにわたらせ給候はゞ。年月をかさねても。御信心もふかくならせおはしますべきにて候。

て候へども。善導の御心にては。極樂へまいらんと心ざして。多くも少くも。念佛申さん人の。命つさん時は。阿彌陀佛。聖衆と共に來て。迎へ給べしと候へば。日比だにも御念佛候はゞ。御臨終に善知識候はずとも。佛は迎へさせ給ふべきにて候。又善知識の力にて。往生すると申候事は。觀經の下三品の事にて候。下品下生の人などこそ。日比念佛も申候はず。往生の心も候はぬ逆罪の人の。臨終にはじめて。善知識にあひて。十念具足して往生するにて候へ。日比より他力の願力をたのみ。思惟の名號を唱へて。極樂へ參らんと思ひ候はん人は。善知識の力候はずとも。佛は來迎し給ふべきにて候。又かろき病をせんと。祈候はん事も。心かしく候へども。病もせてしぬる人も。うるはしく。をはる時には。斷末摩のくるしみとて。八萬の塵勞門より。無量のやまひ身をせめ候事。百千のほ

こつるぎにて。身をさりさくがごとし。されば眼なきがごとくして。見んとおもふものをもみず。舌の根すくみて。いはんと思ふこともいはれず候なり。これは人間の。八苦のうち死苦にて候へば。本願信じて。往生ねがひ候はん行者も。この苦はのがれずして。悶絶し候とも。息のたえん時は。阿彌陀ほとけの力にて。正念になりて往生をし候べし。臨終はかみすぢさるが程の事にて候へば。よそにて凡夫さだめがたく候。たゞ佛と行者との心にてしるべく候なり。そのうへ三種の愛心をこり候ぬれば。魔縁たよりをえて。正念を失ひ候なり。此愛心をば。善知識の力ばかりにては。のぞきがたく候。阿彌陀ほとけの御力にて。のぞかせ給ふべく候。諸邪業繫無能礙者たのもしく思食べく候。